Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0

CMM 管理 － Sun Blade 6000/Sun Blade 6048
モジュラーシステムガイド

Part No.: E23690-01
2011 年 7 月、Revision 01

Copyright © 2008, 2010, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

リサイクル
してください

Adobe PostScript

目次

このマニュアルの使用法　ix

▼　製品のソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード　xi

Oracle ILOM CMM の概要　1

モジュラーシステムシャーシについて　2

Oracle ILOM CMM 機能の概要　2

Oracle ILOM のバージョン　3

Oracle ILOM CMM のドキュメント　3

このドキュメントについて　4

Oracle ILOM CMM の初期設定　5

Oracle ILOM CMM への接続　6

インストールを開始する前に　6

▼　シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続　8

▼　IPv4 ネットワークアドレスの表示および設定　9

▼　IPv4/IPv6 デュアルスタックのネットワークアドレスの表示と設定　11

▼　IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト　16

ネットワーク接続を使用した Oracle ILOM CMM へのログイン　17

▼　Web インタフェースを使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン　18

▼　CLI を使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン　19

CMM の Ethernet ポートの有効化　19

▼ Web インタフェースを使用した Ethernet ポートの有効化　20

▼ CLI を使用した Ethernet ポートの有効化　21

ブレード SP CLI プロンプトの変更　22

ブレード SP CLI プロンプトについて　22

▼ ブレード SP CLI プロンプトの設定　23

▼ ブレード SP CLI プロンプトのデフォルトへのリセット　23

ファームウェアの更新手順　25

Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新　26

Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新に関する追加情報　26

CMM の IP アドレスの取得　27

現在のファームウェアバージョンの確認　27

▼ Web インタフェースを使用してファームウェアのバージョンを確認する　28

▼ 管理 Ethernet ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する　29

▼ シリアル管理ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する　29

ファームウェアのファイルのダウンロード　30

▼ ファームウェアのファイルのダウンロード　30

Oracle ILOM ファームウェアの更新　31

▼ Web インタフェースを使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する　32

▼ CLI を使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する　33

NEM ファームウェアの更新　34

NEM のファームウェアの更新について　35

インストールを開始する前に　35

▼ CLI を使用して NEM のファームウェアを更新する　35

▼ Web インタフェースを使用して NEM のファームウェアを更新する　38

CMM を使用したシャーシコンポーネントのファームウェアの更新　41
シャーシコンポーネントのファームウェアについて　41
▼ Web インタフェースを使用して ファームウェアを更新する　42
▼ CLI を使用して ファームウェアを更新する　44
Oracle ILOM CMM のリセット　45
▼ Web インタフェースを使用して Oracle ILOM をリセットする　46
▼ CLI を使用して Oracle ILOM CMM をリセットする　46

CMM の電力管理　47
軽負荷効率モード (LLEM)　48
LLEM について　48
▼ Web インタフェースを使用して LLEM を有効または無効にする　49
▼ Web インタフェースを使用して冗長モードを有効または無効にする　50
▼ CLI を使用して LLEM を有効または無効にする　50
▼ CLI を使用して冗長モードを有効にする　51
▼ CLI を使用して非冗長モードを有効にする　51
電源装置のファン速度を調整する　52
電源装置のファン速度の調整について　52
▼ Web インタフェースを使用して電源装置のファン速度を設定する　52
▼ CLI を使用して電源装置のファン速度を設定する　53
電力管理ポリシーの無効化　54
電力管理ポリシーについて　54
▼ Web インタフェースを使用して電力管理ポリシーを無効にする　54
▼ CLI を使用して電力管理ポリシーを無効にする　55
Sun Blade 6048 の特定の場合における Oracle ILOM 3.0　56
2 本の電源コード構成の場合の Oracle ILOM の動作　56
▼ 2 本の電源コード用の CMM を設定する　56

電源装置の特定の状態における Oracle ILOM 3.0 の表示　57
AC ケーブルの接続が解除された場合　57
AC ケーブルの接続が解除後に再接続された場合　58
`stop /CH` コマンド　59
`start /CH` コマンド　59
PSU が 1 つ取り外されている場合　60
PSU が再挿入される場合　61

Sun Blade Zone Manager　63
Sun Blade Zone Manager について　64
サポートされる Oracle ILOM ユーザーインタフェース　64
Web インタフェースを使用した Zone Manager へのアクセス　65
CLI を使用した Zone Manager へのアクセス　67
ゾーン構成の概要　68
ゾーン機能のコマンド　68
サーバーブレードへのストレージの割り当て　69
ストレージへのサーバーブレードの割り当て　70
サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成　71
SAS-2 対応のハードウェア　71
その他のシステム要件　71
Sun Blade Zone Manager へのアクセス　72
▼ Web インタフェースを使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする　72
▼ CLI を使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする　76
シャーシのストレージアクセス構成の作成　78
シャーシのストレージアクセスの作成について　78
Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成　79
オプション 1: 個別のディスクごとに割り当てる　79
オプション 2: 隣接する個別のディスクごとに割り当てる　80

オプション 3: ストレージブレードごとに割り当てる　81

オプション 4: 隣接するストレージブレードごとに割り当てる　82

▼ Quick Setup を使用して Web インタフェースでシャーシの初期ストレージ構成を作成する　83

Detailed Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成　85

▼ Detailed Setup を使用して Web インタフェースでシャーシのストレージ構成を作成する　85

CLI を使用したシャーシのストレージ構成の作成　88

▼ CLI を使用してシャーシのストレージ構成を作成する　88

シャーシのストレージアクセス構成の表示または変更　90

▼ Web インタフェースを使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する　91

▼ CLI を使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する　96

▼ Web インタフェースを使用して複数のサーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる　98

▼ Web インタフェースを使用してストレージアクセス構成表を表示する　101

シャーシのストレージアクセス構成の保存　103

ゾーン構成の保存に関する重要な考慮事項　103

新規または変更したストレージアクセス構成の保存　104

ストレージアクセス構成のバックアップ　106

▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する　106

▼ CLI を使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する　107

ゾーン構成の復元　108

▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成を復元する　108

▼ CLI を使用してゾーン構成を復元する　110

ゾーン構成のリセット　111

▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成をリセットする　111

▼ CLI を使用してゾーン構成をリセットする　112

ゾーンのパスワードのリセット　113

- Web インタフェースを使用してゾーンのパスワードをリセットする　113
- CLI を使用してゾーンのパスワードをリセットする　114

索引　115

このマニュアルの使用法

『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CMM 管理 － Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』では、Sun Blade 6000 または Sun Blade 6048 モジュラーシステムのシャーシコンポーネントを管理する方法を説明しています。システムの管理には、Sun Blade シャーシ管理モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) を使用します。このマニュアルでは、これを Oracle ILOM CMM と呼びます。

このガイドは、その他の Oracle ILOM 3.0 のドキュメントライブラリと一緒に使用してください。このガイドは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ、システムハードウェアの管理経験があるユーザーを対象としています。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- x ページの「ドキュメントとフィードバック」
- xi ページの「製品のダウンロード」
- xii ページの「Oracle ILOM 3.0 のバージョン番号」
- xiii ページの「ドキュメント、サポート、およびトレーニング」

ドキュメントとフィードバック

Oracle ILOM 3.0 のドキュメントコレクションは、次の Web サイトからダウンロードできます。(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage)

用途	タイトル	形式
オンラインドキュメントセット	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 HTML ドキュメントコレクション	HTML
クイックスタート	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 クイックスタートガイド』	PDF
リモート KVMS	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 リモートリダイレクションコンソール − CLI および Web ガイド』	PDF
日常的な管理機能	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − 概念ガイド』	PDF
日常的な管理 Web 手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − Web 手順ガイド』	PDF
日常的な管理 CLI 手順	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 日常的な管理 − CLI 手順ガイド』	PDF
プロトコル管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 プロトコル管理 − SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN ガイド』	PDF
CMM 管理	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) CMM 管理ガイド − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』	PDF
保守と診断	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 保守と診断 − CLI および Web ガイド』	PDF
最新情報	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新およびリリースノート』	PDF

このドキュメントに関するフィードバックは、次の Web サイトから提供してください。(http://www.oraclesurveys.com/se.ashx?s=25113745587BE578)

製品のダウンロード

各 Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムの Oracle ILOM 3.0 ファームウェアの更新は、My Oracle Support (MOS) Web サイトからダウンロードできるスタンドアロンソフトウェアアップデートによって入手できます。MOS Web サイトからソフトウェアアップデートをダウンロードするには、次の手順を参照してください。

▼ 製品のソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード

1. 次の Web サイトに移動します (http://support.oracle.com)。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページ上部にある「Patches and Updates (パッチと更新)」タブをクリックします。
4. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで「Product or Family (Advanced Search) (製品またはファミリ (詳細検索))」を選択します。
5. 「Product? Is (製品)」フィールドに Sun Fire X4470 など、製品名の一部またはすべてを入力し、一致する結果が表示されたら、目的の製品を選択します。
6. 「Release? Is (リリース)」リストボックスで下向きの矢印をクリックします。
7. 表示されたウィンドウで製品フォルダアイコンの横にある三角形 (>) をクリックして選択肢を表示し、目的のリリースを選択します。
8. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで「Search (検索)」をクリックします。

   製品ダウンロードのリスト (パッチのリスト) が表示されます。
9. たとえば、Sun Fire X4470 SW 1.1 リリースの ILOM および BIOS 部分用の Patch 10266805 など、目的のパッチ名を選択します。
10. 表示された右側のパネルの「Download (ダウンロード)」をクリックします。

Oracle ILOM 3.0 のバージョン番号

Oracle ILOM 3.0 では、システムで動作している Oracle ILOM のバージョンを識別しやすいように、新しいバージョン番号方式を採用しています。この番号方式では、5 つのフィールドがある文字列を使用しています。たとえば、`a.b.c.d.e` となります。

- `a` − Oracle ILOM のメジャーバージョンを示します。
- `b` − Oracle ILOM のマイナーバージョンを示します。
- `c` − Oracle ILOM の更新バージョンを示します。
- `d` − Oracle ILOM のマイクロバージョンを示します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームのグループ単位で管理されます。詳細は、使用しているプラットフォームの製品ノートを参照してください。
- `e` − Oracle ILOM のナノバージョンを示します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分反復です。

たとえば、Oracle ILOM 3.1.2.1.a の意味は、次のとおりです。

- Oracle ILOM 3 は、Oracle ILOM のメジャーバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1 は、Oracle ILOM 3 のマイナーバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2 は、Oracle ILOM 3.1 の 2 番目の更新バージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2.1 は、Oracle ILOM 3.1.2 のマイクロバージョンです。
- Oracle ILOM 3.1.2.1.a は、Oracle ILOM 3.1.2.1 のナノバージョンです。

ヒント − Sun サーバーまたは CMM にインストールされている Oracle ILOM ファームウェアのバージョンを確認するには、Web インタフェースで「System Information」-->「Versions」をクリックするか、またはコマンド行インタフェースで `version` と入力します。

ドキュメント、サポート、およびトレーニング

次の Web サイトでは追加リソースが提供されています。

- ドキュメント (http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html)
- サポート (https://support.oracle.com)
- トレーニング (https://education.oracle.com)

Oracle ILOM CMM の概要

説明	リンク
概要	• 2 ページの「モジュラーシステムシャーシについて」
CMM の機能概要	• 2 ページの「Oracle ILOM CMM 機能の概要」
Oracle ILOM のバージョン	• 3 ページの「Oracle ILOM のバージョン」
Oracle ILOM CMM のドキュメント	• 3 ページの「Oracle ILOM CMM のドキュメント」
このガイドに含まれるトピック	• 4 ページの「このドキュメントについて」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － Web 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ユーザーアカウントの管理

モジュラーシステムシャーシについて

Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシには最大 10 個のブレード、Sun Blade 6048 モジュラーシステムには最大 48 個のブレードが格納されます。サポートされるブレードには、Sun Blade サーバーモジュールと Sun Blade ストレージモジュールがあります。

各サーバーモジュールには、固有の Oracle ILOM サービスプロセッサ (Service Processor、SP) がありますが、これはシャーシ監視モジュール (Chassis Monitoring Module、CMM) Oracle ILOM からは独立したものです。Oracle ILOM CMM では、Sun Blade 6000 および Sun Blade 6048 モジュラーシステムシャーシを管理します。シャーシコンポーネントの管理、および個別のサーバーモジュール内のサービスプロセッサへのアクセスを可能にします。

Oracle ILOM CMM の操作は、コマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) または Web インタフェースで行います。

Oracle ILOM CMM 機能の概要

CMM の Oracle ILOM は、個別のコンポーネントのシステム管理やシャーシレベルでの総合的なコンポーネント管理が可能な階層型の管理アーキテクチャーを備えています。

管理機能の概要は次のとおりです。

- サーバーモジュールの BMC 機能によってシャーシの環境センサーを認識可能にする IPMI サテライトコントローラの実装
- CLI、Web、SNMP、IPMI の各インタフェースによる環境およびインベントリの直接管理
- CMM、ネットワークエクスプレスモジュール (NEM)、およびサーバーモジュールの SP のファームウェア管理
- コマンド行インタフェース (CLI) の SSH コンテキストに加え、サーバーモジュールおよび HTTP リンクのパススルー管理
- シャーシの電源制御
- 次のコンポーネントへのアクセス
  - シャーシ
  - 電源装置
  - ファン

  - ネットワークエクスプレスモジュール (Network Express Module、NEM)
  - サーバーモジュールの SP
- SAS-2 対応ストレージモジュールからシャーシ内の SAS-2 対応サーバーブレードへの、Sun Blade Zone Manager によるストレージデバイス割り当て。この機能は Sun Blade 6000 シャーシでのみ使用可能です

Oracle ILOM のバージョン

このドキュメントの Oracle ILOM に関する情報は、Oracle ILOM バージョン 3.x.x (Oracle ILOM 3.0.3 以降) に該当します。

Oracle ILOM 2.x については、次のドキュメントを参照してください。

Oracle ILOM 2.0 の各種マニュアル:
(http://docs.sun.com/app/docs/coll/ilom2.0)

Oracle ILOM CMM のドキュメント

次のドキュメントは、Oracle ILOM CMM の機能性と使用方法について説明しています。

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリ − Oracle ILOM 3.0 の機能と使用方法に関する総合的なドキュメントです。
- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CMM 管理 − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム (本書) − Oracle ILOM CMM 固有の Oracle ILOM の機能性について説明しています。
- 『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 補足 − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』− Oracle ILOM CMM の Oracle ILOM バージョン 3.x 固有の補足情報です。

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 の各種マニュアルは、次の Web サイトから入手できます。

(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage)

Sun Blade 6000 および Sun Blade 6048 モジュラーシステムのドキュメントは、次の Web サイトから入手できます。

Sun Blade 6000:
(http://download.oracle.com/docs/cd/E19938-01/ index.html)

Sun Blade 6048: (http://download.oracle.com/docs/cd/E19926-01/index.html)

このドキュメントについて

このマニュアルでは、Sun Blade 6000 および Sun Blade 6048 モジュラーシステム固有の管理作業について説明しています。説明されているトピックは次の表のとおりです。

説明	章
Oracle ILOM CMM の初期設定を実行する	• 5 ページの「Oracle ILOM CMM の初期設定」
シャーシおよびコンポーネントのファームウェアを更新する	• 25 ページの「ファームウェアの更新手順」
Oracle ILOM の電源管理機能を使用する	• 47 ページの「CMM の電力管理」
ストレージのゾーン構成を表示または変更する	• 63 ページの「Sun Blade Zone Manager」

Oracle ILOM CMM の初期設定

説明	リンク
CMM に接続し、CMM の IP アドレスを設定する	• 6 ページの「Oracle ILOM CMM への接続」
Oracle ILOM CMM への初回ログインを行う	• 17 ページの「ネットワーク接続を使用した Oracle ILOM CMM へのログイン」
CMM の Ethernet ポートを有効にする	• 19 ページの「CMM の Ethernet ポートの有効化」
ブレードの CLI プロンプトを変更する	• 22 ページの「ブレード SP CLI プロンプトの変更」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 クイックスタート』、必須の設定タスク
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － Web 手順』、ユーザーアカウントの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ユーザーアカウントの管理

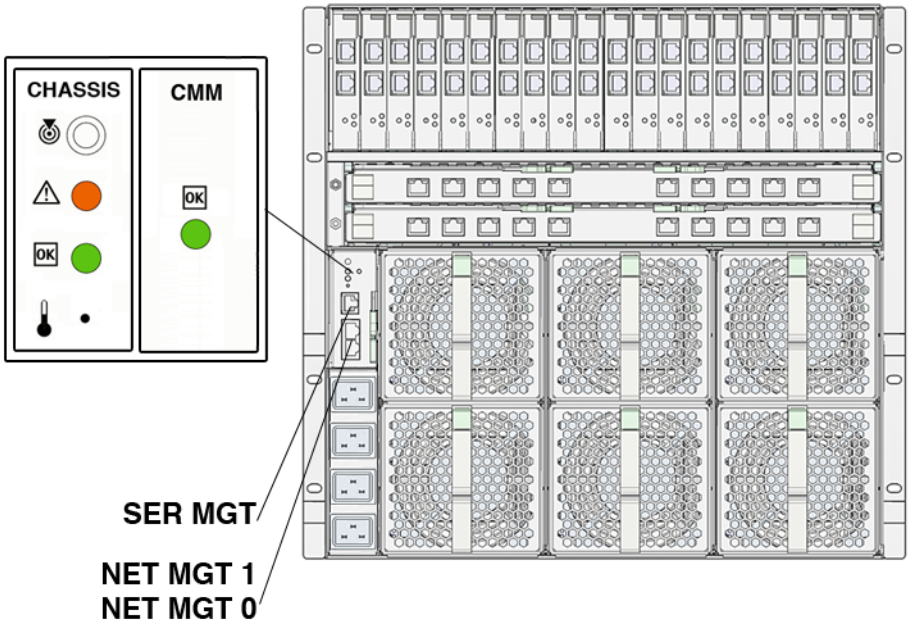
Oracle ILOM CMM への接続

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM CMM への接続	• 6 ページの「インストールを開始する前に」 • 8 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続」 • 9 ページの「IPv4 ネットワークアドレスの表示および設定」 • 11 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックのネットワークアドレスの表示と設定」 • 16 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」	• CMM

インストールを開始する前に

初期ネットワーク構成情報を使用して CMM を設定するには、Oracle ILOM を使用して CMM への接続を確立する必要があります。CMM のシリアル管理 (SER MGT) ポートを使用して Oracle ILOM へのローカル接続を確立することができます。また、ネットワーク管理 (NET MGT) ポートを使用して Oracle ILOM へのリモート接続を確立することができます (次の図を参照)。

図: CMM のネットワークポートとシリアルポート



デフォルトでは、ネットワーク管理ポートを使用して Oracle ILOM への接続を確立すると、Oracle ILOM は DHCP (IPv4) またはステートレス機構 (IPv6) を使用して CMM の IP アドレスを自動的に取得します。CMM の NET MGT ポートへのネットワーク管理接続が確立されていないと、Oracle ILOM が CMM の IP アドレスを取得できません。このため、シリアル接続で Oracle ILOM に接続する必要があります。Oracle ILOM への接続を確立した後は、CMM に割り当てられている IP アドレスを表示できます。また、必要に応じて、この IP アドレスを変更することも可能です。

次のステップ:

- CMM に割り当てられている IP アドレスが不明な場合は、8 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続」を参照してください。

  または

- CMM に割り当てられている IP アドレスが判明しており、CMM へのネットワーク管理接続を確立している場合は、次のいずれかの節を参照して CMM の IP アドレスを表示または修正します。
  - 9 ページの「IPv4 ネットワークアドレスの表示および設定」
  - 11 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックのネットワークアドレスの表示と設定」

▼ シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続

ターミナルエミュレーションソフトウェアを実行している端末または PC をシャーシのシリアルコネクタに接続すれば、Oracle ILOM CMM にいつでもアクセスできます。

1. **端末、ノートパソコン、または端末サーバーが動作していることを確認します。**
2. **その端末デバイスまたはターミナルエミュレーションソフトウェアを次のように設定します。**
   - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
   - 9600 ボー
   - ソフトウェアフロー制御 (XON/XOFF) は無効にします。
3. **シリアルケーブルを使用してシャーシパネルのシリアルポート (SER MGT) を端末デバイスに接続します。**

注 – シリアルポートに接続するシリアルケーブルは、次の表に示すようにピンを割り当てる必要があります。

ピン	信号の説明
1	送信要求 (Request To Send、RTS)
2	データ端末レディー (Data Terminal Ready、DTR)
3	送信データ (TXD)
4	接地
5	接地
6	受信データ (RXD)
7	データキャリア検出 (Data Carrier Detect、DCD)
8	送信可 (Clear To Send、CTS)

4. **端末装置で Enter キーを押します。**

   これにより、端末装置と Oracle ILOM CMM 間の接続が確立されます。

注 – Oracle ILOM CMM の電源投入完了前、または電源投入シーケンス中に、端末またはエミュレータをシリアルポートに接続すると、起動メッセージが表示されます。

システムが起動すると、次のように、Oracle ILOM CMM でログインプロンプトが表示されます。

<hostname> `login:`

5. CLI にログインします。

   a. デフォルトのユーザー名 **root** を入力します。

   b. デフォルトのパスワード **changeme** を入力します。

   ログインに成功すると、Oracle ILOM CMM の次のデフォルトのコマンドプロンプトが表示されます。

   ```
   ->
   ```

   Oracle ILOM CMM は CLI を実行しています。CLI コマンドを実行できるようになりました。

   次のステップ: 次のいずれかの手順で、Oracle ILOM CMM の IP アドレスを表示または設定します。

   - 9 ページの「IPv4 ネットワークアドレスの表示および設定」
   - 11 ページの「IPv4/IPv6 デュアルスタックのネットワークアドレスの表示と設定」

▼ IPv4 ネットワークアドレスの表示および設定

1. リモート SSH 接続またはローカルシリアル接続を使用して、Oracle ILOM CMM にログインします。

   詳細については、次のいずれかの節を参照してください。

   - 8 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続」
   - 19 ページの「CLI を使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン」

2. 次のいずれかのコマンドを入力して、作業用ディレクトリを設定します。

   - シャーシ CMM の場合: `cd /CMM/network`
   - シャーシブレードサーバーモジュールの場合: `cd /SP/network`

3. `show` コマンドを入力して、IP アドレスのネットワークのプロパティーを表示します。

4. DHCP または静的 IPv4 ネットワーク構成を設定するためには、次のいずれかを実行します。

- **DHCP IPv4 のネットワーク構成を設定するためには、**次のプロパティーの値を設定します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state は、デフォルトで enabled に設定されています。 **注 –** DHCP IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state が enabled に設定されている必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=dhcp	IPv4 では、ipdiscovery プロパティーの値はデフォルトで dhcp に設定されています。 **注 –** プロパティーのデフォルトの値 dhcp が static に変更されている場合は、このプロパティーの値を dhcp に戻す必要があります。
commitpending=	set commitpending=true	set commitpending=true と入力して、state および ipdiscovery プロパティーの値に対して行った変更を確定します。

- **静的 IPv4 ネットワーク構成を設定するためには、**次のプロパティーの値を設定します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state は、デフォルトで enabled に設定されています。 **注 –** 静的 IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state が enabled に設定されている必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的 IPv4 ネットワーク構成の設定を有効にするには、pendingipdiscovery プロパティーの値を static に設定する必要があります。 **注 –** IPv4 では、ipdiscovery プロパティーの値はデフォルトで dhcp に設定されています。
pendingipaddress pendingipnetmask pendingipgateway	set pendingipaddress= <*ip_address*> pendingipnetmask= <*netmask*> pendingipgateway= <*gateway*>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるためには、set コマンドの後に、各プロパティーの値 (IP address、netmask、gateway) の pending コマンドを入力してから、割り当てる静的な値を入力します。
commitpending=	set commitpending=true	set commitpending=true と入力して、IPv4 ネットワークのプロパティーに対して行った変更を確定します。

注 – リモート SSH 接続を使用して Oracle ILOM に接続した場合、以前の IP アドレスを使用して確立された Oracle ILOM への接続はタイムアウトします。Oracle ILOM に接続するには、新しく割り当てた設定を使用します。

---

5. **ネットワークテストツール (Ping) を使用して、Oracle ILOM から IPv4 ネットワーク構成をテストします。詳細は、**16 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」**を参照してください。**

▼ IPv4/IPv6 デュアルスタックのネットワークアドレスの表示と設定

注 – ここでは、Oracle ILOM を IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク環境で動作するように設定する場合の手順について説明します。IPv4/IPv6 デュアルスタックネットワーク設定は、A90-D モデルのシャーシ用 Oracle ILOM にのみ存在します。Oracle ILOM での IPv4/IPv6 デュアルスタックのサポートの詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』を参照してください。

---

1. **リモート SSH 接続またはローカルシリアル接続を使用して、Oracle ILOM CMM にログインします。**

   詳細については、次のいずれかの節を参照してください。

   - 8 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM CMM への接続」
   - 19 ページの「CLI を使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン」

2. **使用しているネットワーク環境に該当する、次のいずれかのネットワーク構成手順を行います。**

   - IPv4 ネットワークを構成するには、次の手順 3 - 手順 5 の手順を行います。
   - IPv6 ネットワークを構成するには、次の手順 6 - 手順 10 の手順を行います。

3. **IPv4 ネットワークを構成するには、`cd` コマンドを使用してデバイスの作業用ディレクトリ `/x/network` に移動します。**

   たとえば、次のように表示されます。

   - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバーに複数の SP ノードがある場合、`cd /CH/BLn/Noden/network` と入力します。

4. **`show` コマンドを入力して、デバイスで設定された IPv4 ネットワーク構成を表示します。**

5. DHCP または静的 IPv4 ネットワーク構成を設定するためには、次のいずれかを実行します。

   - **DHCP IPv4 のネットワーク構成を設定するためには、**次のプロパティーの値を設定します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state は、デフォルトで enabled に設定されています。 **注 –** DHCP IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state が enabled に設定されている必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=dhcp	IPv4 では、ipdiscovery プロパティーの値はデフォルトで dhcp に設定されています。 **注 –** プロパティーのデフォルトの値 dhcp が static に変更されている場合は、このプロパティーの値を dhcp に戻す必要があります。
commitpending=	set commitpending=true	set commitpending=true と入力して、state および ipdiscovery プロパティーの値に対して行った変更を確定します。

   - **静的 IPv4 ネットワーク構成を設定するためには、**次のプロパティーの値を設定します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv4 では、ネットワークの state は、デフォルトで enabled に設定されています。 **注 –** 静的 IPv4 ネットワークオプションを有効にするには、state が enabled に設定されている必要があります。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的 IPv4 ネットワーク構成の設定を有効にするには、pendingipdiscovery プロパティーの値を static に設定する必要があります。 **注 –** IPv4 では、ipdiscovery プロパティーの値はデフォルトで dhcp に設定されています。
pendingipaddress pendingipnetmask pendingipgateway	set pendingipaddress= <*ip_address*> pendingipnetmask= <*netmask*> pendingipgateway= <*gateway*>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるためには、set コマンドの後に、各プロパティーの値 (IP address、netmask、gateway) の pending コマンドを入力してから、割り当てる静的な値を入力します。
commitpending=	set commitpending=true	set commitpending=true と入力して、IPv4 ネットワークのプロパティーに対して行った変更を確定します。

6. **IPv6 ネットワークを構成するには、`cd` コマンドを使用してデバイスの作業用ディレクトリ `/x/network/ipv6` に移動します。**

   たとえば、次のように表示されます。

   - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network/ipv6` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network/ipv6` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバーに複数の SP ノードがある場合、`cd /CH/BLn/Noden/network/ipv6` と入力します。

7. **`show` コマンドを入力して、デバイスで設定された IPv6 ネットワーク構成を表示します。**

   次の例は、サーバーの SP デバイス上の IPv6 プロパティーを対象としたサンプル出力の値です。

```
-> show

 /SP/network/ipv6
    Targets:

    Properties:
        state = enabled
        autoconfig = stateless
        dhcpv6_server_duid = (none)
        link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
        static_ipaddress = ::/128
        ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
        pending_static_ipaddress = ::/128
        dynamic_ipaddress_1 = fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

    Commands:
        cd
        show
```

注 – `autoconfig=` プロパティーが `dhcpv6_stateful` または `dhcpv6_stateless` に設定されている場合、読み取り専用の `dhcpv6_server_duid` プロパティーによって、Oracle ILOM が DHCP 情報を取得するために最後に使用した、DHCPv6 サーバーの一意の DHCP ID が特定されます。

注 – Oracle ILOM 3.0.14 以降で提供されている IPv6 の `autoconfig` プロパティーのデフォルト値は、`autoconfig=stateless` です。ただし、CMM またはサーバーモジュールに Oracle ILOM 3.0.12 がインストールされている場合には、`autoconfig` プロパティーのデフォルト値は `autoconfig=stateless_only` と表示されます。

---

8. **IPv6 自動設定オプションを設定するためには、`set` コマンドを使用して、次の自動設定プロパティーの値を指定します。**

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
`state`	`set state=enabled`	IPv6 では、ネットワークの `state` はデフォルトで `enabled` に設定されています。IPv6 自動設定オプションを有効にするには、この `state` が `enabled` に設定されている必要があります。
`autoconfig`	`set autoconfig=<value>`	このコマンドの後に、設定する `autoconf` の値を指定します。 オプションには、次のものがあります。 • `stateless` (Oracle ILOM 3.0.14 またはそれ以降のデフォルト設定) または `stateless_only` (Oracle ILOM 3.0.12 のデフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから取得した IP アドレスを自動的に割り当てます。 • `dhcpv6_stateless` DHCP サーバーから取得した DNS 情報を自動的に割り当てます。 `dhcpv6_stateless` プロパティー値は Oracle ILOM 3.0.14 で使用できます。 • `dhcpv6_stateful` DHCPv6 サーバーから取得した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。 `dhcpv6_stateful` プロパティー値は Oracle ILOM 3.0.14 で使用できます。 • `disable` すべての自動設定プロパティーの値を無効化し、リンクローカルアドレスの読み取り専用のプロパティーの値を設定します。

注 – IPv6 設定オプションは、設定後に有効になります。`/network` ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注 – デバイス用に学習した IPv6 自動設定アドレスは、デバイスに対するアクティブな Oracle ILOM セッションに影響しません。新しく取得した自動設定アドレスは、`/network/ipv6` ターゲットで確認できます。

注 – Oracle ILOM 3.0.14 以降では、`dhcpv6_stateless` のオプションが有効になったとき、または `dhcpv6_stateful` のオプションを有効にしたときに、`stateless` 自動設定オプションも同時に有効にすることが可能です。ただし、`dhcpv6_stateless` および `dhcpv6_stateful` 自動設定オプションは同時に有効にすることはできません。

---

9. 次の手順を行って、静的 IPv6 アドレスを設定します。

   a. 暫定的な静的 IPv6 アドレスを設定するためには、次のプロパティーの値を指定します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明
`state`	`set state=enabled`	IPv6 では、ネットワークの `state` はデフォルトで `enabled` に設定されています。静的 IP アドレスを有効にするためには、この `state` が `enabled` に設定されている必要があります。
`pendingipaddress`	`set pending_static_ipaddress=` *<ip6_address>/<subnet mask length in bits>*	このコマンドの後に、静的な IPv6 アドレスのプロパティーの値とデバイスに割り当てるネットマスクを入力します。 IPv6 アドレスの例を次に示します。 `fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64`

   b. 暫定的な IPv6 の静的ネットワークパラメーターを確定 (保存) するためには、次の表の手順を行います。

手順	説明
1	`cd` コマンドを使用して、ディレクトリをデバイスの `network` ターゲットに変更します。 たとえば、次のように表示されます。 • シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network` と入力します。 • シャーシのブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BL`*n*`/network` と入力します。 • シャーシのブレードサーバーに複数の SP ノードがある場合、`cd /CH/BL`*n*`/Node`*n*`/network` と入力します。
2	次のコマンドを入力して、変更した IPv6 プロパティーの値を確定します。 `set commitpending=true`

注 – デバイス (SP または CMM) に新しい静的 IP アドレスを割り当てると、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいブラウザセッションを作成する必要があります。

---

10. Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストするには、ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用します。詳細は、16 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. **Oracle ILOM SP CLI または CMM CLI にログインします。**

   サーバー SP または CMM とのローカルシリアルコンソール接続または SSH 接続を確立します。

2. **`cd` コマンドを使用してデバイスの作業用ディレクトリ `/x/network/test` に移動します。次に例を示します。**

   - シャーシ CMM の場合、`cd /CMM/network/test` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバー SP の場合、`cd /CH/BLn/network/test` と入力します。
   - シャーシのブレードサーバーに複数の SP ノードがある場合、`cd /CH/BLn/Noden/network/test` と入力します。

3. **`show` コマンドを入力して、ネットワークの `test` ターゲットとプロパティーを表示します。**

   次の例は、CMM デバイスの test ターゲットのプロパティーを示す出力です。

```
-> show

/CMM/network/test
   Targets:

   Properties:
       ping = (Cannot show property)
       ping6 = (Cannot show property)

   Commands:
       cd
       set
       show
```

4. `set ping` コマンドまたは `set ping6` コマンドを使用して、デバイスから指定したネットワーク上の宛先へネットワークテストを送信します。

プロパティー	プロパティーの設定値	説明

`ping`	`set ping=<`*IPv4_address*`>`	コマンドプロンプトで、`set ping=` コマンドの後に、IPv4 テストの宛先のアドレスを入力します。
		たとえば、次のように表示されます。
		`-> set ping=10.8.183.106`
		`Ping of 10.8.183.106 succeeded`

`ping6`	`set ping6=<`*IPv6_address*`>`	`set ping6=` コマンドの後に、IPv6 テストの宛先のアドレスを入力します。
		たとえば、次のように表示されます。
		`-> set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000`
		`Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded`

次のステップ:

- Oracle ILOM へのログインにネットワーク管理接続を使用していない場合は、17 ページの「ネットワーク接続を使用した Oracle ILOM CMM へのログイン」を参照してください。
- このドキュメントまたは Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 の各種マニュアルで説明されている CMM 管理タスクを実行します。

ネットワーク接続を使用した Oracle ILOM CMM へのログイン

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ネットワーク接続を使用した Oracle ILOM CMM へのログイン	• 18 ページの「Web インタフェースを使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン」 • 19 ページの「CLI を使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン」	• CMM

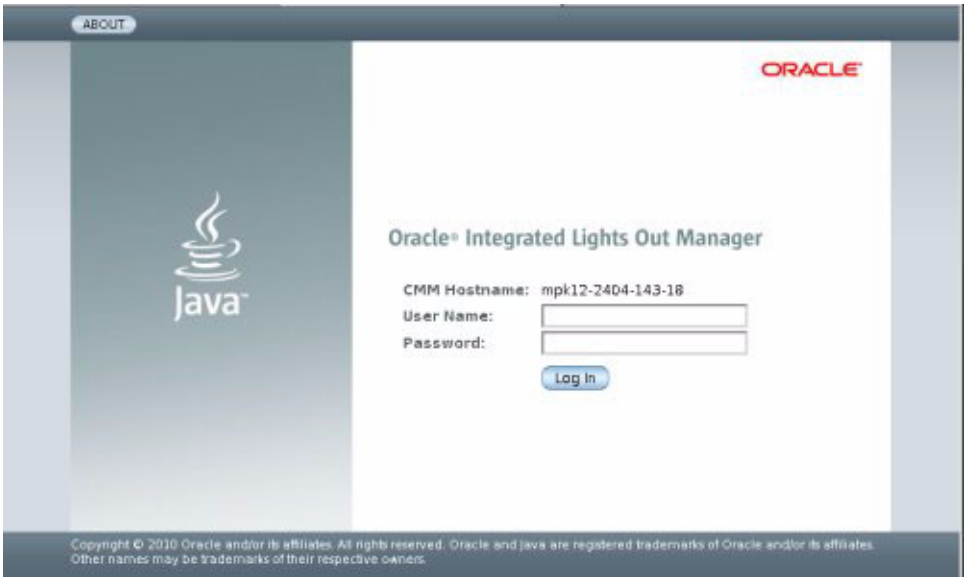
注 – Oracle ILOM の設定の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 入門ガイド』を参照してください。

▼ Web インタフェースを使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン

次の手順に従って、`root` ユーザーアカウントで Oracle ILOM の Web インタフェースへの初回のログインを実行します。

1. Ethernet ケーブルを NET0 Ethernet ポートに接続します。
2. Web ブラウザに **`http://`***system_ipaddress* と入力します。

   Web インタフェースのログインページが表示されます。



3. 次のように、`root` ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

   ユーザー名: **`root`**

   パスワード: **`changeme`**
4. 「Log In」をクリックします。

   Web インタフェースの「Version」ページが表示されます。

▼ CLI を使用した Oracle ILOM 3.0 へのログイン

Oracle ILOM CLI にはじめてログインする際は、SSH および `root` ユーザーアカウントを使用します。

1. **Ethernet ケーブルを NET0 Ethernet ポートに接続します。**
2. **次のように入力して、`root` ユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM CLI にログインします。**

   $ **`ssh root@`***`system_ipaddress`*

   パスワード: **`changeme`**

   Oracle ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

CMM の Ethernet ポートの有効化

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
CMM の Ethernet ポートを有効にする	• 20 ページの「Web インタフェースを使用した Ethernet ポートの有効化」 • 21 ページの「CLI を使用した Ethernet ポートの有効化」	• CMM

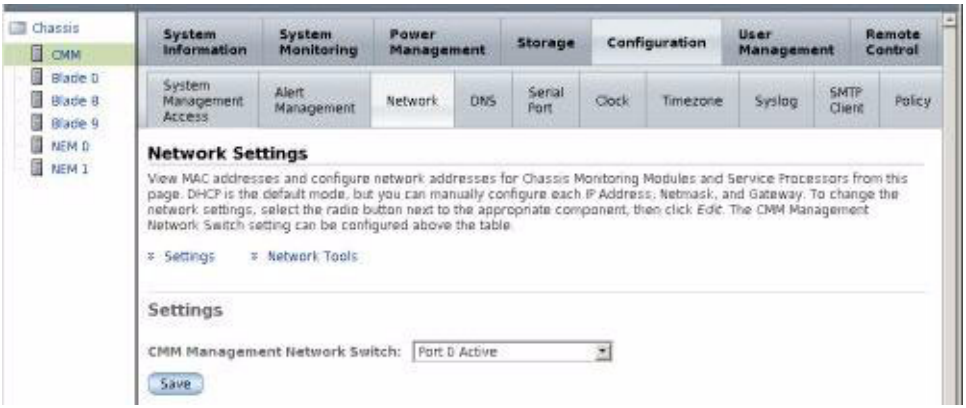
注 – デフォルトでは、CMM の Ethernet ポート 0 は有効になっています。CLI または Web インタフェースを使用して、ポート 1 または両方のポートを有効にすることができます。

注意 – CMM の Ethernet ポートを両方とも有効にすると、Ethernet ネットワークで問題が発生したり、外部ネットワークが停止したりする可能性があります。両方のポートを有効にする前に、外部のスイッチがトランクモードをサポートしていることを確認してください。アップストリームの Ethernet スイッチを正しく設定して、Ethernet のトラフィックのループが発生しないようにする必要があります。通常、この設定はスパニングツリーアルゴリズムを使用して行われます。

▼ Web インタフェースを使用した Ethernet ポートの有効化

Web インタフェースを使用して Ethernet ポートを有効にする手順は、次のとおりです。

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 左のパネルから「CMM」をクリックします。
3. 「Configuration」-->「Network」を選択します。



4. 「CMM Management Network Switch」ドロップダウンリストから、次のいずれかを選択します。
   - Port 0 Active − ポート 0 のみを有効にします。
   - Port 1 Active − ポート 1 のみを有効にします。
   - Trunking (Link Aggregation) − 両方のポートを有効にします。
5. 「Save (保存)」をクリックします。
6. CMM を取り外し、シャーシに再度取り付けます。

   シャーシの CMM の取り外しおよび再装着の手順については、シャーシのサービスマニュアルを参照してください。

   これでアクティブなポートが更新されます。

▼ CLI を使用した Ethernet ポートの有効化

CLI を使用してポート 1 を有効にする手順は、次のとおりです。

1. **Oracle ILOM CLI にログインします。**
2. **次のように入力します。**

   -> **cd /CMM/network**

3. **show コマンドを入力して -switchconf 変数の設定を表示します。**

   たとえば、次のように表示されます。

```
-> show
/CMM/network
     Targets:

     Properties:
         commitpending = (Cannot show property)
         ipaddress = 10.6.153.71
         ipdiscovery = dhcp
         ipgateway = 10.6.152.1
         ipnetmask = 255.255.252.0
         macaddress = 00:14:4F:6B:6F:C1
         pendingipaddress = 10.6.153.71
         pendingipdiscovery = dhcp
         pendingipgateway = 10.6.152.1
         pendingipnetmask = 255.255.252.0
         switchconf = port0

     Commands:
         cd
         set
         show
```

   この例では、-switchconf 変数はポート 0 に設定されています。

   - ポート 1 を有効にし、ポート 0 を無効にするためには、**set switchconf=port1** と入力します。
   - ポート 1 を有効にし、ポート 0 も有効にしたままにするためには、**set switchconf=trunk** と入力します。

4. **CMM を取り外し、シャーシに再度取り付けます。**

   シャーシの CMM の取り外しおよび再装着の手順については、シャーシのサービスマニュアルを参照してください。

   これで、有効なポートが NET MGT ポート 1 または両方の NET MGT ポートになります。

ブレード SP CLI プロンプトの変更

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ブレード SP CLI プロンプトの変更	• 22 ページの「ブレード SP CLI プロンプトについて」 • 23 ページの「ブレード SP CLI プロンプトの設定」 • 23 ページの「ブレード SP CLI プロンプトのデフォルトへのリセット」	• CMM

ブレード SP CLI プロンプトについて

CMM ソフトウェア 3.2 (Oracle ILOM 3.0.10) 以降、CMM を使用してサーバーブレード SP のデフォルトの CLI プロンプトを変更することができるようになりました。このプロンプトが使用されるのは、次のコマンドを実行して CMM からサーバーブレード SP に移動した場合です。

-> **start /CH/BL*n*/SP/cli**

-> プロンプトの代わりに、次のいずれかのデフォルトプロンプトが表示されます。

- [BL*n*/SP] -> (単一ノードのブレードの場合)
- [BL*n*/NODE*n*/SP] -> (複数ノードのブレードの場合)

注 – ノードとは、サーバーブレード上に存在する独立したコンピュータです。Sun Blade X6275 サーバーモジュールは、ブレードごとに 2 個のノードがあるブレードの例です。

この機能を使用するためには、サーバーブレード SP で Oracle ILOM 3.0.9 以降が実行されている必要があります。

▼ ブレード SP CLI プロンプトの設定

1. Oracle ILOM CLI にログインします。
2. 次のいずれかのコマンドを使用して、サーバーブレードのデフォルトの CLI プロンプトを変更します。
   - 単一ノードのブレードの場合: **set /CH/BL*n*/SP/cli prompt=**"*newprompt*"
   - ノードが 2 個のブレードの場合: **set /CH/BL*n*/NODE*n*/SP/cli prompt=** "*newprompt*"

   ここでは、*newprompt* は新しいプロンプトに設定する値です。

   たとえば、ブレード SP プロンプトを「blade SP」に設定する場合、BL0 では次のコマンドを実行します。

   -> **set /CH/BL0/SP/cli prompt="blade SP"**

▼ ブレード SP CLI プロンプトのデフォルトへのリセット

- ブレード SP の CLI プロンプトをデフォルト以外に変更した場合、デフォルトのプロンプトに戻すには、次のコマンドを実行します。

  -> **set /CH/BL*n*/SP/cli prompt=""**

ファームウェアの更新手順

説明	リンク
Oracle ILOM CMM ファームウェアを更新する	• 26 ページの「Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新」
NEM ファームウェアを更新する	• 34 ページの「NEM ファームウェアの更新」
シャーシのコンポーネントのファームウェアを更新する	• 41 ページの「CMM を使用したシャーシコンポーネントのファームウェアの更新」
Oracle ILOM CMM の電源をリセットする	• 45 ページの「Oracle ILOM CMM のリセット」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、ファームウェアの管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、ファームウェアの更新
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － Web 手順』、ファームウェアの更新
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、ファームウェアの更新

Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新	• 26 ページの「Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新に関する追加情報」 • 27 ページの「CMM の IP アドレスの取得」 • 27 ページの「現在のファームウェアバージョンの確認」 • 28 ページの「Web インタフェースを使用してファームウェアのバージョンを確認する」 • 29 ページの「管理 Ethernet ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する」 • 30 ページの「ファームウェアのファイルのダウンロード」 • 32 ページの「Web インタフェースを使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する」 • 33 ページの「CLI を使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する」	• CMM

Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新に関する追加情報

この情報は、次の Oracle ILOM 3.0 のドキュメントライブラリで詳しく説明されています。

(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage)

順番に、次の節を参照してください。

1. CMM の IP アドレスを取得します。27 ページの「CMM の IP アドレスの取得」を参照してください。
2. CMM にログオンして、使用しているファームウェアのバージョンを確認します。27 ページの「現在のファームウェアバージョンの確認」を参照してください。

3. Oracle ILOM を使用して、新しいバージョンのファームウェアをダウンロードします。30 ページの「ファームウェアのファイルのダウンロード」を参照してください。

4. Oracle ILOM を使用して、新しいファームウェアをインストールします。31 ページの「Oracle ILOM ファームウェアの更新」を参照してください。

5. CMM をリセットします。45 ページの「Oracle ILOM CMM のリセット」を参照してください。

注 – Oracle ILOM の設定をバックアップおよび復元する方法の詳細については、『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – Web 手順』または『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 – CLI 手順』を参照してください。

CMM の IP アドレスの取得

Oracle ILOM CMM にアクセスするには、CMM の IP アドレスを使用する必要があります。CMM の IP アドレスがわからない場合は、確認する必要があります。

CMM の IP アドレスを確認する手順については、6 ページの「インストールを開始する前に」を参照してください。

現在のファームウェアバージョンの確認

この節では、現在のファームウェアのバージョンを確認する 3 つの手順を説明します。

- 28 ページの「Web インタフェースを使用してファームウェアのバージョンを確認する」
- 29 ページの「管理 Ethernet ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する」
- 29 ページの「シリアル管理ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する」

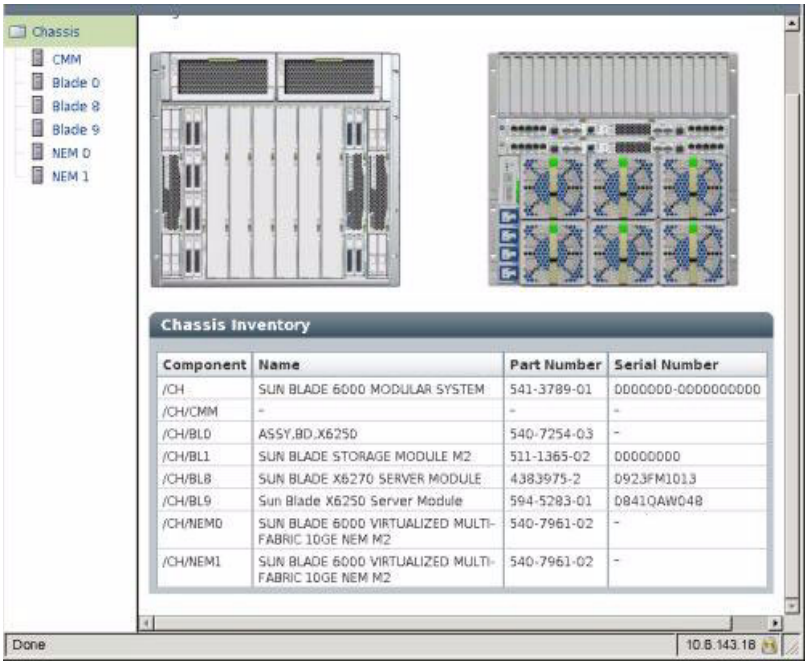
▼ Web インタフェースを使用してファームウェアのバージョンを確認する

1. ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの CMM の IP アドレスを入力して、Oracle ILOM Web インタフェースに接続します。

   たとえば、次のように表示されます。

   https://129.146.53.150

2. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。



3. シャーシのナビゲーション区画の左角で「CMM」をクリックします。

4. 「System Information」-->「Versions」の順にクリックします。

   「Versions」ページが表示されます。それにはファームウェアのバージョンとビルド番号が含まれています。

▼ 管理 Ethernet ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する

この手順の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』を参照してください。

1. Oracle ILOM CLI にログインします。
2. `version` コマンドを入力します。入力すると、次のような出力が返されます。

```
-> version
CMM firmware 3.0.10.15
CMM firmware build number: 55335
CMM firmware date: Thu Apr 22 19:41:07 EDT 2010
CMM filesystem version: 0.1.22
```

Oracle ILOM (CMM) ファームウェアのバージョンとビルド番号が出力に一覧表示されます。

▼ シリアル管理ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する

1. 端末デバイス、またはラップトップか PC で稼働しているターミナルエミュレーションソフトウェアを次のように設定します。
   - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
   - 9600 ボー
   - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
   - ソフトウェアフロー制御 (XON/XOFF) は無効にします

2. CMM の RJ-45 SER MGT ポートに取り付けられたシリアルケーブルを、端末デバイスまたは PC に接続します。

3. 端末デバイス上で Enter を押して、端末デバイスと CMM 間の接続を確立します。

   CMM にログインプロンプトが表示されます。

   `<hostname>login:`

   hostname は、`SUNCMM` の後に製品のシリアル番号が続く場合、もしくは DHCP でホスト名を有効にしている場合は、割り当て済みのホスト名となります。

4. Oracle ILOM CMM にログインして、デフォルトのユーザー名 (`root`) とデフォルトのパスワード (`changeme`) を入力します。

   ログインに成功すると、CMM に次のデフォルトのコマンドプロンプトが表示されます。

   `->`

5. `version` コマンドを入力します。入力すると、次のような出力が返されます。

```
-> version
CMM firmware version: 3.0.3.32
CMM firmware build number: 42331
CMM firmware date: Wed Feb 18 11:46:55 PST 2009
CMM filesystem version: 0.1.22
```

   Oracle ILOM ファームウェアのバージョンとビルド番号が出力に一覧表示されます。

ファームウェアのファイルのダウンロード

次の手順では、Oracle ILOM ファームウェアを Web サイトからダウンロードする方法を説明します。

▼ ファームウェアのファイルのダウンロード

次の手順に従って、フラッシュイメージの `.ima` ファイルをダウンロードします。

1. 次の Web サイトに移動します (`http://support.oracle.com`)。

2. My Oracle Support にサインインします。

3. ページ上部にある「Patches and Updates (パッチと更新)」タブをクリックします。

4. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで「Product or Family (Advanced Search) (製品またはファミリ (詳細検索))」を選択します。

5. 「Product? Is (製品)」テキストフィールドに Sun Fire X6275 など、製品名の一部またはすべてを入力し、一致する結果が表示されたら、目的の製品を選択します。
6. 「Release? Is (リリース)」リストボックスで下向きの矢印をクリックします。
7. 表示されたウィンドウで製品フォルダアイコンの横にある三角形 (>) をクリックして選択肢を表示し、目的のリリースを選択します。
8. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで「Search (検索)」をクリックします。

   製品ダウンロードのリスト (パッチのリスト) が表示されます。
9. 次のような目的のパッチの名前を選択します。
   - Sun Blade X6275 M@ SW 1.1 リリースの Oracle ILOM および BIOS 部分用 Patch 10266805
   - Sun Blade 6000 CMM SW 1.1 リリースの Oracle ILOM 部分用 Patch 10266804
   - Sun Blade 6000 NEM SW 1.1 リリースの Patch 10266803
10. 表示された右側のパネルの「Download (ダウンロード)」をクリックします。

Oracle ILOM ファームウェアの更新

注意 – Oracle ILOM は、特別なモードに入って、新しいファームウェアをロードします。Oracle ILOM では、ファームウェアのアップグレードが完了して Oracle ILOM がリセットされるまで、他のタスクを実行できません。

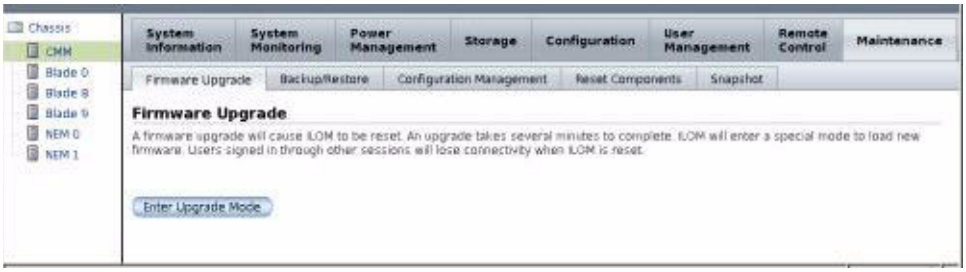
これは、既存のイメージを、事前にダウンロードした `.ima` ファイルの新しいイメージで置き換えて、実際にファームウェアを更新する手順です。

この節では、Oracle ILOM/BIOS ファームウェアを更新する次の 2 つの方法について説明します。

- 32 ページの「Web インタフェースを使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する」
- 33 ページの「CLI を使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する」

▼ Web インタフェースを使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Maintenance」-->「Firmware Upgrade」の順にクリックします。

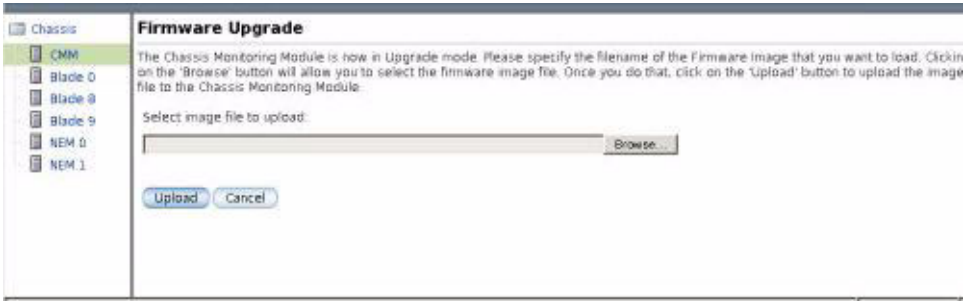


3. 「Enter Upgrade Mode (アップグレードモードに切り替え)」ボタンをクリックします。

   「Upgrade Verification」ダイアログが表示され、更新プロセスが完了するとログインしているほかのユーザーのセッションが切断されることが通知されます。

4. 「Upgrade Verification」ダイアログで、「OK」をクリックして続行します。

   「Firmware Upgrade」ページが表示されます。



5. フラッシュイメージファイルを参照します。
6. 「Upload」ボタンをクリックします。

   ファイルがアップロードされ検証されるまで待ちます。

   「Firmware Verification」ページが表示されます。

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、または SFTP です。

---

7. **(省略可能)「Firmware Verification」ページで、「Preserve Configuration」を有効にします。**

   Oracle ILOM の既存の設定を保存し更新プロセスの完了後に復元する場合は、このオプションを有効にします。

8. **「Start Upgrade」をクリックして、アップグレードプロセスを開始するか、「Exit」をクリックしてプロセスを取り消します。**

   「Start Upgrade」をクリックすると、アップグレードプロセスが開始され、プロセスの続行を確認するプロンプトが表示されます。

9. **プロンプトで「OK」をクリックして続行します。**

   「Update Status」ページが表示され、更新処理の進捗状況が表示されます。更新の進捗状況が 100% を示すと、ファームウェアの更新は完了です。

   更新が完了すると、システムが自動的に再起動します。

注 – 更新の完了後、Oracle ILOM の Web インタフェースが正しく再表示されないことがあります。Oracle ILOM Web インタフェースで情報が欠落している場合やエラーメッセージが表示される場合は、更新前のバージョンから、そのページのキャッシュされているバージョンを表示している必要があります。ブラウザのキャッシュをクリアしてブラウザを再表示してから、続行してください。

---

10. **Oracle ILOM CMM Web インタフェースに再接続します。**

11. **「System Information」-->「Version」を選択して、CMM のファームウェアのバージョンが、インストールしたファームウェアイメージのバージョンと一致することを確認します。**

注 – ファームウェアの更新前に Oracle ILOM 設定を保存しなかった場合は、初期 Oracle ILOM セットアップ手順を実行して Oracle ILOM に再接続する必要があります。

▼ CLI を使用して Oracle ILOM ファームウェアを更新する

1. **管理 Ethernet ポートまたはシリアル管理ポートから Oracle ILOM CLI にログインします。**

   管理 Ethernet ポートについて: 29 ページの「管理 Ethernet ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する」を参照してください。

   シリアル管理ポートについて: 29 ページの「シリアル管理ポートの CLI を使用してファームウェアのバージョンを確認する」を参照してください。

2. Oracle ILOM CLI で、次のコマンドを使用します。

   -> **load -source tftp://***tftpserver***/ILOM-***version***-Sun_Blade_60***x***0.ima**

   ここでは、*tftpserver* は更新がある簡易ファイル転送プロトコル (TFTP) サーバーで、ILOM-*version*-Sun_Blade_60*x*0.ima はファームウェアのイメージファイルです。次に例を示します。

   Sun Blade 6000 の場合: ILOM-3_0_10_15-Sun_Blade_6000.ima

   または

   Sun Blade 6048 の場合: ILOM-3_0_10_15-Sun_Blade_6048.ima

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、および SFTP です。

NEM ファームウェアの更新

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Oracle ILOM CMM ファームウェアの更新	• 35 ページの「NEM のファームウェアの更新について」 • 35 ページの「インストールを開始する前に」 • 35 ページの「CLI を使用して NEM のファームウェアを更新する」 • 38 ページの「Web インタフェースを使用して NEM のファームウェアを更新する」	• CMM

NEM のファームウェアの更新について

Oracle ILOM 3.0.9 から、一部の Oracle モジュラーシャーシシステムで Oracle ILOM のファームウェアの機能が拡張され、ネットワークエクスプレスモジュール (Network Express Module、NEM) のファームウェアの更新がサポートされています。Oracle ILOM 3.0.9 以前は、Oracle ILOM から NEM のファームウェアを更新することはサポートされていませんでした。

NEM のファームウェアの更新は、Oracle ILOM CLI または Web インタフェースで直接行うことができます。NEM にファームウェアパッケージをアップロードするには、TFTP、HTTPS、FTP、SFTP、SCP、HTTP、およびブラウザベースのファイル転送方法がサポートされています。

注 – ブラウザベースのローカルファイル転送オプションは、Oracle ILOM Web インタフェースでのみ使用できます。

インストールを開始する前に

- NEM のベンダー製品のダウンロード Web サイトから、Oracle ILOM からアクセスできるネットワーク上のシステムに、NEM のファームウェアの更新パッケージをダウンロードします。
- NEM のファームウェアを Oracle ILOM で更新するには、Admin (a) の役割を有効にする必要があります。

▼ CLI を使用して NEM のファームウェアを更新する

1. **Oracle ILOM CMM CLI にログインします。**
2. **`cd` コマンドを使用して、ファームウェアの更新が必要な NEM に移動します。**

   たとえば、次のように表示されます。

   `cd /CH/NEM`#

   ここでは、# はシャーシ内で NEM が設置されている、スロットの場所です。

   シャーシシステムが複数の NEM をサポートしておらず、サポートされている NEM が 1 台である場合、NEM の場所は 0 と等しいはずです。この場合は、次のように入力します。

   `cd /CH/NEM0`

3. **show コマンドを入力して、NEM のプロパティーと、NEM に現在インストールされているファームウェアのバージョンを表示します。**

   たとえば、次の Sun Blade 6000 Virtualized Multi-Fabric 10GE NEM M2 の NEM の show プロパティー出力を参照してください。

注 – プロパティーフィールド fru_extra_1= は NEM に現在インストールされているファームウェアのバージョンを示しています。

```
-> show /CH/NEM0

 /CH/NEM0
    Targets:
        MB
        SAS
        SP
        PRSNT
        STATE
        ERR
        OK
        SERVICE
        OK2RM
        LOCATE

    Properties:
        type = Network Express Module
        ipmi_name = NEM0
        system_identifier = SUNSP-0000000000
        fru_name = SUN BLADE 6000 VIRTUALIZED MULTI-FABRIC 10GE
NEM M2
        fru_version = FW 3.0.10.16, SAS 5.3.4.0
        fru_part_number = 540-7961-02
        fru_extra_1 = FW 3.0.10.16, SAS 5.3.4.0
        fault_state = OK
        load_uri = (none)
        clear_fault_action = (none)
        prepare_to_remove_status = NotReady
        prepare_to_remove_action = (none)
        return_to_service_action = (none)

    Commands:
        cd
        load
        reset
        set
        show
```

4. `load` コマンドを使用して、NEM でファームウェア更新パッケージのアップロードとインストールを行います。

   たとえば、次のように入力します。

   load_uri=*uri*

   ここでは、*uri* は URI の転送方式とファームウェアパッケージの場所です。

   次の、サポートされる各ファイル転送方式の CLI `load` コマンドの例を参照してください。

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、または SFTP です。

転送方法	CLI の `load` コマンドの例
TFTP	**load_uri=tftp://***ip_address***/***rom_nem***.pkg**
FTP	**load_uri=ftp://***username***:***password***@***ip_address***/***rom_nem***.pkg**
SCP	**load_uri=scp://***username***:***password***@***ip_address***/***rom_nem***.pkg**
HTTP	**load_uri=http://***username***:***password***@***ip_address***/***rom_nem***.pkg**
HTTPS	**load_uri=https://***username***:***password***@***ip_address***/***rom_nem***.pkg**
SFTP	**load_uri=sftp://***username***:***password***@***ip_address***/***rom_nem***.pkg**

各表記の意味は次のとおりです。

- *password* は、ファイルが格納されているシステムのログインパスワードです。
- *username* は、ファイルが格納されているシステムのログインユーザ名です。
- *rom_nem.pkg* は、ファームウェアの更新パッケージの名前です。
- *ip_address* は、ファイルが格納されているシステムの IP アドレスです。

HTTP と HTTPS については、ユーザー名とパスワードが省略可能です。

注 – このほかに、Oracle ILOM CLI で `set` および `load` コマンドを使用して、NEM の場所のパスと、アップロードするファームウェアの更新パッケージの場所を指定することもできます。例: **set /CH/NEM#/load_uri=***uri*

---

5. ファームウェアの更新処理が完了したことが Oracle ILOM で確認されるまで少し待ちます。

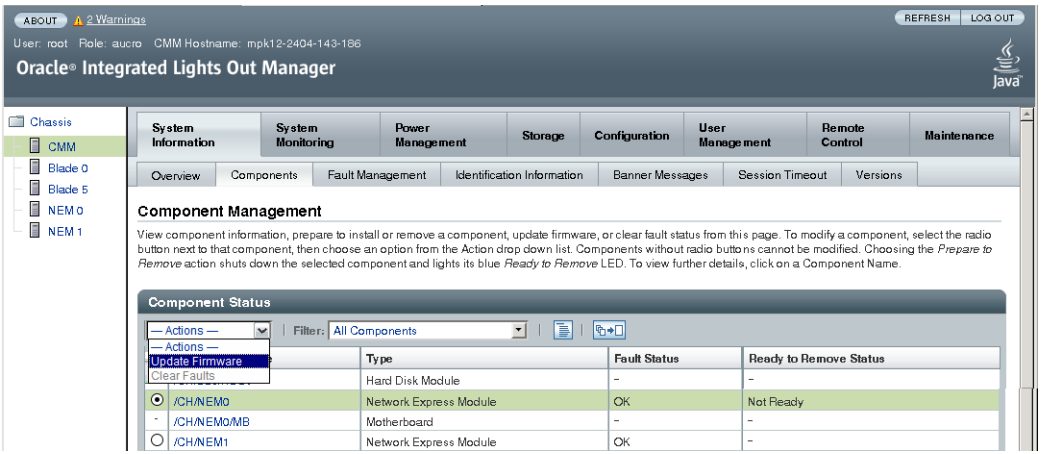
   成功または失敗を示す状態が表示されます。

6. `show` コマンドを使用して、NEM にインストールされているファームウェアのバージョンを表示して確認します。

▼ Web インタフェースを使用して NEM のファームウェアを更新する

1. Oracle ILOM CMM Web インタフェースにログインします。
2. Oracle ILOM Web インタフェースの左側のパネルで「CMM」をクリックします。
3. 「System Information」-->「Components」タブをクリックします。

   「Components」ページが表示されます。



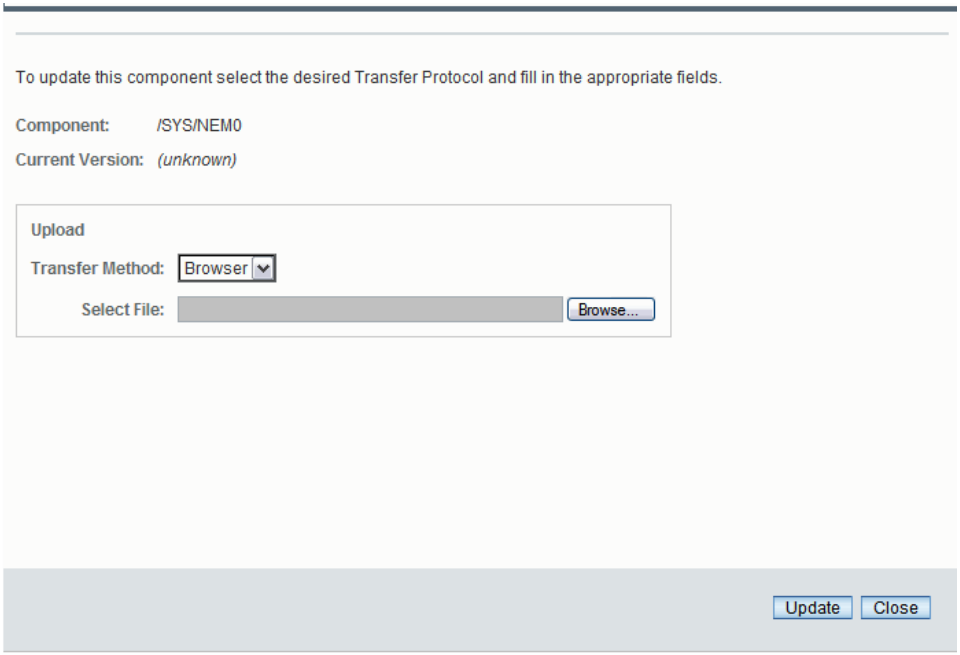
4. 「Component Status」表で、次の手順を行います。

   a. 更新する NEM のラジオボタンを選択します。

   b. 「Component Name」列に表示されている NEM の名前をクリックして、NEM に現在インストールされているファームウェアのバージョンを表示し、「Close」をクリックしてダイアログを閉じます。

   c. 「Actions」ドロップダウンリストボックスで、「Update Firmware」を選択して NEM のファームウェアの更新処理を開始します。

      「Upload Firmware」ダイアログが表示されます。



5. 「Upload Firmware」ダイアログで、次の手順を行います。

   a. 「Upload」の「Transfer Method」をドロップダウンリストボックスで選択します。

   b. 選択した転送方式の必須フィールドに対して、次のように指定します。

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、または SFTP です。

転送方式のオプション	必須フィールド	指示書
Browser	Select File	「Browse」ボタンを使用して、NEM のファームウェアの更新パッケージの場所を指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、TFTP、SFTP	Host	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているホストシステムの IP アドレスを指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、TFTP、SFTP	Filepath	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されている場所への絶対パスを指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、SFTP	Username	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているシステムのログインユーザー名を指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、SFTP	Password	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているシステムのログインパスワードを指定します。

6. **ファームウェアの更新処理が完了したことが Oracle ILOM で確認されるまで少し待ちます。**

   成功または失敗を示す状態が「Upload Firmware」ダイアログに表示されます。

CMM を使用したシャーシコンポーネントのファームウェアの更新

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
シャーシコンポーネントのファームウェアを更新する	• 41 ページの「シャーシコンポーネントのファームウェアについて」 • 42 ページの「Web インタフェースを使用して ファームウェアを更新する」 • 44 ページの「CLI を使用してファームウェアを更新する」	• CMM • NEM • Sun Blade サーバー

シャーシコンポーネントのファームウェアについて

Oracle ILOM 3.0.10 から、Oracle ILOM CMM には、次のシャーシコンポーネントでインストールされているファームウェアのバージョンを表示したり、ファームウェアの更新を開始したりするための一元化されたユーザーインタフェースが用意されています。

- ストレージブレード。
- CPU ブレード。
- Network Express Module (NEM): すべての NEM にファームウェアがあるわけではありません。NEM のドキュメントで、NEM にファームウェアがあるかどうかを確認してください。NEM のファームウェアを更新する詳しい手順については、34 ページの「NEM ファームウェアの更新」を参照してください。

このファームウェア更新ツールを使用するには、事前に、Sun Blade 6000 モジュラーシステムソフトウェアのリリース 3.2 とともに Oracle のダウンロードサイトで入手可能な、Oracle ILOM CMM バージョン 3.0.10 を CMM にインストールする必要があります。サーバーモジュール (ブレード) では、Oracle ILOM 2.x またそれ以降が実行されている必要があります。

▼ Web インタフェースを使用して ファームウェアを更新する

1. 必要なファームウェアを Oracle のソフトウェアダウンロードサイト (http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/servers/blades/index.html)

   a. 更新するブレードまたは NEM のページを検索します。

   b. 最新のファームウェアパッケージをダウンロードし、それをネットワークでアクセス可能なフォルダに展開します。

2. 管理者権限を持つ任意のユーザーで Oracle ILOM CMM にログインします。

3. 「Chassis」ナビゲーション区画で、「CMM」をクリックします。

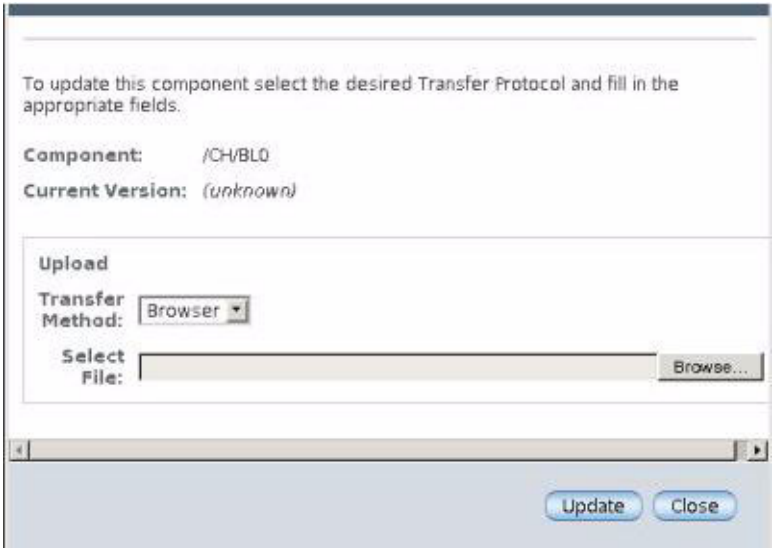
4. 「System Information」-->「Components」を選択します。

5. ファームウェアを更新するコンポーネントを選択します。

   例: `-/CH/BL0` など。

6. 「Actions」ドロップダウンメニューから「Update Firmware」を選択します。

ダイアログボックスが表示されます。



7. 選択した転送方式の必須フィールドに入力します。

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、および SFTP です。

転送方式のオプション	必須フィールド	指示書
Browser	Select File	「Browse」ボタンを使用して、NEM のファームウェアの更新パッケージの場所を指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、TFTP、SFTP	Host	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているホストシステムの IP アドレスを指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、TFTP、SFTP	Filepath	NEM のファームウェア更新パッケージが格納されている場所の絶対パスを指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、SFTP	Username	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているシステムのログインユーザー名を指定します。
FTP、SCP、HTTP、HTTPS、SFTP	Password	NEM のファームウェアの更新パッケージが格納されているシステムのログインパスワードを指定します。

8. 「Update (アップデート)」をクリックします。

   ファームウェアの更新処理は数分かかる可能性があります。成功または失敗を示す状態が「Upload Firmware」ダイアログに表示されます。

▼ CLI を使用して ファームウェアを更新する

1. 必要なファームウェアを Oracle のソフトウェアダウンロードサイト (http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/servers/blades/index.html)

2. 更新するブレードまたは NEM のページを検索します。

3. 最新のファームウェアパッケージをダウンロードし、それをネットワークでアクセス可能なフォルダに展開します。

4. ネットワークに接続した端末から、次のコマンドを入力して `root` ユーザーアカウントを使用し、Oracle ILOM CMM の CLI にログインします。

   $ **ssh root@***cmm_ipaddress*

   ここでは、*cmm_ipaddress* は Oracle ILOM CMM の IP アドレスです。

5. パスワードを入力します。デフォルトでは changeme です。

   Oracle ILOM CLI のプロンプトが表示されます。

   ->

6. アップグレードするブレードまたは NEM が含まれているブレードスロットにディレクトリを変更します。

   -> **cd /CH/BL***n*

   または

   -> **cd /CH/NEM***n*

   ここでは、BL*n* はアップグレードするブレードのシャーシブレードスロットの番号であり、NEM*n* はアップグレードする NEM です。

7. 以下のコマンドを入力します。

   -> **load -source** *transfer_method***://***transfer_server_ipaddress*/*firmware-version***.pkg**

   ここで

   - *transfer_method* は、FTP、SCP、HTTP、HTTPS、TFTP、SFTP のいずれかです。
   - *transfer_server_ipaddress* は、イメージファイルをコピーした転送サーバーのドメイン名または IP アドレスです。
   - *firmware-version* は、`.pkg` ファイルの名前です。

注 – ファームウェアイメージのアップロードに使用が推奨されるファイル転送プロトコルは、HTTP、FTP、および SFTP です。

---

8. **プロセスが完了したら、適切なファームウェアバージョンがインストールされたことを確認します。以下のコマンドを入力します。**

   -> **version /CH/BL***n*

   または

   -> **version /CH/NEM***n*

   ここでは、BL*n* はアップグレードしたブレードのシャーシスロットの番号であり、NEM*n* はアップグレードした NEM です。

Oracle ILOM CMM のリセット

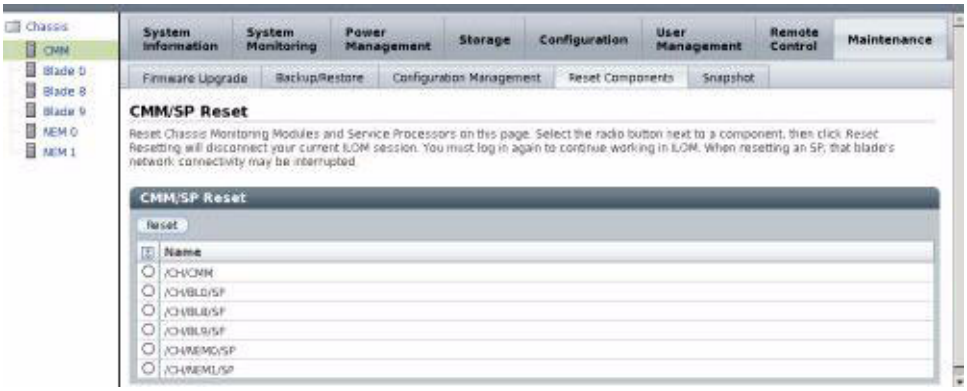
説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
CMM の電源をリセットする	• 46 ページの「Web インタフェースを使用して Oracle ILOM をリセットする」 • 46 ページの「CLI を使用して Oracle ILOM CMM をリセットする」	• CMM

注 – この節のいずれの Oracle ILOM 手順も使用できない場合は、CMM をシャーシから取り外し、再度取り付けて CMM の電源をリセットすることができます。

注 – CMM の取り外しおよび再度取り付ける方法については、『Sun Blade 6000 モジュラーシステムサービスマニュアル』または『Sun Blade 6048 モジュラーシステムサービスマニュアル』を参照してください。

▼ Web インタフェースを使用して Oracle ILOM をリセットする

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Maintenance」-->「Reset Components」の順にクリックします。
3. 「/CH/CMM」を選択し、「Reset」をクリックします。



▼ CLI を使用して Oracle ILOM CMM をリセットする

1. Oracle ILOM CLI にログインします。
2. Oracle ILOM CLI で、次のコマンドを入力します。

```
-> reset /CMM
```

CMM の電力管理

説明	リンク
Light Load Efficiency Mode (LLEM) を有効または無効にする	• 48 ページの「軽負荷効率モード (LLEM)」
電源装置のファンを低速にする	• 52 ページの「電源装置のファン速度を調整する」
電力管理を無効にする	• 54 ページの「電力管理ポリシーの無効化」
Sun Blade 6048 モジュラーシステムの特定のケースにおける Oracle ILOM の表示について学習する	• 56 ページの「Sun Blade 6048 の特定の場合における Oracle ILOM 3.0」

関連情報

- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － 概念』、電源管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － CLI 手順』、電源管理
- 『Oracle ILOM 3.0 日常的な管理 － Web 手順』、電源管理
- 『Oracle ILOM 3.0 プロトコル管理リファレンス』、システムの電源管理

軽負荷効率モード (LLEM)

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
軽負荷効率モード	• 48 ページの「LLEM について」 • 49 ページの「Web インタフェースを使用して LLEM を有効または無効にする」 • 50 ページの「Web インタフェースを使用して冗長モードを有効または無効にする」 • 50 ページの「CLI を使用して LLEM を有効または無効にする」 • 51 ページの「CLI を使用して冗長モードを有効にする」 • 51 ページの「CLI を使用して冗長モードを有効にする」	• CMM

LLEM について

Light Load Efficiency Mode (LLEM) は Oracle ILOM CMM 3.0.6.11 の新機能です。

LLEM のもとでは、CMM が効率向上のため、使用する電力を監視し、自動的に電源ユニット (PSU) の各サイドをシャットダウンします。LLEM は、有効な場合は冗長モード、非冗長モードのどちらでも実行されます。

CMM は、常に降順で PSU サイドを無効にします。電力負荷レベルが高まると、CMM は、無効にしたサイドを再度有効にして需要に対応します。新たなブレードがシャーシに挿入された場合、電力割当量が、現在電力がオンになっているサイドから使用できる電力を超えているときでも、そのブレードの電力をオンにすることができます。

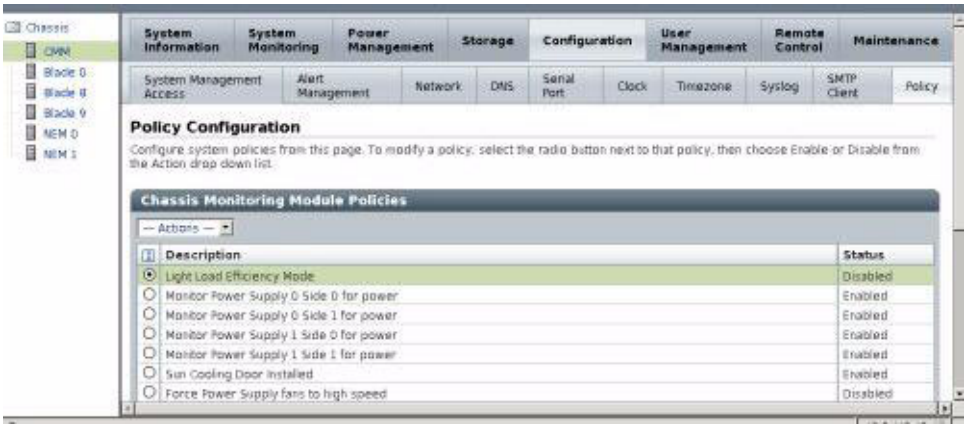
予期しない AC 障害が発生した場合は、LLEM が一時停止され、すべてのサイドが有効になります。これは、センサーの値 `I_V12` および `V_OUT_OK` によって確認できます。障害が解消すると、自動的に、設定されている LLEM ポリシーが再実行されます。

LLEM が無効になると、以前無効にしたものも含めて、すべての PSU サイドが有効になります。これは、センサーの値 `I_V12` および `V_OUT_OK` によって確認できます。

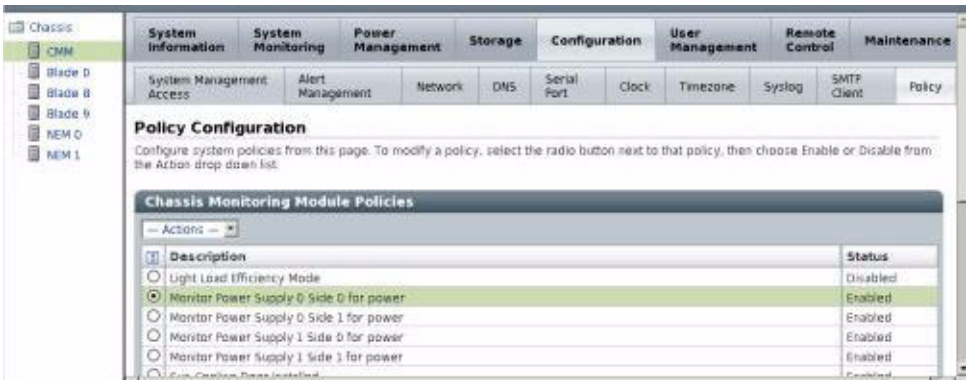
Oracle ILOM の電源管理機能の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 概念ガイド』を参照してください。

▼ Web インタフェースを使用して LLEM を有効または無効にする

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Chassis」ナビゲーション区画の「CMM」をクリックします。
3. 「Configuration」-->「Policy」ページに移動します。



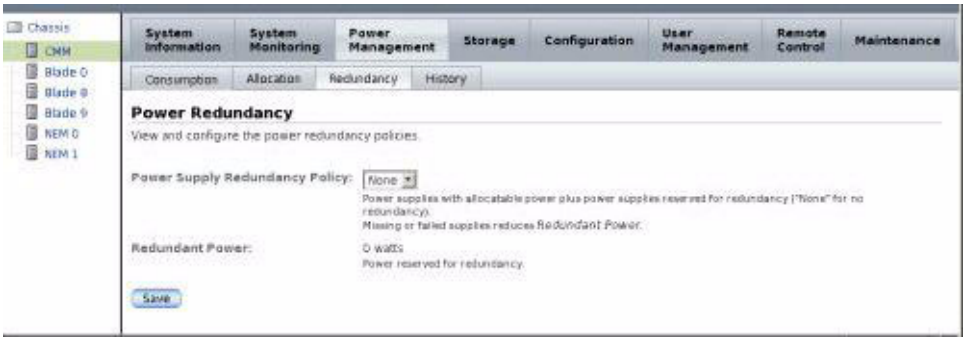
4. 「Light Load Efficiency Mode」を選択します。
5. 「Actions」ドロップダウンリストから「Enable」または「Disable」を選択します。
6. 「Policy」ページで電源装置をオン/オフにするには、次のようにします。
   a. 「Monitor Power Supply *x* Side *y* for power」を選択します。
      次の例では、「Monitor Power Supply 0 Side 0」が選択されています。



   b. 「Actions」メニューから「Enable」または「Disable」を選択します。

▼ Web インタフェースを使用して冗長モードを有効または無効にする

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Chassis」ナビゲーション区画の「CMM」をクリックします。
3. 「Power Management」-->「Redundancy」ページに移動します。



4. ドロップダウンメニューから次のいずれかを選択します。
   - 「None」: 非冗長モードを設定する場合。
   - 「N+N」: 冗長モードを設定する場合。
5. 「Save (保存)」をクリックします。

▼ CLI を使用して LLEM を有効または無効にする

1. Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
2. LLEM を有効または無効にするには、次のコマンドを使用します。

   -> **set /CMM/policy LIGHT_LOAD_EFFICIENCY_MODE=[enabled|disabled]**

3. LLEM が無効になっている場合は、次のコマンドで PSU サイドをオン/オフにすることができます。

   -> **set /CMM/policy MONITOR_PS*n*_SIDE*n*=[enabled|disabled]**

注 – 電源コードを抜く前に、PSU サイドをすべて無効にすることをお勧めします。

センサーの値 /CH/PS*n*/S*n*/I_12V または /CH/PS*n*/S*n*/V_OUT_OK をチェックできます。このとき、I_12V の値が 0、または V_OUT_OK が非アサートの場合は、対応するサイドが無効になっています。

任意の PSU サイドの監視を無効にできます。冗長モード、非冗長モードのどちらでも、LLEM は、監視対象となっているサイドに対して機能します。

▼ CLI を使用して冗長モードを有効にする

1. Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを使用して、冗長モードを設定します。

   -> **set /CMM/powermgmt redundancy=n+n**

   MONITOR_PS*n*_SIDE*n* がすべて有効に設定され、PSU サイドの監視を無効にしようとしても許可されません。

▼ CLI を使用して非冗長モードを有効にする

1. Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを使用して、非冗長モードを設定します。

   -> **set /CMM/powermgmt redundancy=none**

電源装置のファン速度を調整する

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電源装置のファン速度を調整する	• 52 ページの「電源装置のファン速度の調整について」 • 52 ページの「Web インタフェースを使用して電源装置のファン速度を設定する」 • 53 ページの「CLI を使用して電源装置のファン速度を設定する」	• CMM

電源装置のファン速度の調整について

Oracle ILOM 3.0.6.11 の新機能によって、電源装置のファン速度の調整が可能になりました。

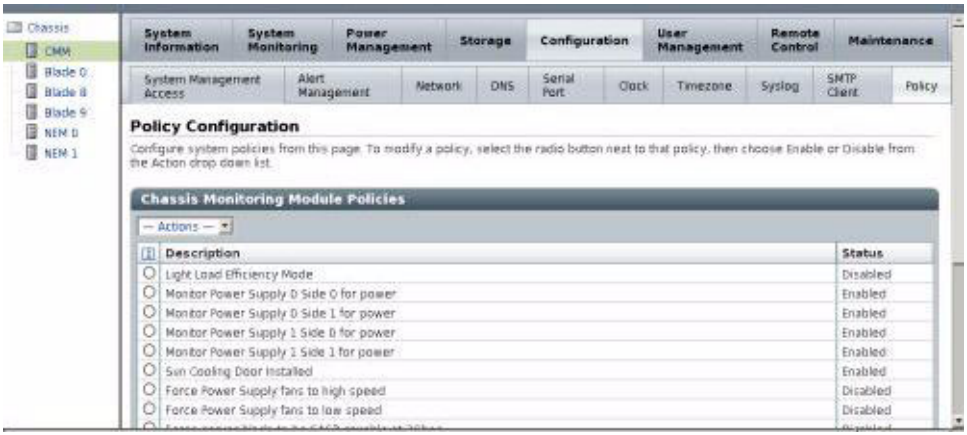
高速設定および低速設定は次のように定義されます。

- 高速とは、100% の許容速度でファンが回転している状態です。
- 低速とは、許容速度の 80% でファンが回転している状態です。

注 – 使用されている PEM スロットが半分以下の場合のみ、電源ユニット (PSU) のファンを低速にします。

▼ Web インタフェースを使用して電源装置のファン速度を設定する

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Chassis」ナビゲーション区画の「CMM」をクリックします。
3. 「Configuration」-->「Policy」に移動します。



4. 次のいずれかのオプションを選択します。
   - 「Force Power Supply fans to low speed」
   - 「Force Power Supply fans to high speed」
5. 「Actions」ドロップダウンメニューから「Enable」または「Disable」を選択します。

   電源装置のファンが電源装置を冷却する際、電源装置のファンは PEM スロットも冷却します。

注 – 両方のファン速度のポリシーを有効にした場合は、高速のポリシーが優先されます。

▼ CLI を使用して電源装置のファン速度を設定する

1. Oracle ILOM CLI インタフェースにログインします。
2. 次のコマンドを実行します。

   -> **set /CMM/policy PS_FANS_HIGH=[enabled|disabled]**

   -> **set /CMM/policy PS_FANS_LOW=[enabled|disabled]**

   電源装置のファンが電源装置を冷却する際、電源装置のファンは PEM スロットも冷却します。

注 – 両方のファン速度のポリシーを有効にした場合は、高速のポリシーが優先されます。

電力管理ポリシーの無効化

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
電力管理ポリシーの無効化	• 54 ページの「電力管理ポリシーについて」 • 54 ページの「Web インタフェースを使用して電力管理ポリシーを無効にする」 • 55 ページの「CLI を使用して電力管理ポリシーを無効にする」	• CMM

電力管理ポリシーについて

Oracle ILOM CMM 3.0.6.11c (ソフトウェアバージョン 3.1.13) では、電力管理の新たなオプションが追加されています。このオプションによって、ユーザーは電力管理を無効にでき、電力割当量を超えている場合でも、シャーシ内のブレードに電力が投入されるようにすることができます。

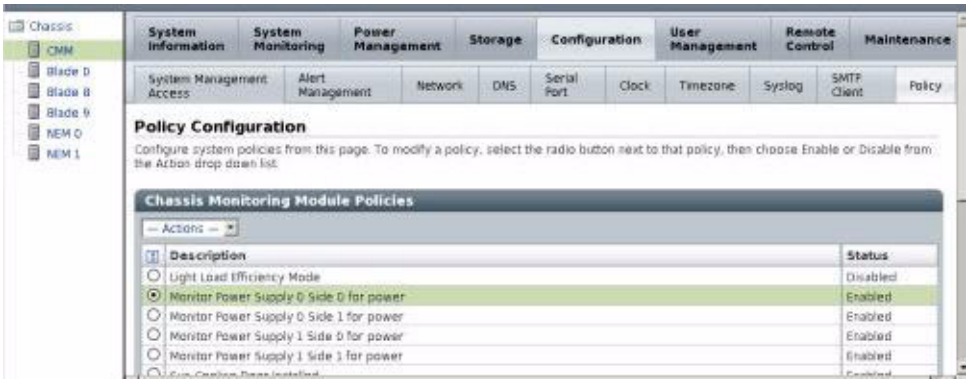
注意 – シャーシがシャットダウンする可能性があります。Oracle のサービス担当者に指示された場合を除いて、電力管理を無効にしないでください。

▼ Web インタフェースを使用して電力管理ポリシーを無効にする

1. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
2. 「Chassis」ナビゲーション区画から「CMM」を選択します。
3. 「Configuration」-->「Policy」に移動します。
4. 「Manage Chassis Power」を選択します。

5. 「Actions」ドロップダウンリストから「Disable」を選択します。

   次の Oracle ILOM のグラフィック画面は、「Policy Configuration」ページの下部にある「Manage Chassis Power」オプションを示しています。



▼ CLI を使用して電力管理ポリシーを無効にする

1. Oracle ILOM CMM CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

   -> **set /CMM/policy POWER_MANAGEMENT=disabled**

Sun Blade 6048 の特定の場合における Oracle ILOM 3.0

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Sun Blade 6048 の特定の場合における Oracle ILOM 3.0	• 56 ページの「2 本の電源コード構成の場合の Oracle ILOM の 動作」 • 56 ページの「2 本の電源コード用の CMM を設定する」 • 57 ページの「電源装置の特定の状態における Oracle ILOM 3.0 の表示」	• CMM

2 本の電源コード構成の場合の Oracle ILOM の動作

この節では、3 つの電源プラグのうち 2 つだけが A231 電源ユニット (PSU) に接続されている場合の、CMM およびサーバーモジュールファームウェアの動作を説明します。

各 A231 PSU の背面には 3 つのプラグがあります。これらのプラグは AC0、AC1、AC2 という名前が付けられています。各プラグに 220V の電源コードを接続できます。使用可能な 3 つのプラグのうち 2 つだけが A231 PSU に接続されている場合、シャーシ全体に 5600 ワットの電力が供給されます。

3 つあるプラグのうち 2 つだけを接続する場合、AC0 と AC1 に接続します。AC2 には接続しないようにしてください。

Sun Blade 6048 モジュラーシステムのセンサーの詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 補足 − Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステム』(821-3083) を参照してください。

▼ 2 本の電源コード用の CMM を設定する

1. **電源コードが 2 本の構成の設定を行うには、Oracle ILOM CMM で次のコマンドを使用して、電源装置サイドを無効にします。**

   -> **set /CMM/policy MONITOR_PS0_SIDE2=disabled**

   -> **set /CMM/policy MONITOR_PS1_SIDE2=disabled**

2. 無効にした電源コードのサイド 2 つの構成を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /CMM/policy/

/CMM/policy
    Targets:

    Properties:
        COOLING_DOOR_INSTALLED = disabled
        MONITOR_PS0_SIDE0 = enabled
        MONITOR_PS0_SIDE1 = enabled
        MONITOR_PS0_SIDE2 = disabled
        MONITOR_PS1_SIDE0 = enabled
        MONITOR_PS1_SIDE1 = enabled
        MONITOR_PS1_SIDE2 = disabled
        PS_FANS_HIGH = disabled

   Commands:
       cd
       set
       show
```

電源装置の特定の状態における Oracle ILOM 3.0 の表示

この節では、Sun Blade 6048 モジュラーシステム固有のケースでのシステムイベントログ (System Event Log、SEL) に対応する、センサーの表示をいくつか示します。

IPMItool を使用して SEL を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
ipmitool -H SPIPaddress -U root -P changeme sel list
```

AC ケーブルの接続が解除された場合

AC ケーブルの接続が解除されると、SEL には、58 ページの表: AC ケーブルの接続が解除された場合の SEL の表示で電源装置のモジュール 0、サイド 0 についての例の中で示されているように表示されます。

注 – イベントの順序は、センサーの読み取り結果に基づくものなので、厳密にはリアルタイムのイベントと一致しない場合もあります。

表: AC ケーブルの接続が解除された場合の SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
8	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Deasserted	AC が接続されていないため、PSU 0 side 0 の DC 出力はありません。
9	Voltage PS0/S0/V_IN_ERR	Predictive Failure Asserted	PSU 0 side 1 の AC の接続が解除されています。

AC ケーブルの接続が解除後に再接続された場合

AC ケーブルの接続が解除され、その後、再接続された場合、SEL には、58 ページの表: AC ケーブルが再接続された場合の SEL の表示に電源装置のモジュール 0、サイド 0 について示されているように表示されます。

表: AC ケーブルが再接続された場合の SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
8	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Deasserted	AC が接続されていないため、PSU 0 side 0 の DC 出力はありません。
9	Voltage PS0/S0/V_IN_ERR	Predictive Failure Asserted	PSU 0 side 0 の AC の接続が解除されています。
a	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Asserted	AC が接続されているため、PSU 0 side 0 の DC 出力は OK です。
b	Voltage PS0/S0/V_IN_ERR	Predictive Failure Deasserted (障害予測表明停止)	PSU 0 side 0 は接続されています。

stop /CH コマンド

stop /CH コマンドが適用されると、SEL には、59 ページの表: stop /CH SEL の表示の例のように表示されます。この例では、2 本の電源コード構成について説明しています。

表: stop /CH SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
29	Module/Board NEM1/STATE	Transition to Power Off	PSU の停止により、NEM 1 に十分な電力が供給されていません。
2a	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 0 side 0 は電力オフの状態です。
2b	Voltage PS0/S1/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 0 side 1 は電力オフの状態です。
2c	Module/Board NEM0/STATE	Transition to Power Off	PSU の停止により、NEM 0 に十分な電力が供給されていません。
2d	Voltage PS1/S0/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 1 side 0 は電力オフの状態です。
2e	Voltage PS1/S1/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 1 side 0 は電力オフの状態です。

start /CH コマンド

start /CH コマンドが適用されると、SEL には、59 ページの表: start /CH SEL の表示の例のように表示されます。この例では、2 本の電源コード構成について説明しています。

表: start /CH SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
2f	Module/Board NEM1/STATE	Transition to Running	NEM 1 に電力が投入されています。
30	OEM BL7/ERR	Predictive Failure Deasserted	ブレードモジュールにエラーはありません。
31	Module/Board NEM0/STATE	Transition to Running	NEM 0 に電力が投入されています。
32	Voltage PS1/S0/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 1 side 0 は電力オンの状態です。

表: `start /CH` SEL の表示 (続き)

イベント ID	デバイス	状態	説明
33	Voltage PS1/S1/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 1 side 1 は電力オンの状態です。
34	OEM BL1/ERR	Predictive Failure Deasserted	ブレードモジュールにエラーはありません。
35	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 0 side 0 は電力オンの状態です。
36	Voltage PS0/S1/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 0 side 1 は電力オンの状態です。

PSU が 1 つ取り外されている場合

PSU が 1 つ取り外されて、シャーシ内の消費電力が増加し PSU の冗長性を維持できない場合、SEL の表示は 60 ページの表: PSU が取り外された場合の SEL の表示に示すとおりになります。

表: PSU が取り外された場合の SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
1	Entity Presence PS0/PRSNT	Device Absent	PS0 がシステムにありません。
2	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 0 side 0 は電力オフの状態です。
3	Voltage PS0/S1/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 0 side 1 は電力オフの状態です。
4	Voltage PS0/S2/V_OUT_OK	State Deasserted	PSU 0 side 2 は電力オフの状態です。

PSU が再挿入される場合

61 ページの表: PSU が再挿入された場合の SEL の表示では、PSU がシステムに再挿入され、再び通電したことをシステムが認識した際の SEL の表示を示しています。

表: PSU が再挿入された場合の SEL の表示

イベント ID	デバイス	状態	説明
5	Entity Presence PS0/PRSNT	Device Present	PS0 がシステム内にあります。
6	Voltage PS0/S0/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 0 side 0 は電力オンの状態です。
7	Voltage PS0/S1/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 0 side 1 は電力オンの状態です。
8	Voltage PS0/S2/V_OUT_OK	State Asserted	PSU 0 side 2 は電力オンの状態です。

Sun Blade Zone Manager

説明	リンク
Sun Blade Zone Manager の機能とその使用に関する前提条件を学習する	• 64 ページの「Sun Blade Zone Manager について」
Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする	• 72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」
ストレージのゾーン構成を作成する	• 78 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の作成」
ストレージのゾーン構成を表示および変更する	• 90 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の表示または変更」
ストレージのゾーン構成を保存する	• 103 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の保存」
ストレージのゾーン構成をバックアップする	• 106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」
ストレージのゾーン構成を復元する	• 108 ページの「ゾーン構成の復元」
ゾーン構成をリセットする	• 111 ページの「ゾーン構成のリセット」
ゾーンのパスワードをリセットする	• 113 ページの「ゾーンのパスワードのリセット」

Sun Blade Zone Manager について

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Sun Blade Zone Manager について	• 64 ページの「サポートされる Oracle ILOM ユーザーインタフェース」 • 68 ページの「ゾーン構成の概要」 • 71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」	• CMM

サポートされる Oracle ILOM ユーザーインタフェース

トピックの説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
サポートされる Oracle ILOM ユーザーインタフェース	• 65 ページの「Web インタフェースを使用した Zone Manager へのアクセス」 • 67 ページの「CLI を使用した Zone Manager へのアクセス」	• CMM

注 – Sun Blade Zone Manager は、Oracle ILOM 3.0.10 以降が含まれる Sun Blade 6000 モジュラーシステム CMM SW 3.0.10 以降で使用できます。

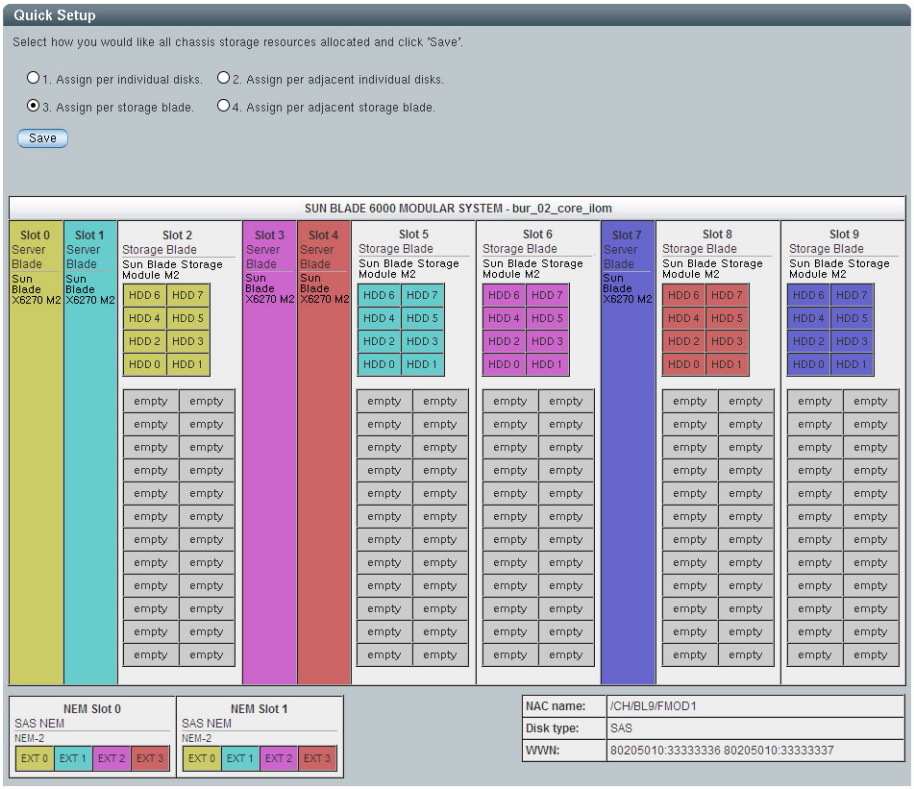
注 – Zone Manager には、Oracle ILOM の Web インタフェースまたはコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) からアクセスできます。Web インタフェースと CLI の機能は同等ですが、Web インタフェースには使いやすい機能がいくつか追加されています。

Web インタフェースを使用した Zone Manager へのアクセス

Sun Blade Zone Manager には、Oracle ILOM CMM の「Storage」タブからアクセスします。ストレージ構成の設定には次の 2 つのオプションがあります。

- Quick Setup は、4 種類のゾーン構成のいずれかを選択して、初回のゾーンを設定できます。
- Detailed Setup は、ブレードやストレージデバイスを個別に選択して、ゾーン構成を作成または変更できます。

次の例は、Quick Setup で使用できる構成の 1 つです。

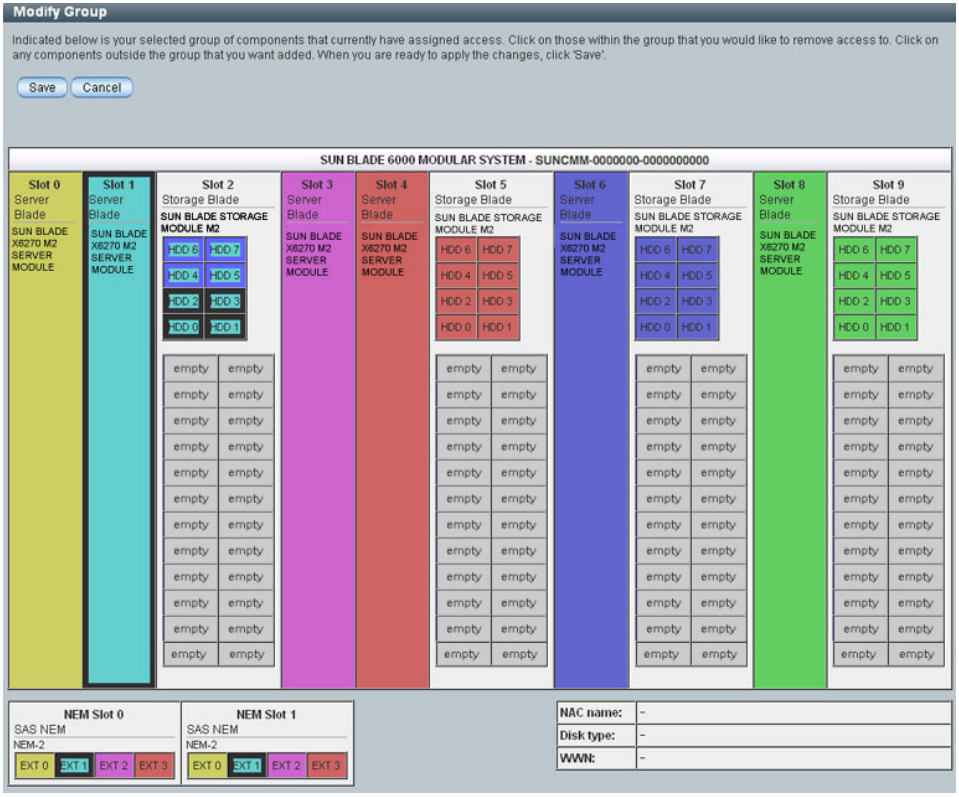


注 – 空の (empty) スロットは、何も接続されていないことを意味します。Sun Blade Zone Manager では、Sun Blade Storage Module M2 に 8 個の HDD スロットが表示されます。このスロットは、サポートされたドライブを接続したときに構成できます。また、HDD スロットの下には、24 個の空のスロットが表示されます。これらのスロットは、使用しないため設定できません。

注 – ターゲット NEM0 および NEM1 は、これらの NEM が接続されると Zone Manager に表示されますが、この時点では Sun Blade Zone Manager の外部 SAS 接続はサポートされません。

Quick Setup の詳細については、79 ページの「Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成」を参照してください。

Detailed Setup では、Quick Setup で設定したゾーン構成を変更したり、ストレージデバイスをサーバーブレードに個別に割り当てたりすることができます。次の例では、サーバーブレードへの割り当てから削除するために選択されているドライブを示しています。



ドライブ HDD4-HDD7 が選択され、青色で強調表示されています。構成を保存すると、これらのストレージデバイスはスロット 1 のサーバーブレードとは結合していない状態になります。

Detailed Setup を使用してゾーン構成を変更する方法の詳細については、91 ページの「Web インタフェースを使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する」を参照してください。

CLI を使用した Zone Manager へのアクセス

コマンド行インタフェースでは、名前空間 /STORAGE/sas_zoning からブレードやストレージデバイスのゾーン機能にアクセスできます。

ゾーン機能が有効になっている場合、SAS-2 対応のブレードと NEM がターゲットとして /STORAGE/sas_zoning の下に表示されます。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show /STORAGE/sas_zoning

     Targets
       BL0
       BL6
       BL7
       BL8
       BL9
       NEM0
       NEM1

    Properties
      zone_management_state = enabled
      reset_password_action = (Cannot show property)
      reset_access_action = (Cannot show property)

    Commands:
       cd
       set
       show
```

注 – ターゲット NEM0 および NEM1 は、これらの NEM が接続されると Zone Manager に表示されますが、この時点では Sun Blade Zone Manager の外部 SAS 接続はサポートされません。

ストレージブレードに取り付けられているストレージデバイスは、ストレージブレードのターゲットとして表示されます。たとえば、BL9 がスロット 9 に接続されているストレージブレードである場合、このブレードに接続されているストレージデバイスは次のように表示されます。

```
-> show /STORAGE/sas_zoning/BL9

  Targets:
    HDD0
    HDD2
    HDD3
    HDD5
```

ゾーン構成は、サーバーブレードまたはストレージブレードのいずれからもアクセスと変更ができます。いずれの方法でも同じ結果が得られます。

ゾーン構成の概要

トピックの説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ゾーン構成の概要	• 68 ページの「ゾーン機能のコマンド」 • 69 ページの「サーバーブレードへのストレージの割り当て」 • 70 ページの「ストレージへのサーバーブレードの割り当て」	• CMM

ゾーン機能のコマンド

ストレージをサーバーブレードに割り当てるか、サーバーブレードをストレージデバイスに割り当てることで設定できます。いずれの方法でも同じ結果が得られます。

ストレージデバイスをサーバーブレードに割り当てる場合は、次のコマンドを使用します。

-> **set add_storage_access=/CH/BL*n*/HDD*n***

ここでは、BL*n* はストレージブレードで、HDD*n* はストレージブレードに取り付けられているハードディスクドライブです。

必要に応じて、ストレージデバイスをコンマで区切ることで、同じコマンド行で複数のストレージデバイスをブレードに割り当てることができます。たとえば、次のように表示されます。

-> **set add_storage_access=/CH/BL*n*/HDD0,/CH/BL*n*/HDD*1***

サーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる場合は、次のコマンドを使用します。

-> **set add_host_access=/CH/BL*n***

ここでは、BL*n* はストレージデバイスの割り当て先のサーバーブレードを表します。

サーバーブレードへのストレージの割り当て

サーバーブレードにストレージデバイスを割り当てる前は、このブレードの下に表示されるターゲットはありません。次の例で、BL0 はスロット 0 のサーバーブレードです。

```
-> cd /STORAGE/sas_zoning/BL0
-> show

    /STORAGE/sas_zoning/BL0
     Targets:

     Properties:
     add_storage_access = (Cannot show property)
     remove_storage_access = (Cannot show property)
```

次のコマンドでは、シャーシのスロット 9 のストレージブレードに取り付けられている HDD0 がスロット 0 に取り付けられているサーバーブレードに割り当てられます。

-> **set add_storage_access=/CH/BL9/HDD0**

ストレージデバイスがサーバーブレードに割り当てられると、そのストレージデバイスがサーバーブレードのターゲットとして表示されます。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show

   /STORAGE/sas_zoning/BL0

   Targets:
      0 (/CH/BL9/HDD0)

   Properties:
      add_storage_access = (Cannot show property)
      remove_storage_access = (Cannot show property)
```

ストレージへのサーバーブレードの割り当て

ストレージデバイスにブレードを割り当てた後で、このストレージデバイスの下にターゲットが表示されます。次の例で、HDD0 はシャーシのスロット 9 に取り付けられているストレージブレードに接続されたストレージデバイスです。

```
-> cd /STORAGE/sas_zoning/BL9/HDD0
-> show

   /STORAGE/sas_zoning/BL9/HDD0

   Targets:

   Properties:
      type = Hard Disk
      disk_type = SAS
      wwn = 0x5000c50003d3a765, 0x5000c50003d3a766
      sas_speed = 6.0 Gbps
      add_host_access = (Cannot show property)
      remove_host_access = (Cannot show property)
```

次のコマンドでは、スロット 0 のサーバーブレードがストレージブレード 9 の HDD0 に割り当てられます。

```
-> set add_host_access=/CH/BL0
```

サーバーブレードがストレージデバイスに割り当てられると、そのサーバーブレードがストレージデバイスのターゲットとして表示されます。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show

   /STORAGE/sas_zoning/BL9/HDD0

   Targets:
      0 (/CH/BL0)

   Properties:
      type = Hard Disk
      disk_type = SAS
      wwn = 0x5000c50003d3a765, 0x5000c50003d3a766
      sas_speed = 6.0 Gbps
      add_host_access = (Cannot show property)
      remove_host_access = (Cannot show property)
```

ゾーンの作成および変更する方法の詳細については、次の手順を参照してください。

- 78 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の作成」
- 90 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の表示または変更」

サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成	• 71 ページの「SAS-2 対応のハードウェア」 • 71 ページの「その他のシステム要件」	• CMM

SAS-2 対応のハードウェア

Sun Blade Zone Manager で認識されるためには、シャーシにある次のハードウェアはいずれも SAS-2 に対応している必要があります。

- SAS-2 REM のあるサーバーブレード
- Network Express Module (NEM)
- ストレージブレード

ストレージモジュールまたはサーバーブレードが SAS-2 に対応していない場合は、Zone Manager の構成に含まれません。このブレードの存在は Web インタフェースで確認できますが、デバイスは「non SAS-2」と表示されます。CLI では、SAS-2 非対応のブレードは一切表示されません。

CPU ブレードを除く SAS-2 デバイスは、Zone Manager で認識されるには電源が入っている必要があります。また、障害が発生した状態の SAS-2 デバイスは Zone Manager で認識されないことがあります。コンポーネントの障害の検出については、使用しているプラットフォーム固有の Oracle ILOM 補足資料または各プラットフォームの管理マニュアルを参照してください。

その他のシステム要件

- Sun Blade 6000 モジュラーシステムには、PCIe 2.0 準拠のミッドプレーンを搭載してください。これを確認する方法の詳細は、『Sun Blade 6000 Modular System Product Notes』を参照してください。
- Sun Blade 6000 モジュラーシステムにソフトウェアリリース 3.2.1 がインストールされている必要があります。このリリースには、SAS-2 をサポートする最低バージョン (3.0.10.15a) の Oracle ILOM CMM ファームウェアと、Sun Blade Zone Manager が含まれています。
- SAS-2 のサポート対象のコンポーネント (SAS-2 REM、SAS-2 NEM、および SAS-2 ストレージモジュールが搭載されたサーバーモジュール) は、事前に取り付けておいてください。

- SAS-2 NEM は、ゾーン機能をサポートしているファームウェアバージョンレベルにしてください。NEM のプロダクトノートで、バージョン情報と利用可能な更新を確認してください。
- Oracle ILOM CMM の初期設定と構成を行い、このドキュメントの「第 2 章」で説明されている接続方法 (Web ブラウザまたは CLI) のいずれの方法で接続するかを決めておく必要があります。

Sun Blade Zone Manager へのアクセス

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
Sun Blade Zone Manager へのアクセス	• 72 ページの「Web インタフェースを使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする」 • 76 ページの「CLI を使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする」	• CMM

▼ Web インタフェースを使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする

開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

次の手順に従って、Web インタフェースを使用して Zone Manager にアクセスして有効にします。

1. **Web ブラウザを開き、次の URL を入力して CMM にログインします。**

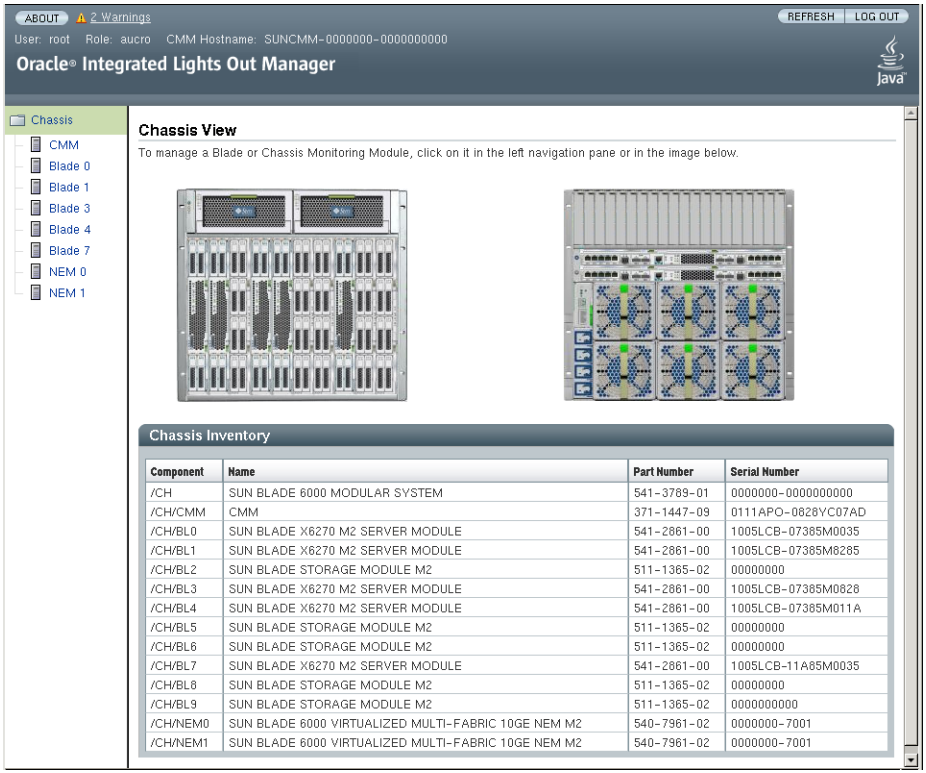
   `http://`*chassis_sp_ipaddress***`/`**

   chassis_sp_ipaddress は、シャーシのサービスプロセッサの IP アドレスです。

   Oracle ILOM のログインページが表示されます。

2. `root` ユーザーアカウントでログインします。

   Oracle ILOM CMM のメインページが表示されます。



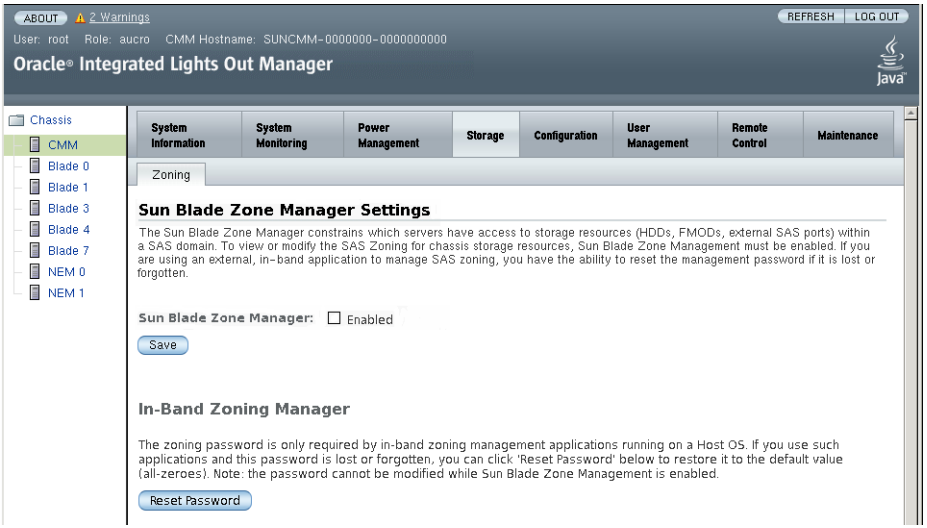
Component	Name	Part Number	Serial Number
/CH	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM	541-3789-01	0000000-0000000000
/CH/CMM	CMM	371-1447-09	0111APO-0828YC07AD
/CH/BL0	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE	541-2861-00	1005LCB-07385M0035
/CH/BL1	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE	541-2861-00	1005LCB-07385M8285
/CH/BL2	SUN BLADE STORAGE MODULE M2	511-1365-02	00000000
/CH/BL3	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE	541-2861-00	1005LCB-07385M0828
/CH/BL4	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE	541-2861-00	1005LCB-07385M011A
/CH/BL5	SUN BLADE STORAGE MODULE M2	511-1365-02	00000000
/CH/BL6	SUN BLADE STORAGE MODULE M2	511-1365-02	00000000
/CH/BL7	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE	541-2861-00	1005LCB-11A85M0035
/CH/BL8	SUN BLADE STORAGE MODULE M2	511-1365-02	00000000
/CH/BL9	SUN BLADE STORAGE MODULE M2	511-1365-02	0000000000
/CH/NEM0	SUN BLADE 6000 VIRTUALIZED MULTI-FABRIC 10GE NEM M2	540-7961-02	0000000-7001
/CH/NEM1	SUN BLADE 6000 VIRTUALIZED MULTI-FABRIC 10GE NEM M2	540-7961-02	0000000-7001

注 – 左の区画には、取り付けられているサーバーブレードが一覧表示されます。ストレージモジュールは表示されません。これは、Oracle ILOM CMM がストレージモジュールの Integrated Lights Out Management 機能を制御しているためです。

---

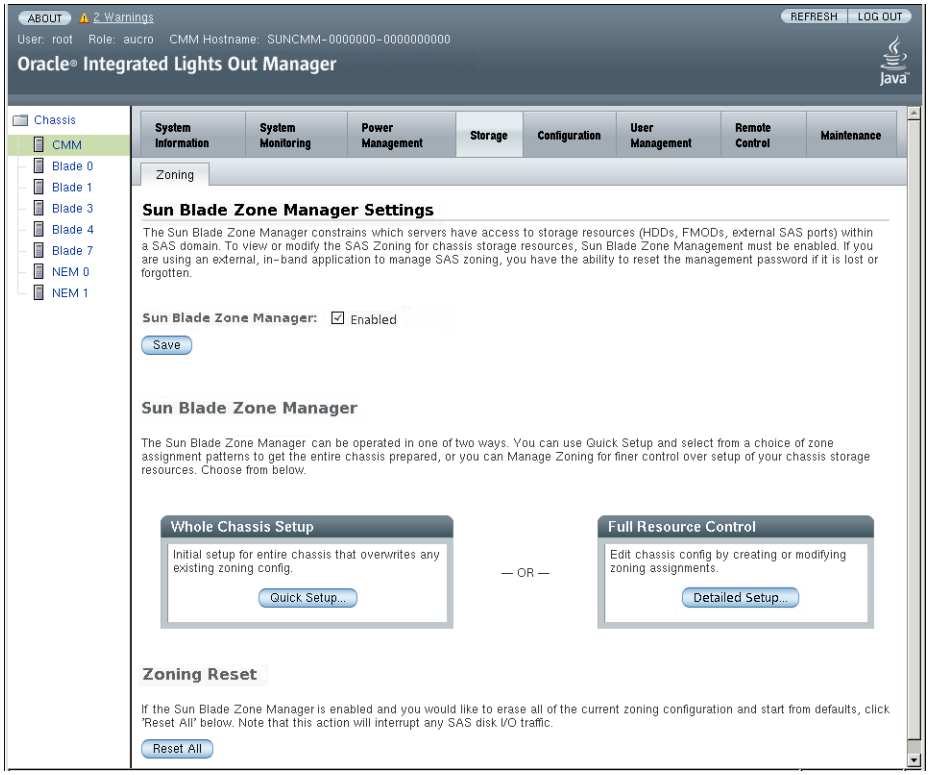
3. 左側の「Chassis」ナビゲーション区画で「CMM」をクリックし、「Storage」タブをクリックします。

「Zone Manager Settings」サブページが表示されます。

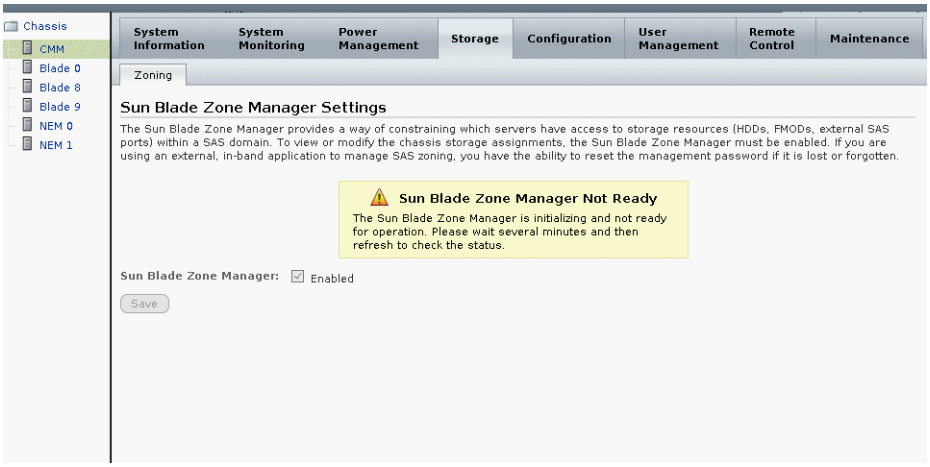


4. 「Enable」チェックボックスをオンにして CMM のゾーン機能を有効にし、「Save」ボタンをクリックします。

これで、CMM からゾーン機能の作成、表示、管理ができるようになります。



Oracle ILOM CMM サービスがまだ初期化中の場合は、次のメッセージが表示されます。



このメッセージが表示された場合は、5 分間待ってから、再度実行してください。このページを閉じてから再度開くか、更新する必要があります。

5. 78 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の作成」**の手順を使用して、ストレージのゾーン機能を設定します。**

▼ CLI を使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスして有効にする

開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

次の手順に従って、CLI を使用して Zone Manager にアクセスして有効にします。

1. **端末ウィンドウを開き、次のコマンドを入力して CMM への SSH 接続を確立します。**

   # **ssh -l root** *cmm_ipaddress*

   ここでは、*cmm_ipaddress* は、CMM の IP アドレスを表します。

   ログインプロンプトが表示されます。

2. **次に示すように、`root` としてログインしてルートパスワードを入力します。**

   /*hostname*/`login:` **root**

   パスワード: *xxxxxxxx*

   正常にログインすると、次の CLI プロンプトが表示されます。

   `->`

3. 次のコマンドを入力して、ゾーン機能に必要な最低バージョンの CMM ファームウェアがインストールされていることを確認します。

   -> **version**

   Oracle ILOM ファームウェアは、3.0.10 以上でなければなりません。これよりも前のバージョンである場合は、バージョン 3.2.1 (またはそれ以降) の Oracle ILOM CMM ファームウェアをダウンロードする必要があります。ファームウェアのダウンロードおよびアップグレードの手順については、「第 3 章」を参照してください。ダウンロード後、Oracle ILOM CMM ファームウェアをアップグレードします。

4. 次のコマンドを入力して、sas_zoning ディレクトリに移動します。

   -> **cd /STORAGE/sas_zoning/**

5. show コマンドを入力して、-sas_zoning が有効になっているかどうかを確認します。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show
   /STORAGE/sas_zoning

   Targets:

   Properties:
       zone_management_state = disabled
       reset_password_action = (Cannot show property)
       reset_access_action = (Cannot show property)

   Commands:
       cd
       set
       show
```

   -zone_management_state = disabled と表示されている場合は、保存されている SAS-2 のゾーン設定はありません。

6. 必要に応じて、次のコマンドを入力してゾーン機能を有効化します。

   -> **set zone_management_state=enabled**

   - Zone Manager が有効化できる状態になっている場合は、次のメッセージが表示されます。
   - Enabling the Sun Blade Zone Manager will result in the clearing of all zoning configuration in the installed chassis SAS hardware, and any SAS disk I/O in progress will be interrupted.
   - Are you sure you want to enable the Sun Blade Zone Manager (y/n)? **y**
   - Set 'zone_management_state' to 'enabled'

- Oracle ILOM CMM が初期化されていない場合は、次のメッセージが表示されます。
- `set: The Sun Blade Zone Manager is initializing and not ready for operation. Please wait several minutes and try again.`
- このメッセージが表示された場合は、5 分間待ってから、コマンドを再度実行します。

7. **78 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の作成」の手順を使用して、ストレージのゾーン機能を設定します。**

シャーシのストレージアクセス構成の作成

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
シャーシのストレージアクセス構成の作成	• 78 ページの「シャーシのストレージアクセスの作成について」 • 79 ページの「Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成」 • 85 ページの「Detailed Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成」 • 88 ページの「CLI を使用したシャーシのストレージ構成の作成」	• CMM

シャーシのストレージアクセスの作成について

シャーシのストレージアクセスを作成するには、次の 3 つのオプションがあります。Quick Setup で Web インタフェースを使用する方法、Detailed Setup で Web インタフェースを使用する方法、CLI を使用する方法です。また、設定を復元して、ゾーン作成済みの構成のバックアップを使用することもできます (108 ページの「ゾーン構成の復元」を参照)。

Quick Setup は、SAS-2 に準拠した CPU ブレードのシャーシの初期ストレージアクセス構成を作成するプロセスを自動化するウィザードです。Quick Setup は Oracle ILOM Web インタフェースからのみ使用できます。CLI には、Quick Setup と同等の機能はありません。

Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成

Oracle ILOM の Web インタフェースの Quick Setup では、ブレードやストレージデバイスをシャーシ内でゾーン化する方法を 4 種類の構成オプションから選択できます。

注 – ターゲット NEM0 および NEM1 は、これらの NEM が接続されると Zone Manager に表示されますが、この時点では Sun Blade Zone Manager の外部 SAS 接続はサポートされません。

次のトピックで、Quick Setup で使用できる 4 つのオプションについて説明します。

- 79 ページの「オプション 1: 個別のディスクごとに割り当てる」
- 80 ページの「オプション 2: 隣接する個別のディスクごとに割り当てる」
- 81 ページの「オプション 3: ストレージブレードごとに割り当てる」
- 82 ページの「オプション 4: 隣接するストレージブレードごとに割り当てる」

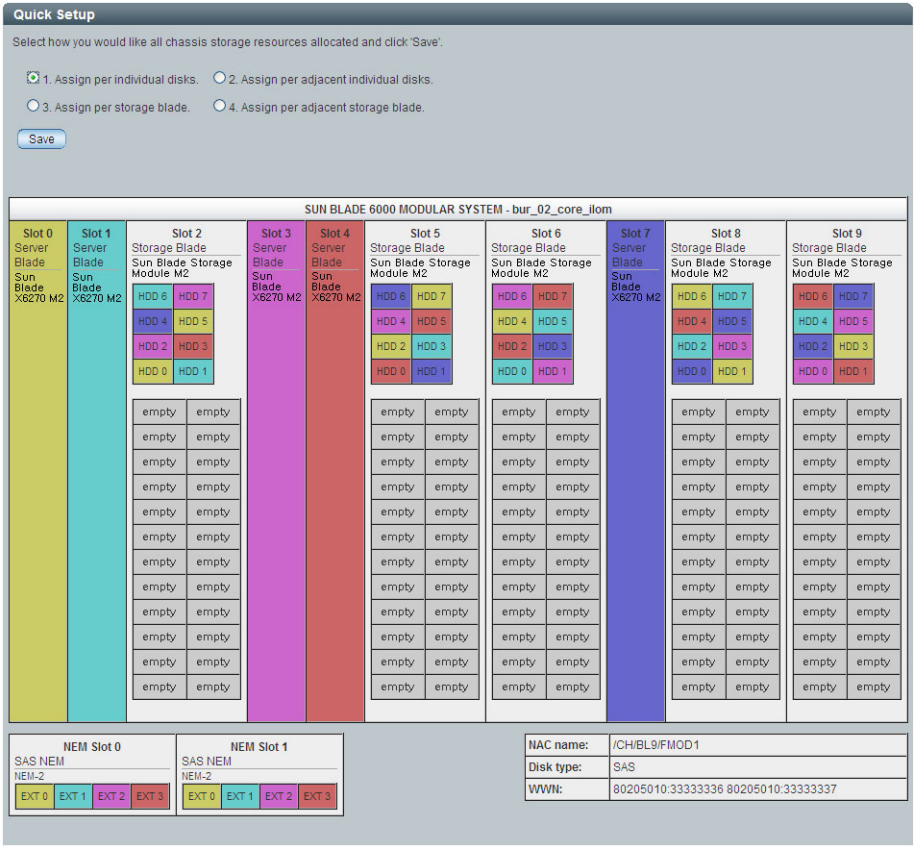
また、この節では次のトピックについて説明します。

- 83 ページの「Quick Setup を使用して Web インタフェースでシャーシの初期ストレージ構成を作成する」

オプション 1: 個別のディスクごとに割り当てる

このオプションでは、ラウンドロビンアルゴリズムを使用してディスクをホストに割り当てます。ディスクの所有権は、有効なストレージモジュールに均等に分配されます。

このオプションは、単一のストレージモジュールの障害や削除がアレイの停止を引き起こさないような耐障害性に適しています。

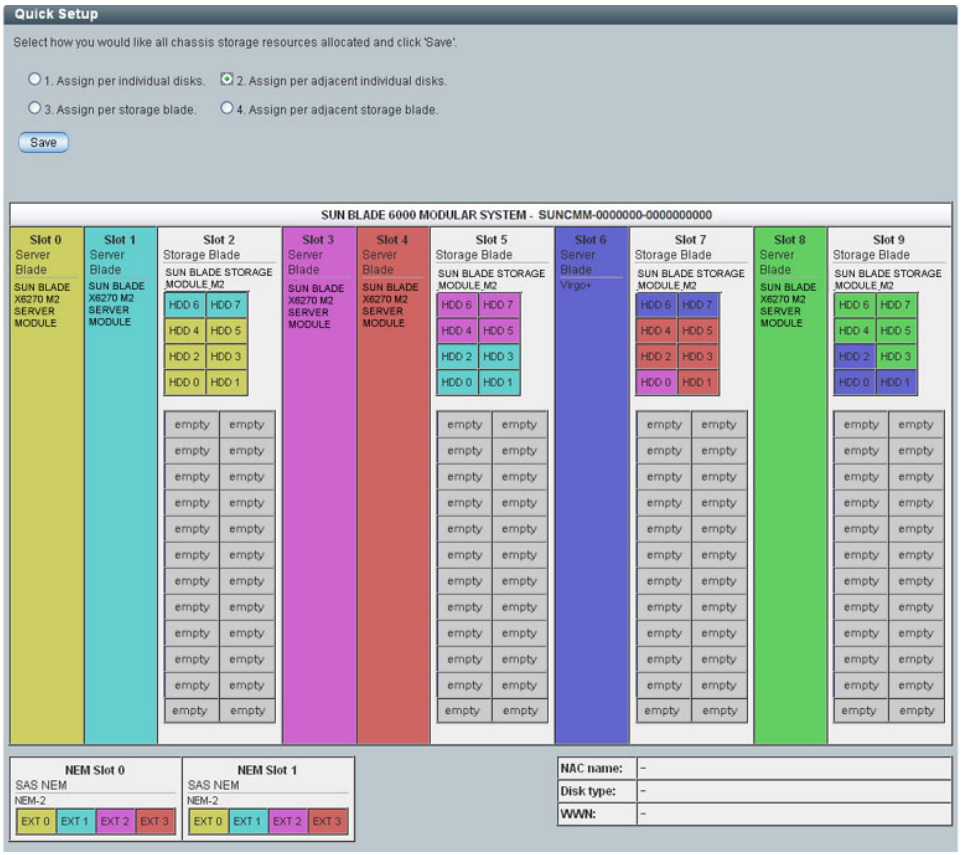


オプション 2: 隣接する個別のディスクごとに割り当てる

このオプションでは、ストレージデバイスの数がサーバーブレード間で均等に分割されます。すべてのサーバーで、できるだけディスクが同数になるように割り当てられます。

有効なすべてのストレージブレード間で、ラウンドロビン方式でストレージを割り当てるのではなく、サーバーブレードに隣接するストレージブレードからストレージが割り当てられます。サーバーブレードに隣接するストレージブレードがない場合は、できるだけ近いストレージブレードが使用されます。

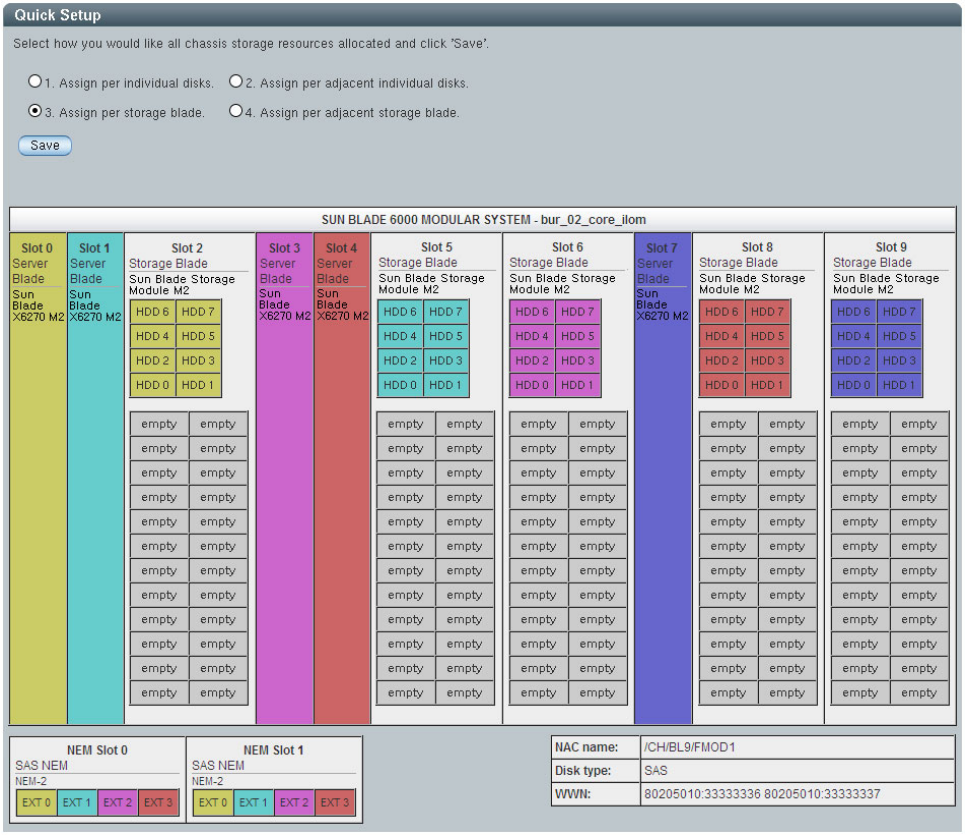
このオプションは、ストレージブレードよりもサーバーブレードの数が多く、各ストレージブレードに同数のストレージデバイスを割り当てる必要がある場合に適しています。



オプション 3: ストレージブレードごとに割り当てる

このオプションでは、スロット 0 から開始してサーバーを検出し、もっとも近くにある有効なストレージモジュールを割り当てます。たとえば、7 つのサーバーと 3 つのストレージモジュールがある場合、最初の 3 つのサーバーのみにストレージモジュールが割り当てられます。

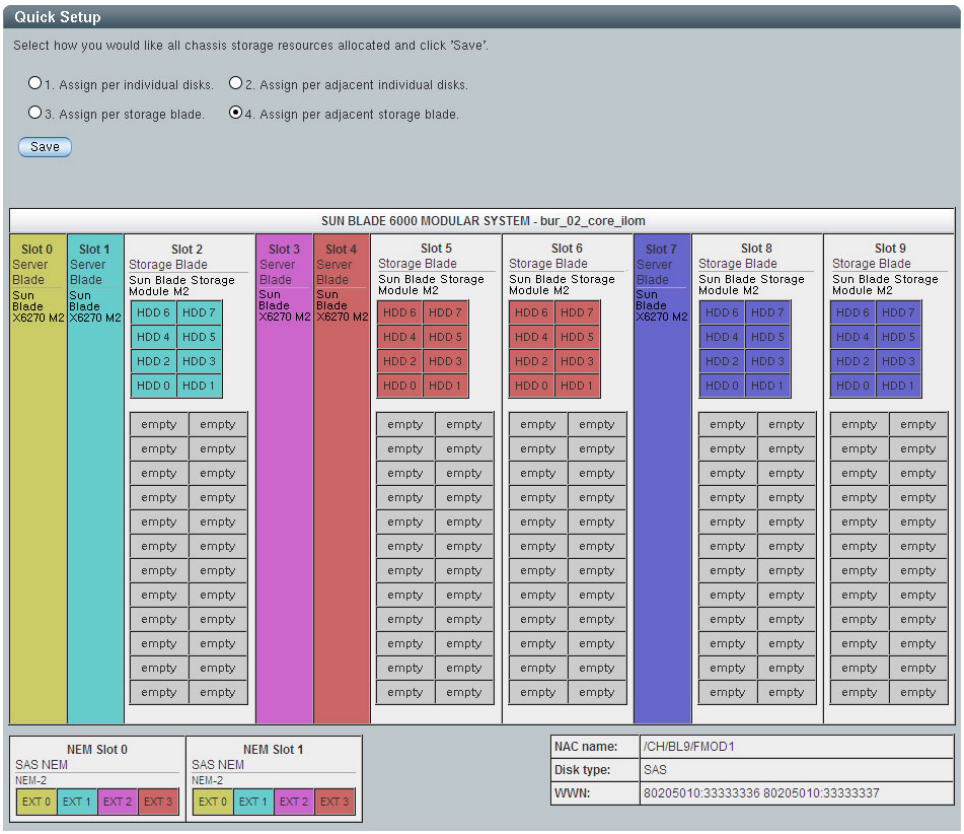
このオプションは、ストレージブレードとモジュールの数が同数以上あるの場合に適しています。ストレージブレードが少ないと、一部のサーバーブレードがストレージデバイスに割り当てられません。



オプション 4: 隣接するストレージブレードごとに割り当てる

このオプションでは、隣接するスロット内で、サーバーごとに 1 つのストレージモジュールのあるサーバーが検出されます。隣接するスロットにストレージモジュールがないサーバーには、どのストレージも割り当てられません。

このオプションは、ストレージブレードとサーバーブレードが同数で、各サーバーブレードに隣接する一意のストレージブレードがある場合に適しています。



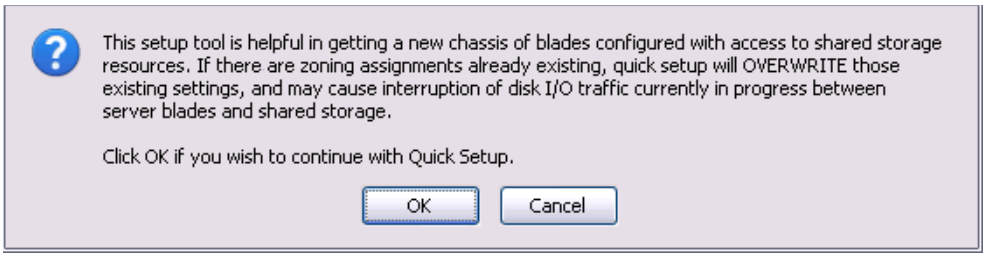
▼ Quick Setup を使用して Web インタフェースでシャーシの初期ストレージ構成を作成する

開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

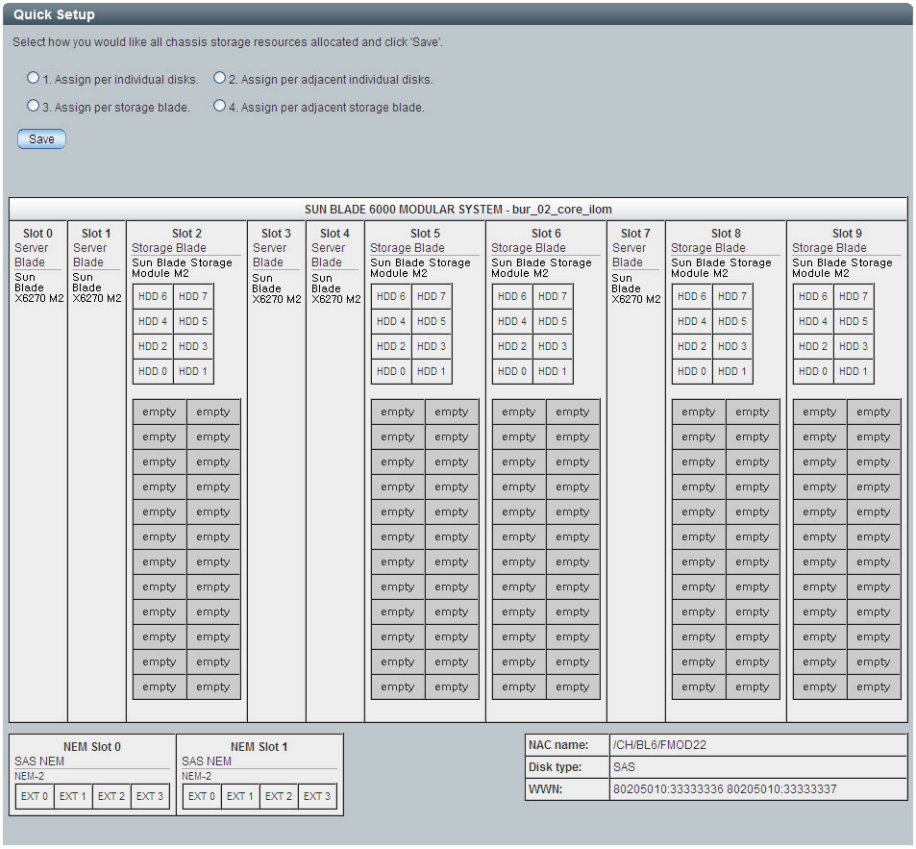
2. 「Sun Blade Zone Manager」セクションで、「Quick Setup」ボタンをクリックします。

   警告メッセージが表示されます。



3. 既存のゾーン機能を上書きする場合は「OK」をクリックします。

   「Quick Setup」画面が表示されます。



ストレージデバイスが接続されていない HDD スロットは「empty」と表示されます。また、このようなスロットは Quick Setup の構成には含まれません。

4. **Quick Setup のいずれかのオプションを選択します。**

   各オプションの説明については、79 ページの「Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成」を参照してください。

   オプションを選択すると、画面に CPU ブレードおよびストレージデバイス (HDD) との間で色分けされたゾーン機能の割り当てが表示されます。Sun Blade Zone Manager によって NEM0 と NEM1 の外部 SAS 接続が割り当てられますが、この接続は正式にはサポートされていません。

注 –「Save」ボタンをクリックするまで、構成は保存されません。

---

5. **「Save」ボタンをクリックして構成を保存します。**

   構成を保存した時の結果の詳細については、103 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の保存」を参照してください。

6. **構成をバックアップします。**

   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

Detailed Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成

Detailed Setup の「New Assignments」オプションを使用して、シャーシのストレージアクセス構成を手動で作成できます。

注 – ターゲット NEM0 および NEM1 は、これらの NEM が接続されると Zone Manager に表示されますが、この時点では Sun Blade Zone Manager の外部 SAS 接続はサポートされません。

▼ Detailed Setup を使用して Web インタフェースでシャーシのストレージ構成を作成する

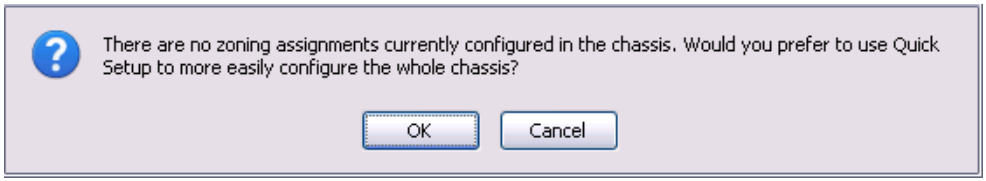
開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

1. **Sun Blade Zone Manager へアクセスします。**

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. **「Sun Blade Zone Manager」セクションで、「Detailed Setup」ボタンをクリックします。**

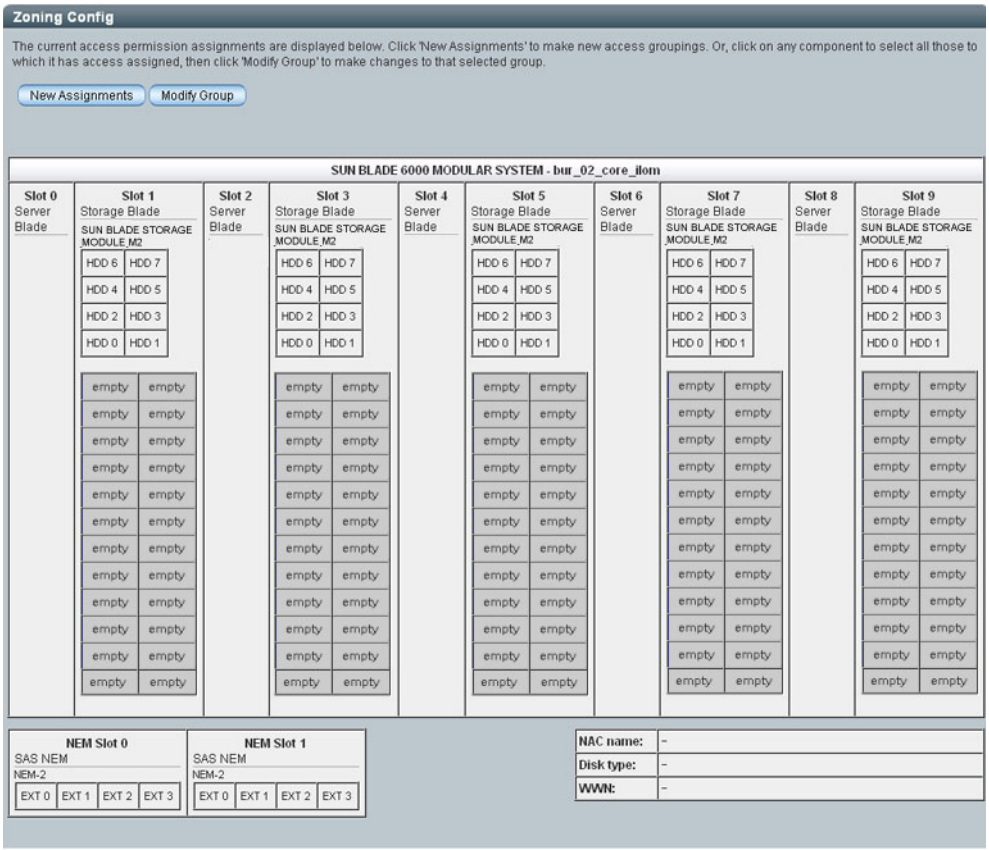
   シャーシのストレージ構成を設定していない場合には、次のメッセージが表示されます。



3. 次のいずれかの手順を実行します。
   - Detailed Setup で設定を行う場合は、「Cancel」をクリックします。

     「Cancel」をクリックすると、「Detailed Setup」ページが開きます。
   - Quick Setup で元の構成を設定する場合には、「OK」をクリックします。

   「OK」をクリックすると、「Quick Setup」ページが開きます。Quick Setup の詳細については、79 ページの「Quick Setup を使用したシャーシのストレージアクセス構成の作成」を参照してください。



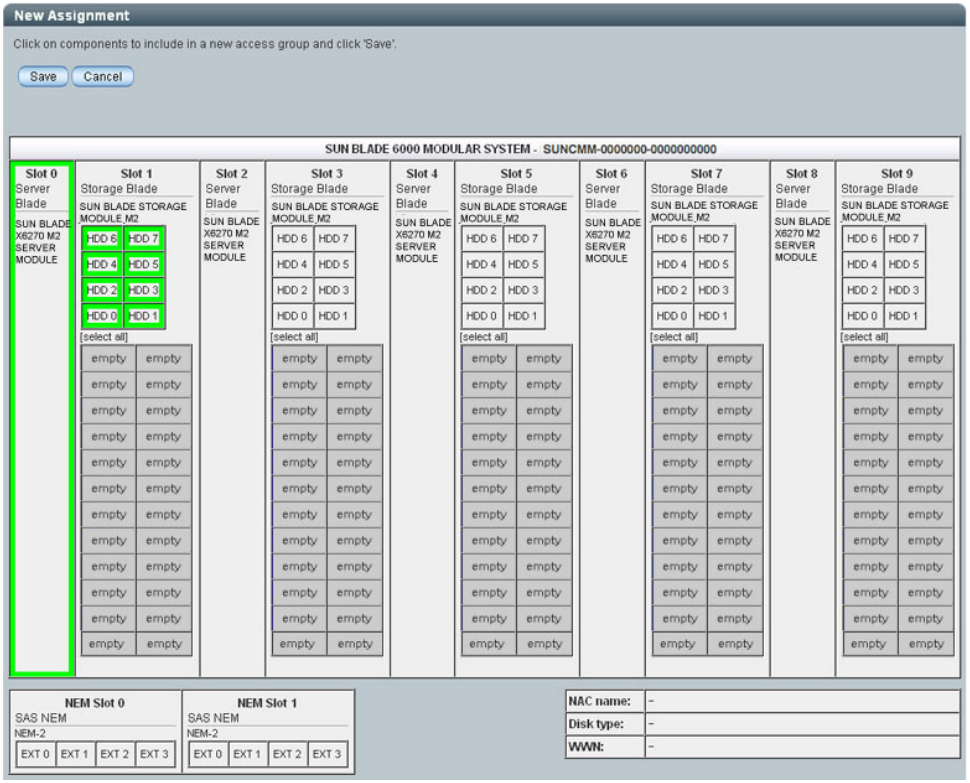
4. 「New Assignments」ボタンをクリックします。

5. **サーバーブレードをクリックし、次にそのサーバーブレードに割り当てる HDD をクリックします。または、複数のサーバーブレードを選択して、この割り当てを行います。**

   ストレージデバイスが接続されていない HDD スロットは「empty」と表示されます。このようなスロットはサーバーブレードに割り当てることができません。

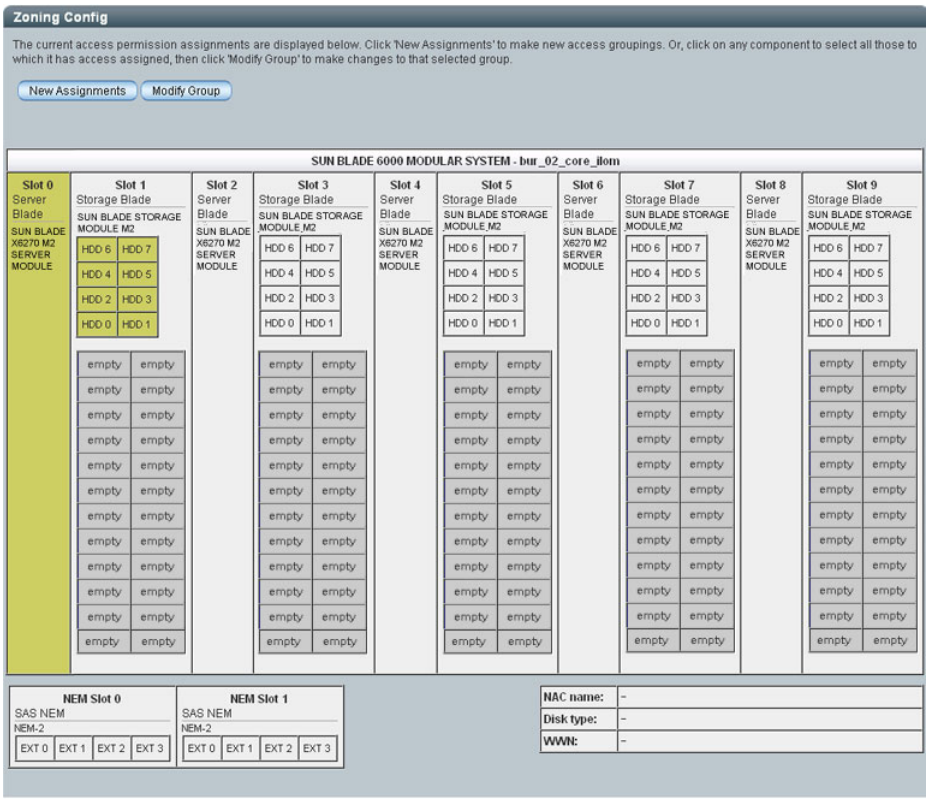
注意 – 複数のサーバーブレードに HDD を割り当てる場合は、サーバーブレードのマルチパス化が有効になっていることを確認してください。詳細については、98 ページの「Web インタフェースを使用して複数のサーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる」を参照してください。

Sun Blade Zone Manager によって NEM0 と NEM1 の外部 SAS 接続が割り当てられますが、この時点ではサポートされません。



6. **「Save」をクリックして構成を保存します。**

   構成を保存した時の結果の詳細については、103 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の保存」を参照してください。



7. **構成をバックアップします。**

   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

CLI を使用したシャーシのストレージ構成の作成

シャーシのストレージ構成は、ストレージをサーバーブレードに割り当てるか、サーバーブレードをストレージデバイスに割り当てることで作成できます。いずれの方法でも同じ結果が得られます。

▼ CLI を使用してシャーシのストレージ構成を作成する

開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. **次のいずれかの方法でシャーシのストレージ構成を作成します。**

   - **方法 1**: ストレージモジュールデバイスをサーバーブレードに割り当てるために、次のコマンドを使用します

     -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL***n*

     -> **set add_storage_access=***path_to_storage_device*

     ここでは、BL*n* はサーバーブレード、*path_to_storage_device* はそのブレードに割り当てるストレージデバイスのパスを表します。(/CH/BL1/HDD0 など)。

   - **方法 2**: サーバーブレードをストレージデバイスに割り当てるために、次のコマンドを使用します。

     -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL***n***/HDD***n*

     さらに次のコマンドを実行します。
     -> **set add_host_access=***path_to_blade_server*

     ここでは、BL*n* はストレージブレード、HDD*n* はそのストレージブレードに取り付けられているストレージデバイス、*path_to_blade_server* はそのストレージデバイスに割り当てるサーバーのパスを表わします (/CH/BL0 など)。

   次の例では、上記のコマンドを使用して、スロット 1 にあるストレージブレードのストレージデバイスと、スロット 0 にあるサーバーブレードとの間にゾーンを設定する方法について説明します。

   - **方法 1** − ストレージモジュールデバイスをサーバーブレードに割り当てるためのコマンドの例。

コマンド	説明
-> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL0**	cd コマンドを実行して、ストレージを割り当てるホストサーバーブレードにアクセスします。
-> **set add_storage_access=/CH/BL1/HDD0**	ブレードスロット 1 にあるストレージモジュールの HDD0 を現在のホストに割り当てます。
-> **set add_storage_access= /CH/BL1/HDD0,/CH/BL1/HDD1**	単一のコマンド行で複数のデバイスを割り当てます。デバイスへのフルパスを使用し、各デバイスをコンマで区切ります (スペースは入れない)。
-> **show** /STORAGE/sas_zoning/BL0 Targets: 0 (/CH/BL1/HDD0) 1 (/CH/BL1/HDD1)	show コマンドを使用して、現在のホストに割り当てられたデバイスを確認します。

- **方法 2** – サーバーブレード (BL0) をストレージモジュールデバイス (BL1/HDD0) に割り当てるためのコマンドの例。

コマンド	説明
-> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL1/HDD0**	cd コマンドを実行して、ストレージモジュールデバイス (この場合は BL1/HDD0) にアクセスします。
-> **set add_host_access=/CH/BL0**	ストレージモジュールの現在のデバイス (HDD0) をブレードスロット 0 のホストに割り当てます。
-> **show** /STORAGE/sas_zoning/BL1/HDD0 Targets: 0 (/CH/BL0)	show コマンドを使用して、現在のデバイスの割り当てを確認します。

3. **構成をバックアップします。**

   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

シャーシのストレージアクセス構成の表示または変更

Web インタフェースで Detailed Setup を使用するか、CLI を使用して、シャーシの現在のストレージアクセス構成を表示または変更ができます。

次の表に示されているいずれかの手順を実行して、現在のストレージ構成を表示または変更します。

説明	リンク
Web インタフェースを使用して現在のストレージ構成を表示および変更する	91 ページの「Web インタフェースを使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する」
CLI を使用して現在のストレージ構成を表示および変更する	96 ページの「CLI を使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する」
複数のサーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる	98 ページの「Web インタフェースを使用して複数のサーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる」
ストレージ構成を表形式で表示する	101 ページの「Web インタフェースを使用してストレージアクセス構成表を表示する」

▼ Web インタフェースを使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する

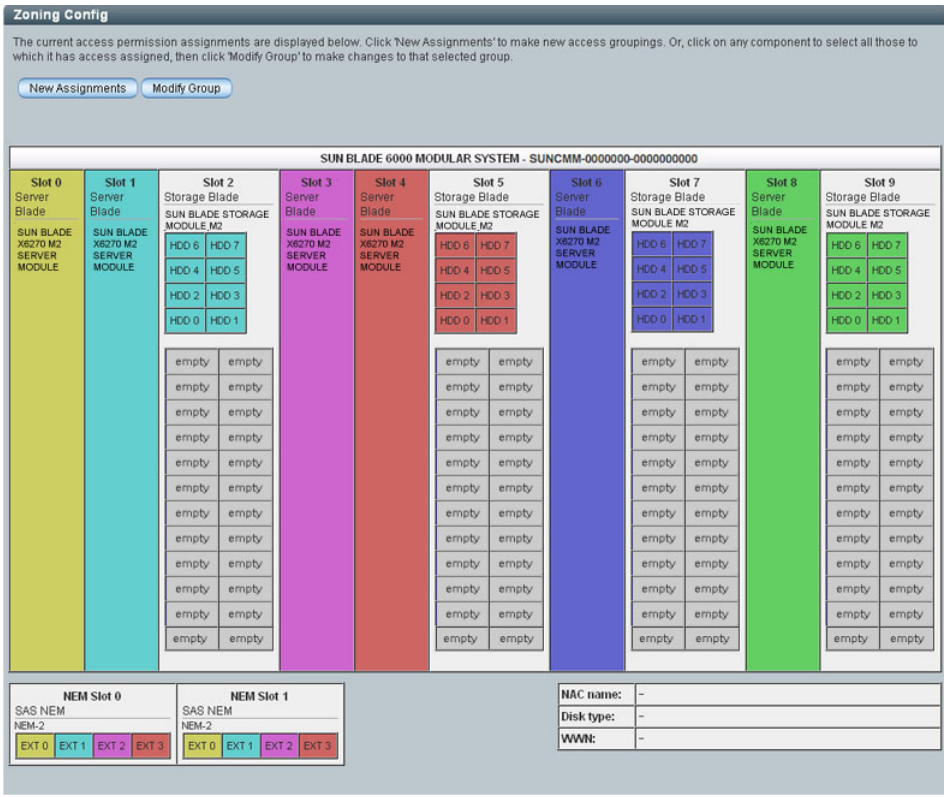
開始する前に: シャーシの構成が、71 ページの「サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成」の要件を満たしていることを確認します。

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 「Sun Blade Zone Manager」セクションで、「Detailed Setup」ボタンをクリックします。

   シャーシの現在のゾーン構成が表示されます (次の図を参照)。

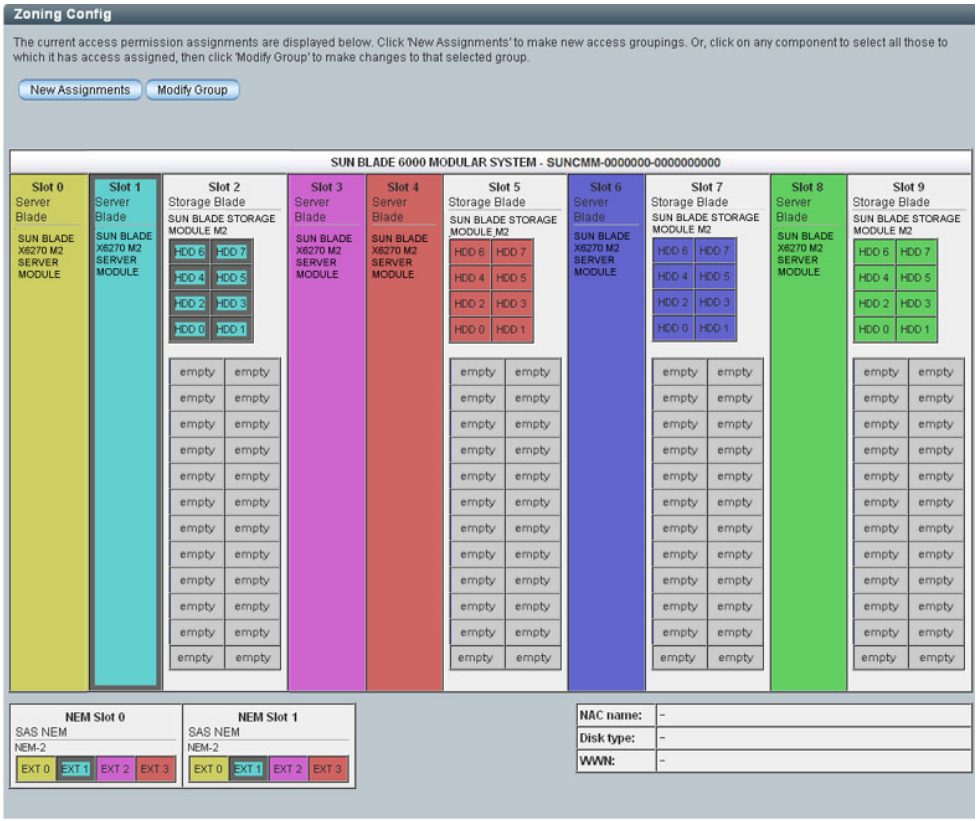


注 – ストレージデバイスが接続されていない HDD スロットは「empty」と表示されます。このようなスロットはサーバーブレードに割り当てることができません。

---

3. ブレードまたはストレージのグループを変更するには、このグループを構成するブレードを選択します。

   グループに割り当てられているストレージが強調表示されます。

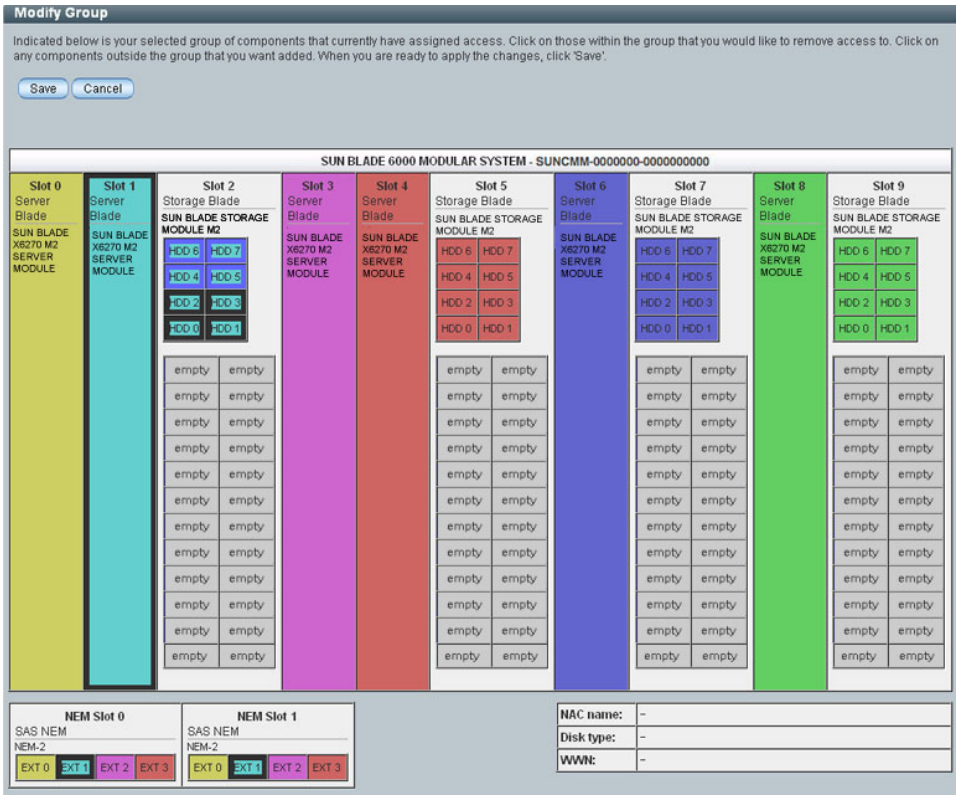


4. 「Modify Group」ボタンをクリックします。

   選択したグループはまだ強調表示されたままです。

5. グループのストレージデバイスを削除するには、そのストレージデバイスをクリックします。

   次の図は、スロット 1 のプロセッサブレードから割り当てを解除するために選択された HDD 4-7 を示しています。



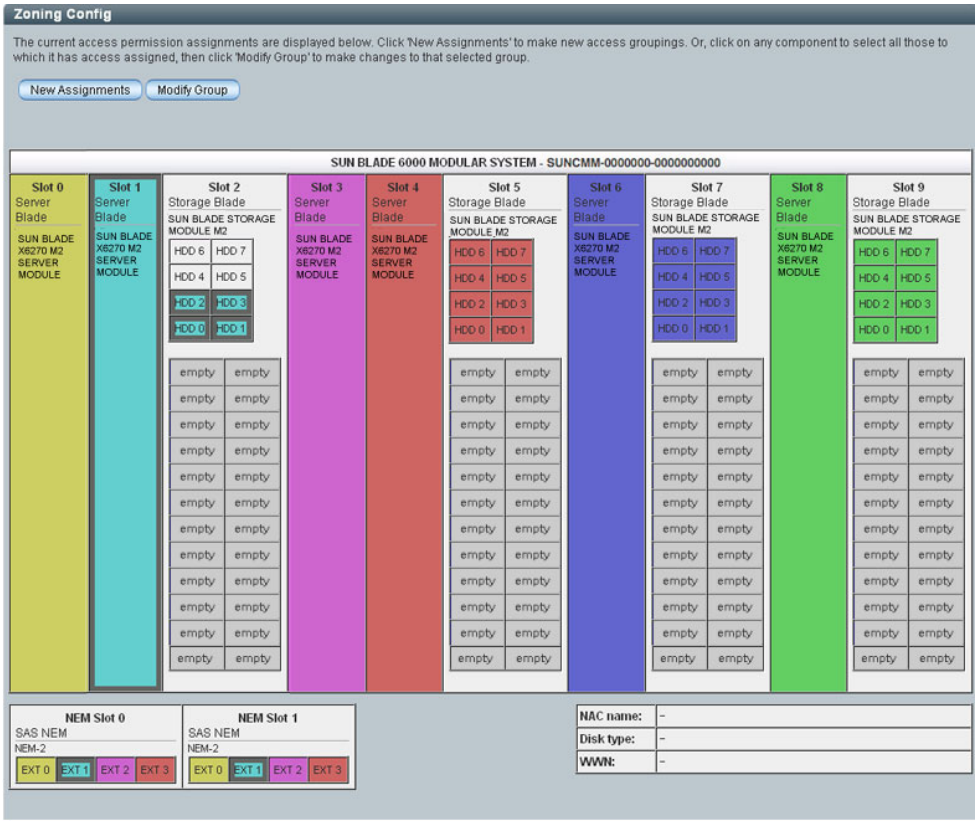
6. 「Save」をクリックして、グループからストレージデバイスを削除します。

   構成を保存した時の結果の詳細については、103 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の保存」を参照してください。

7. 追加でストレージの割り当てを行わない場合は、構成をバックアップします。

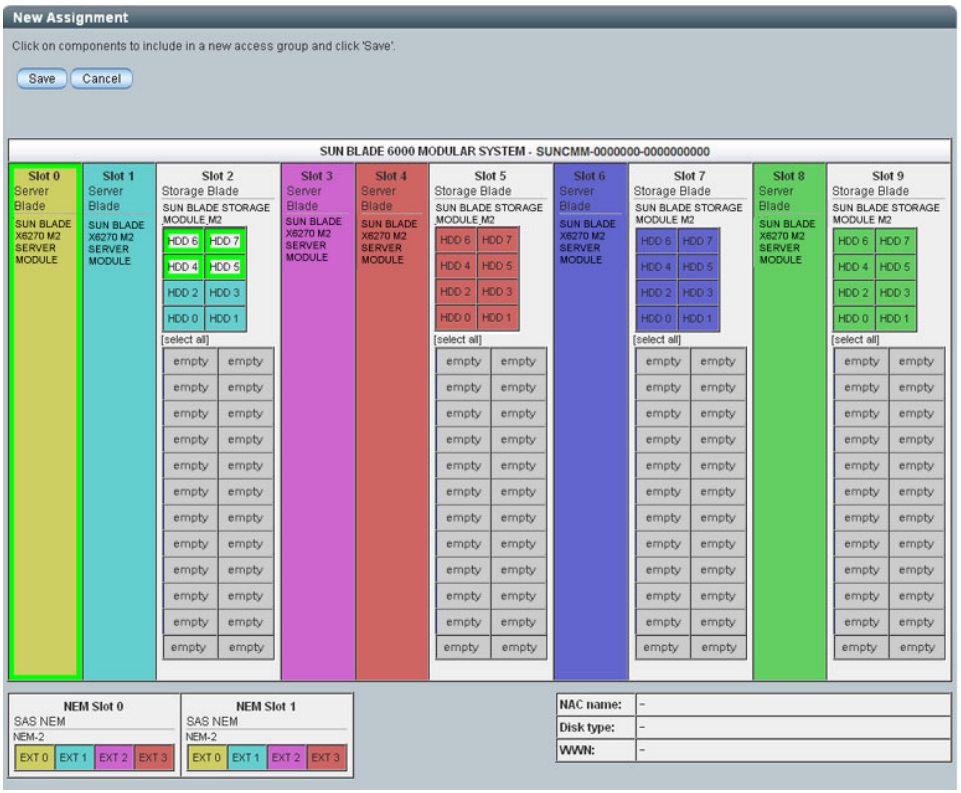
   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

8. 新規にストレージグループの割り当てを行うには、「New Assignments」ボタンをクリックします。



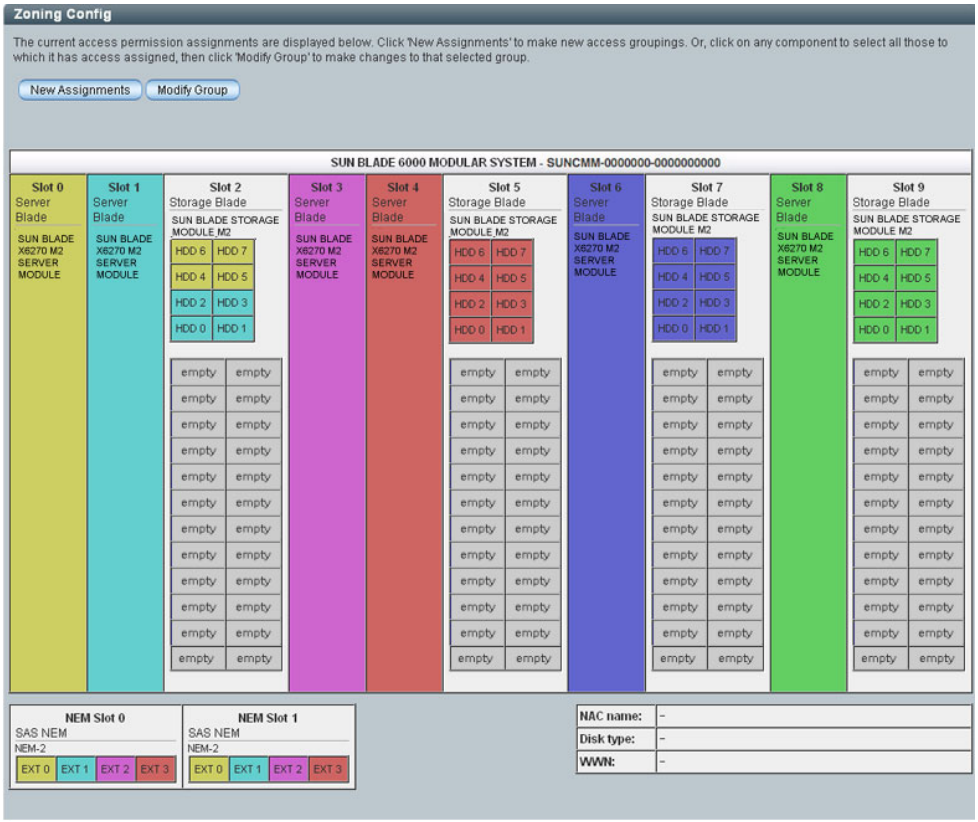
9. グループに追加するサーバーブレードおよびストレージデバイスをクリックします。

   次の例では、選択したストレージグループが緑色で強調表示されています。



10. 「Save (保存)」をクリックします。

これで、HDD 4-7 がスロット 0 に割り当てられます。



11. 構成をバックアップします。

    106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

▼ CLI を使用してシャーシのストレージ構成を表示および変更する

開始する前に: Quick Setup または Detailed Setup を使用して、シャーシの初期のゾーン構成を設定します。78 ページの「シャーシのストレージアクセス構成の作成」を参照してください。

1. CLI を使用して Zone Manager にアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. **サーバーブレードへのストレージデバイスの割り当てを表示するには、サーバーブレード単位またはストレージモジュール単位のいずれでも表示することができます。**

   次の例では、スロット 2 にあるストレージブレードの HDD0 と HDD1 がスロット 0 にあるサーバーブレードに割り当てられています。

   - サーバーブレード単位でストレージの割り当てを表示するには、ホストブレードの SAS ゾーンのディレクトリを指定して show コマンドを実行します。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show /STORAGE/sas_zoning/BL0

   Targets:
      0      (/CH/BL2/HDD0)
      1      (/CH/BL2/HDD1)
```

     この例では、スロット 2 にあるストレージブレードの HDD0 と HDD1 がスロット 0 にあるサーバーブレードに割り当てられています。

   - ストレージデバイス単位でストレージの割り当てを表示するには、そのストレージデバイスについて、ストレージブレードの SAS ゾーンのディレクトリを指定して show コマンドを実行します。たとえば、次のように表示されます。

```
-> show /STORAGE/BL2/HDD0

   Targets:
      0      (/CH/BL0)

-> show /STORAGE/BL2/HDD1

   Targets:
      0      (/CH/BL0)
```

3. **ストレージ割り当てを変更します。**

   サーバーブレードへのストレージデバイスの割り当ての変更や、ストレージデバイスへのサーバーブレードの割り当ての変更ができます。いずれの方法でも同じ結果が得られます。

   方法 1: サーバーブレードへのストレージのアクセスを追加または削除します。

   - ストレージモジュールをサーバーブレードに割り当てるには、次のコマンドを実行します。

     -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL***n*
     -> **set add_storage_access=***path_to_storage_device*

- ストレージモジュールをサーバーブレードから削除するには、次のコマンドを実行します。

  -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL*n***
  -> **set remove_storage_access=***path_to_storage_device*

  ここでは、BL*n* はサーバーブレード、*path_to_storage_device* はそのブレードに割り当てるストレージデバイスのパスを表します。(/CH/BL1/HDD0 など)。

方法 2: ストレージブレードへのサーバーブレードのアクセスを追加または削除します。

- サーバーブレードをストレージデバイスに割り当てるには、

  次のいずれかのコマンドを実行します。

  -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL*n*/HDD*n***

  さらに次のコマンドを実行します。
  -> **set add_host_access=***path_to_blade_server*

- サーバーブレードをストレージデバイスから削除するには、

  次のいずれかのコマンドを実行します。

  -> **cd /STORAGE/sas_zoning/BL*n*/HDD*n***

  さらに、次のコマンドを実行します。
  -> **set remove_host_access=***path_to_blade_server*

ここでは、BL*n* はストレージブレード、HDD*n* はそのストレージブレードに取り付けられているストレージデバイス、*path_to_blade_server* はそのストレージデバイスに割り当てるサーバーのパスを表わします (/CH/BL0 など)。

注 – また、単一のコマンド行で複数のデバイスを追加または削除することも可能です。デバイスへのフルパスを指定し、各デバイスはコンマで区切ります (スペースなし)。たとえば、-> **set add_storage_access=/CH/BL1/HDD0,/CH/BL1/HDD1** と入力します。

---

4. **構成をバックアップします。**

   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

▼ Web インタフェースを使用して複数のサーバーブレードをストレージデバイスに割り当てる

Sun Blade Zone Manager では、複数のサーバーブレードを 1 つのストレージデバイスに割り当てることができます。このオプションは、Oracle でサポートされるクラスタ化ソリューションでのみ使用します。詳細については、ブレードストレージモジュールの管理マニュアルを参照してください。

注 – 他のサーバーとストレージを共有するようにサーバーモジュールが有効化されているかどうかについては、サーバーブレードのドキュメントを確認してください。

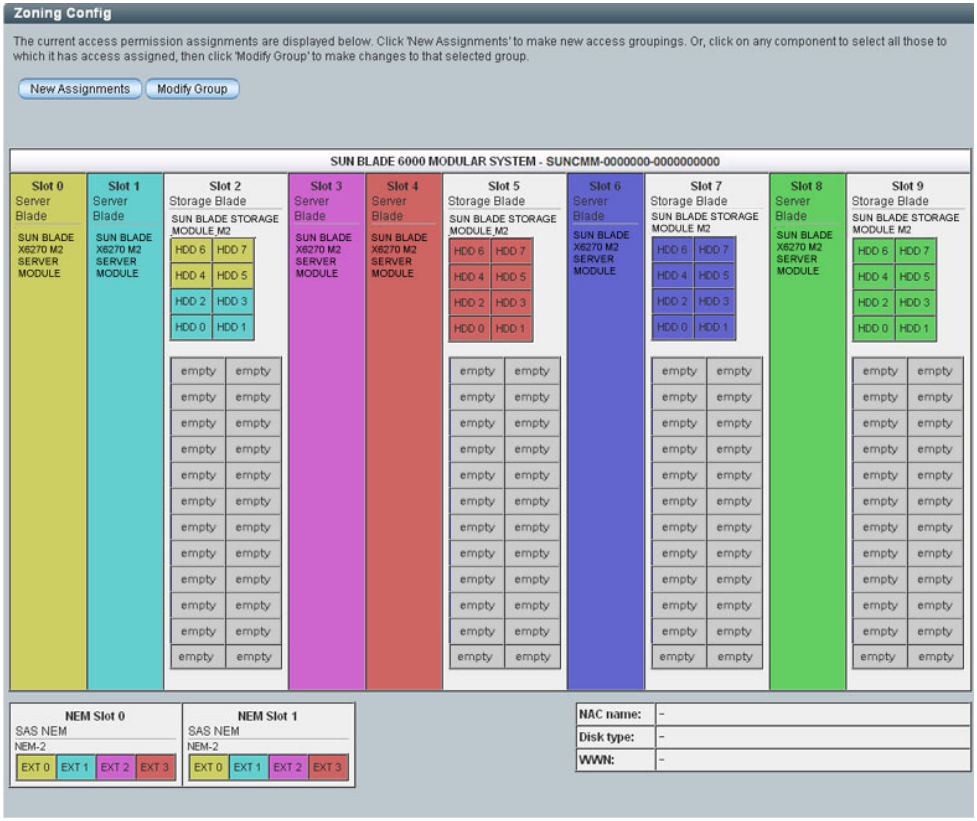
---

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

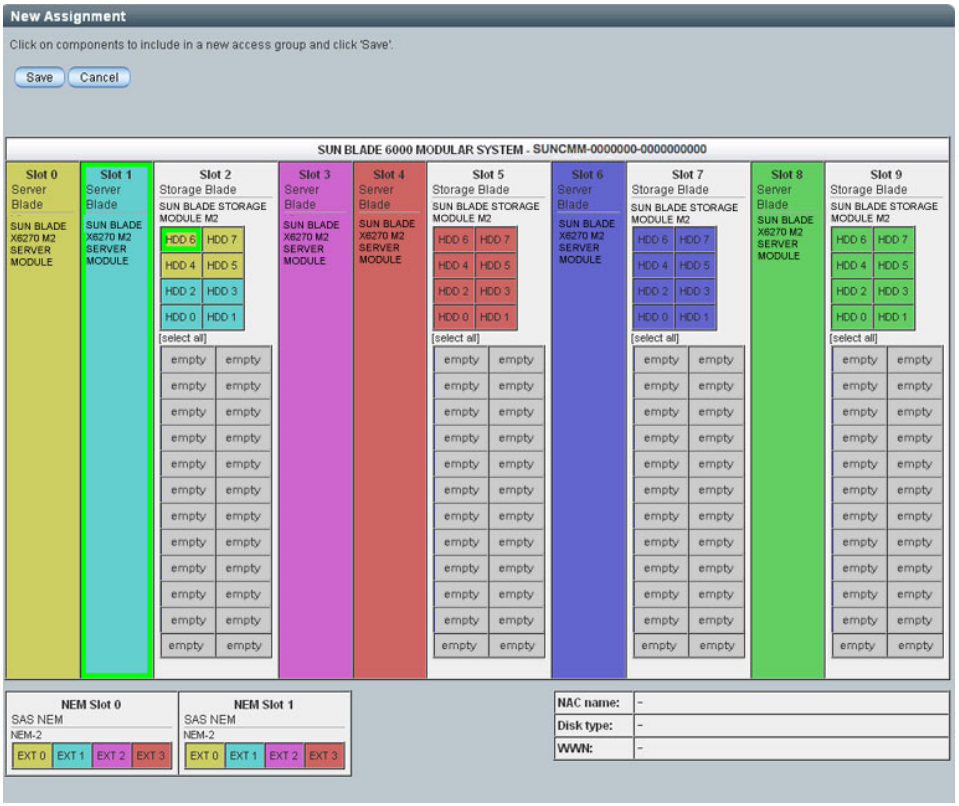
2. 「Sun Blade Zone Manager」セクションで、「Detailed Setup」ボタンをクリックします。

   次の例では、ストレージモジュールのスロット 2 にある HDD6 は、スロット 0 のサーバーブレードのみに割り当てられています。



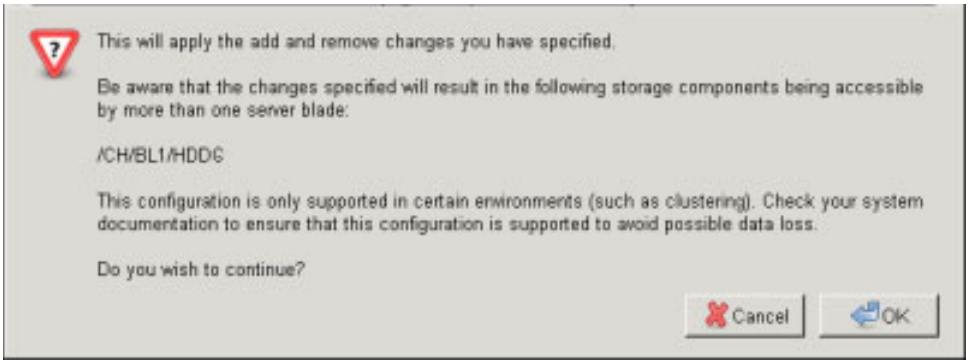
3. 「New Assignments」をクリックします。

4. スロット 0 のサーバーブレードとスロット 1 のサーバーブレードの両方に HDD6 を割り当てるには、スロット 1 をクリックし、スロット 2 の HDD6 をクリックします。



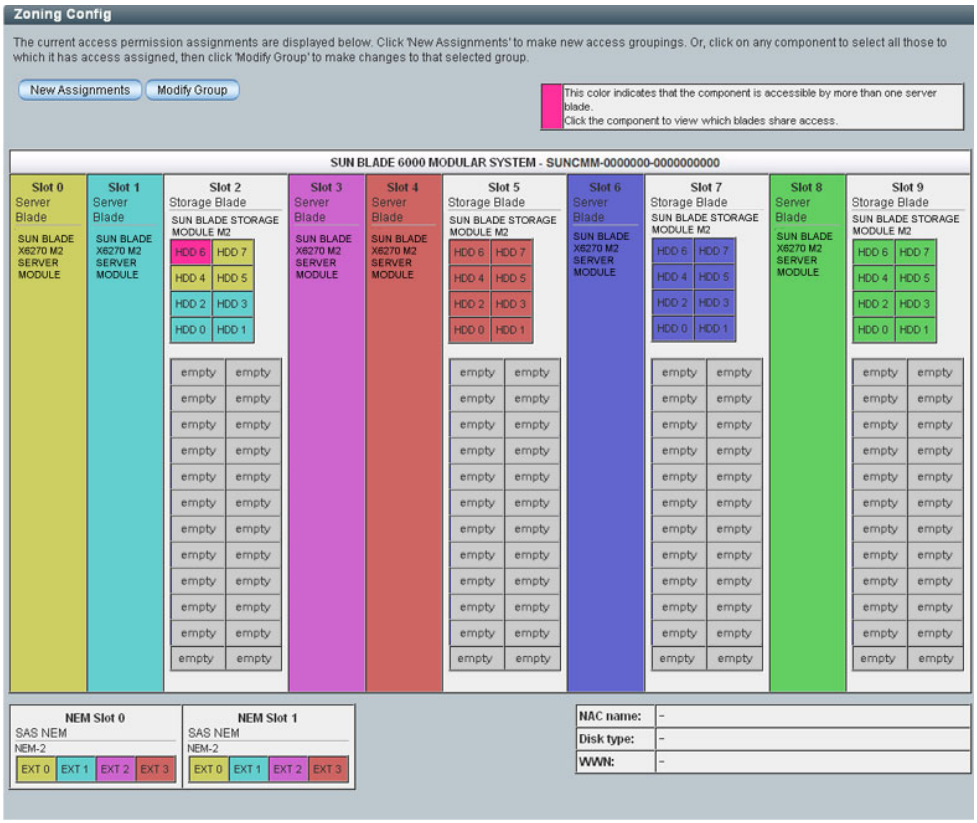
5. 「Save (保存)」をクリックします。

   次のメッセージが表示されます。



6. 「OK」をクリックして続行します。

   次の例では、スロット 2 の HDD6 が複数のサーバーブレードによって共有されていることを表すためにピンク色で示されています。



7. 構成をバックアップします。

   106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

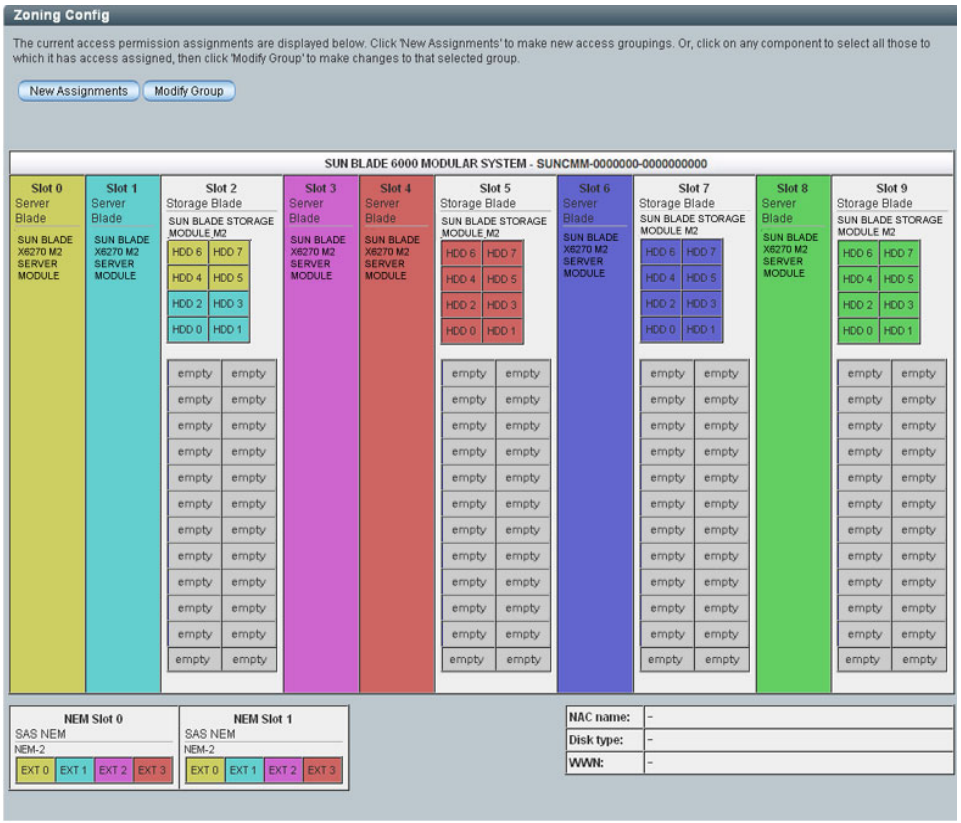
▼ Web インタフェースを使用してストレージアクセス構成表を表示する

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 「Sun Blade Zone Manager」セクションで、「Detailed Setup」ボタンをクリックします。

   次の図は、ストレージアクセス構成の例です。

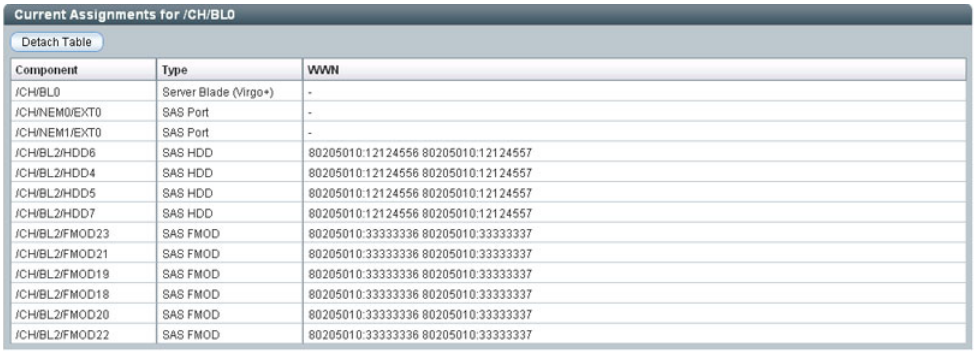


3. サーバーブレードのいずれかのスロットを選択します。

   この例では、スロット 0 が選択されています。

4. 「Current Assignments」表までスクロールダウンします。

   選択したサーバーブレードについて、ストレージデバイスのすべての割り当てが表形式で表示されます。



Current Assignments for /CH/BL0

Detach Table

Component	Type	WWN
/CH/BL0	Server Blade (Virgo+)	-
/CH/NEM0/EXT0	SAS Port	-
/CH/NEM1/EXT0	SAS Port	-
/CH/BL2/HDD6	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD4	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD5	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD7	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/FMOD23	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD21	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD19	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD18	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD20	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD22	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337

5. 画面の他の部分から表を切り離すには、「Detach Table」をクリックします。

[Close]

Current Assignments for /CH/BL0

Component	Type	WWN
/CH/BL0	Server Blade (Virgo+)	-
/CH/NEM0/EXT0	SAS Port	-
/CH/NEM1/EXT0	SAS Port	-
/CH/BL2/HDD6	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD4	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD5	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/HDD7	SAS HDD	80205010:12124556 80205010:12124557
/CH/BL2/FMOD23	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD21	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD19	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD18	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD20	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337
/CH/BL2/FMOD22	SAS FMOD	80205010:33333336 80205010:33333337

シャーシのストレージアクセス構成の保存

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
シャーシのストレージアクセス構成の保存	• 103 ページの「ゾーン構成の保存に関する重要な考慮事項」 • 104 ページの「新規または変更したストレージアクセス構成の保存」	• CMM

ゾーン構成の保存に関する重要な考慮事項

ストレージアクセス構成を保存する場合は、次の事に留意します。

- 構成情報は、SAS-2 NEM とストレージブレードとともに保存されます。ゾーンのハードウェア構成が変更されると、ゾーン構成が失われることがあります。ゾーン構成は、保存後すぐにバックアップしてください。106 ページの「ストレージアクセス構成のバックアップ」を参照してください。

ストレージブレードや NEM のコンポーネントのホットプラグを行う影響の詳細については、ストレージブレードまたは NEM のドキュメントを参照してください。

- 保存処理の進行中は、「Zone Manager」ウィンドウを閉じないでください。保存処理の進行中に「Zone Manager」ウィンドウを閉じると、ウィンドウが閉じる前に処理された部分の構成しか保存されません。
- 保存処理の進行中は、ゾーン機能の割り当てに含まれるすべてのコンポーネントの削除や電源再投入を行わないでください。ゾーン構成が正しく保存されなくなります。

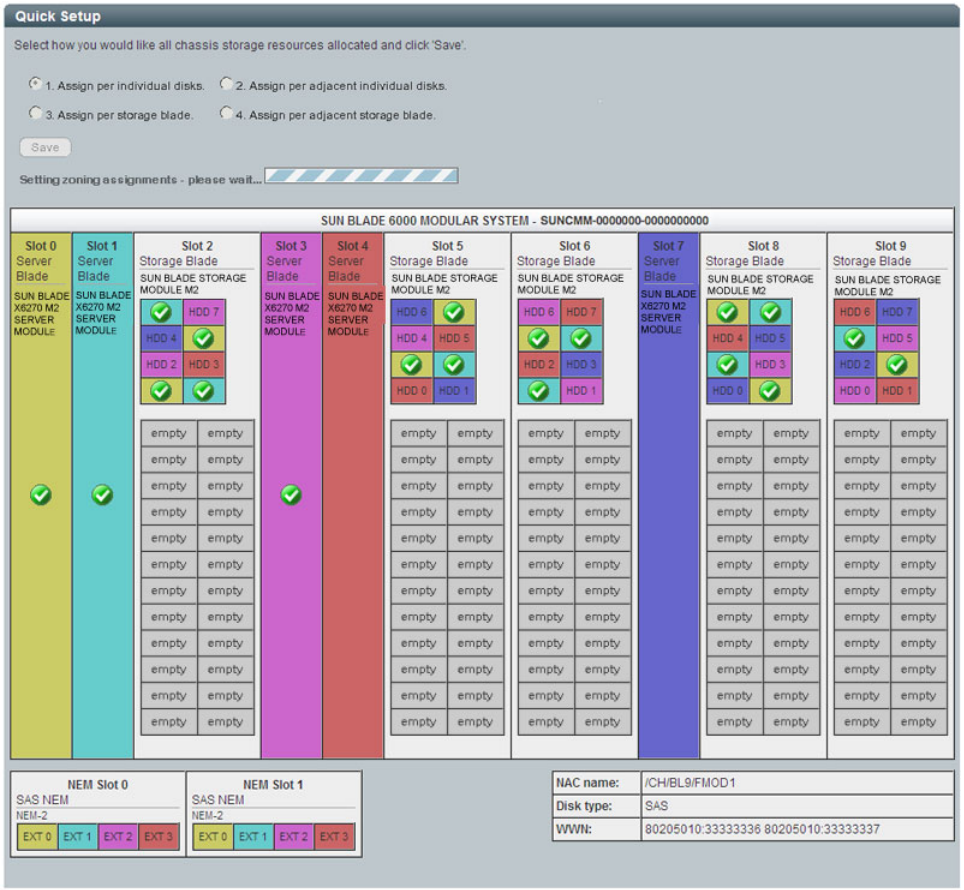
新規または変更したストレージアクセス構成の保存

新規または変更したストレージアクセス構成は、Oracle ILOM の Web インタフェースまたは CLI を使用して保存することができます。

- **Web インタフェースの場合:** Quick Setup または Detailed Setup でストレージアクセスの割り当てを行った後、「Save」ボタンをクリックします。
- **CLI の場合:** `set` コマンドでストレージ割り当てを実行すると、すぐに構成が保存されます。

新規構成が保存される時は、次の処理が実行されます。

- Quick Setup では、既存の構成が上書きされます。
- 構成の保存中は、すべてのストレージ制御が無効になります。
- Web インタフェースでは、新しい構成が適用された箇所がチェックマークで示されます。



- Web インタフェースでは、ストレージ構成が保存された時点でセットアップ完了のメッセージが表示されます。

ストレージアクセス構成のバックアップ

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ストレージアクセス構成のバックアップ	• 106 ページの「Web インタフェースを使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する」 • 107 ページの「CLI を使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する」	• CMM

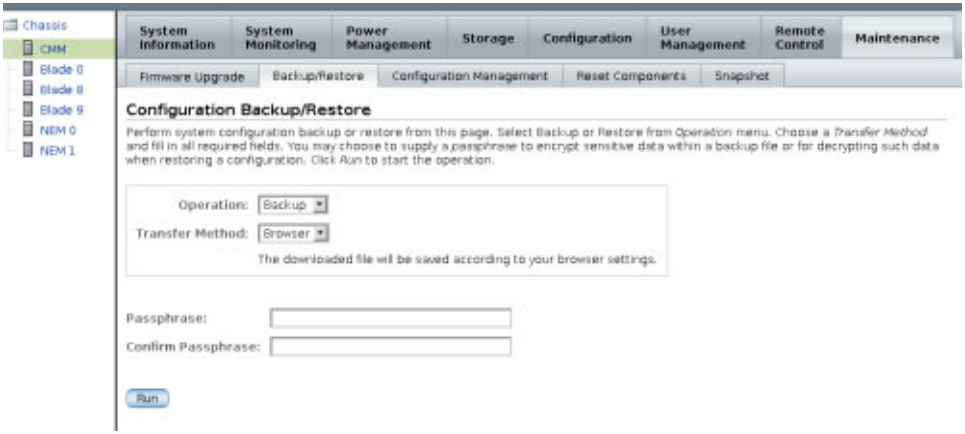
▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する

1. 「Quick Setup」画面または「Detailed Setup」画面で構成を保存した後、「CMM」の「Maintenance」タブをクリックします。

   CMM の保守に関するサブタブが表示されます。

2. 「Backup/Restore」タブをクリックします。

   「Configuration Backup/Restore」ページが表示されます。



3. 「Operation」ドロップダウンリストから「Backup」を選択します。

4. このページに情報を入力して、バックアップファイルを作成します。

   Oracle ILOM Backup/Restore の使用についての詳しい手順については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web インタフェース手順ガイド』を参照してください。

▼ CLI を使用してゾーン構成をバックアップファイルに保存する

1. ストレージアクセス構成を設定した後、ディレクトリを `/SP/config` に変更します。

   -> **`cd /SP/config`**

2. 機密性のあるデータ (パスワード、SSH キー、証明書など) をバックアップする場合は、パスフレーズを指定する必要があります。

   -> **`set passphrase=`***passphrase*

3. バックアップ操作を開始するには、次のコマンドを入力します。

   -> **`set dump_uri=`**

   transfer_method://*username*:*password*@*ipaddress_or_hostname*/*directorypath*/*filename*.**`config`**

   コマンド行の各可変部分の内容は次のとおりです。

   - *transfer_method* には、tftp、ftp、sftp、scp、http、https を指定できます。
   - *username* は、リモートシステムでのユーザーアカウント名です。(*username* は、scp、sftp、および ftp の場合に必要です。*username* は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)。
   - *password* は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。(*password* は、scp、sftp、および ftp では必須です。*password* は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)。
   - *ipaddress_or_hostname* は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
   - *directorypath* は、リモートシステムのストレージの位置です。
   - *filename* は、バックアップファイルに割り当てられた名前です。

   Oracle ILOM Backup/Restore の使用についての詳しい手順については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』を参照してください。

ゾーン構成の復元

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ゾーン構成の復元	• 108 ページの「Web インタフェースを使用してゾーン構成を復元する」 • 110 ページの「CLI を使用してゾーン構成を復元する」	• CMM

▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成を復元する

事前に、復元するゾーン構成が含まれている Oracle ILOM CMM 設定ファイルのバックアップを作成しておく必要があります。

注 – 上級ユーザーや Oracle の技術者向け: Oracle ILOM CMM 設定のバックアップファイルは XML ファイルです。Oracle ILOM CMM 設定のバックアップファイルが複数あり、必要なゾーン構成が最新のバージョンに保存されていない場合は、あるファイルからストレージ割り当てセクションをコピーし、別のファイルに貼り付けることができます。これを行うには、復元するゾーン構成のストレージモジュールとサーバーブレードが同じ物理スロットに存在している必要があります。この手順の実行方法の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』を参照してください。

---

1. **Web ブラウザを開き、次の URL を入力して CMM にログインします。**

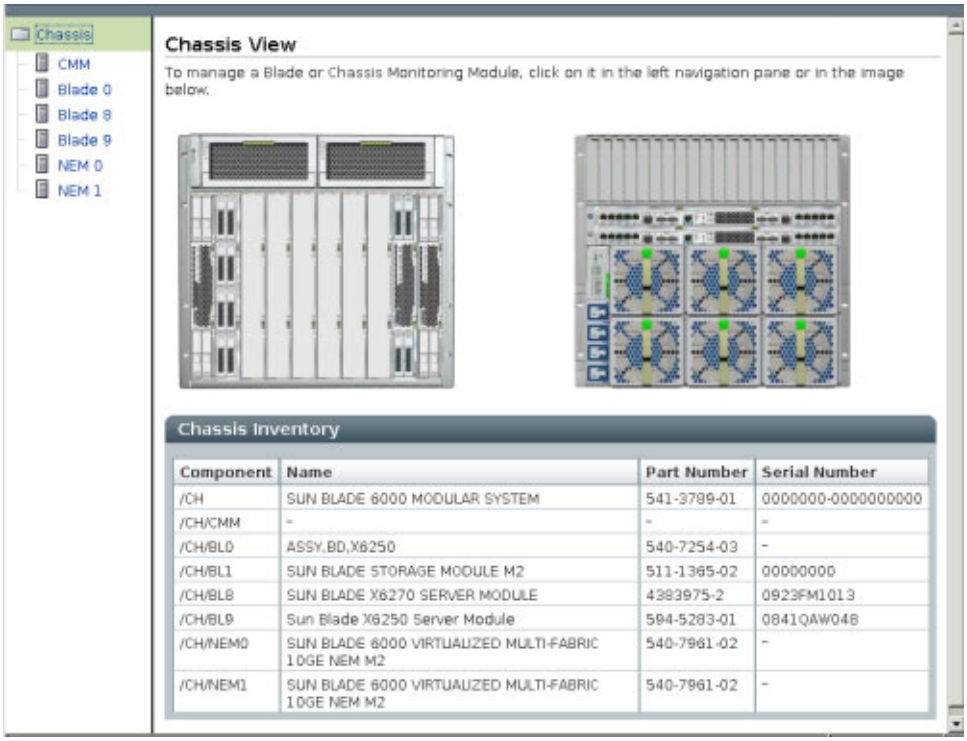
   `http://`*chassis_sp_ipaddress***`/`**

   chassis_sp_ipaddress は、シャーシのサービスプロセッサの IP アドレスです。

   Oracle ILOM のログインページが表示されます。

2. **`root` としてログインします。**

   Oracle ILOM CMM のメインページが表示されます。

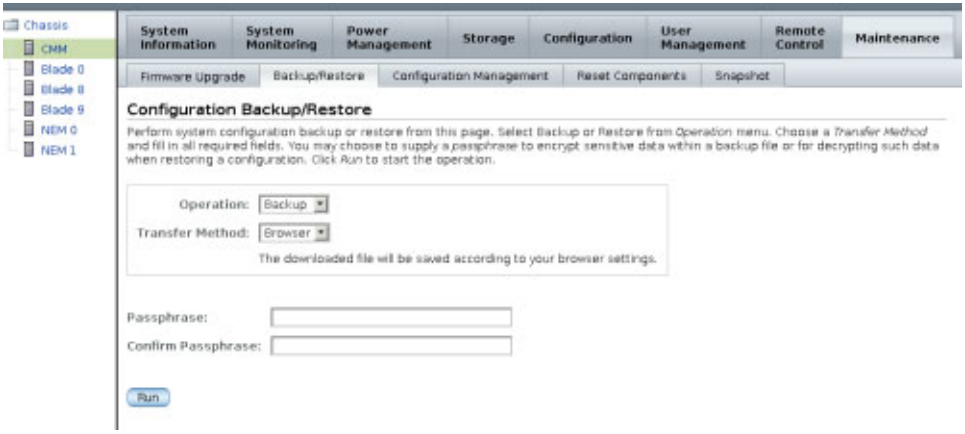


3. 「Chassis」ナビゲーション区画で「CMM」を選択した状態で、CMM の「Maintenance」タブをクリックします。

   CMM の保守に関するサブタブが表示されます。

4. 「Backup/Restore」タブをクリックします。

   「Configuration Backup/Restore」ページが表示されます。



5. **「Operation」ドロップダウンリストから「Restore」を選択します。**

   ページの情報を入力して、バックアップファイルを復元します。

   Oracle ILOM Backup/Restore の使用についての詳しい手順については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web インタフェース手順ガイド』を参照してください。

6. **復元操作を開始するには、「Run」をクリックします。**

   復元操作が実行されます。

注 – 復元処理の実行中は、Oracle ILOM SP のセッションは一時停止します。復元操作が完了すると、セッションは通常の処理を再開します。通常、復元操作が完了するまで 2 ～ 3 分かかります。

▼ CLI を使用してゾーン構成を復元する

事前に、復元するゾーン構成が含まれている Oracle ILOM CMM 設定ファイルのバックアップを作成しておく必要があります。

注 – 上級ユーザーや Oracle の技術者向け: Oracle ILOM CMM 設定のバックアップファイルは XML ファイルです。Oracle ILOM CMM 設定のバックアップファイルが複数あり、必要なゾーン構成が最新のバージョンに保存されていない場合は、あるファイルからストレージ割り当てセクションをコピーし、別のファイルに貼り付けることができます。これを行うには、復元するゾーン構成のストレージモジュールとサーバーブレードが同じ物理スロットに存在している必要があります。この手順の実行方法の詳細については、『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』を参照してください。

---

1. **端末ウィンドウを開き、次のコマンドを入力して CMM への SSH 接続を確立します。**

   # **`ssh -l root`** *cmm_ipaddress*

   ここでは、*cmm_ipaddress* は、CMM の IP アドレスを表します。

   ログインプロンプトが表示されます。

2. **次に示すように、`root` としてログインしてルートパスワードを入力します。**

   /*hostname*/`login`: **`root`**

   パスワード: *xxxxxxxx*

   正常にログインすると、次の CLI プロンプトが表示されます。

   ->

3. 次のコマンドを実行してディレクトリを /SP/config に変更します。

   -> **cd /SP/config**

4. 復元操作を開始するには、次のコマンドを入力します。

   -> **set load_uri=**

   transfer_method://username:password@ipaddress_or_hostname/directorypath/filename.**config**

   コマンド行の各可変部分の内容は次のとおりです。

   - *transfer_method* には、tftp、ftp、sftp、scp、http、https を指定できます。
   - *username* は、リモートシステムでのユーザーアカウント名です。(*username* は、scp、sftp、および ftp の場合に必要です。*username* は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)。
   - *password* は、リモートシステムでのユーザーアカウントのパスワードです。(*password* は、scp、sftp、および ftp では必須です。*password* は、tftp では使用されず、http および https では省略可能です)。
   - *ipaddress_or_hostname* は、リモートシステムの IP アドレスまたはホスト名です。
   - *directorypath* は、リモートシステムのストレージの位置です。
   - *filename* は、バックアップファイルに割り当てられた名前です。

   復元操作が実行されます。

ゾーン構成のリセット

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ゾーン構成のリセット	• 111 ページの「Web インタフェースを使用してゾーン構成をリセットする」 • 112 ページの「CLI を使用してゾーン構成をリセットする」	• CMM

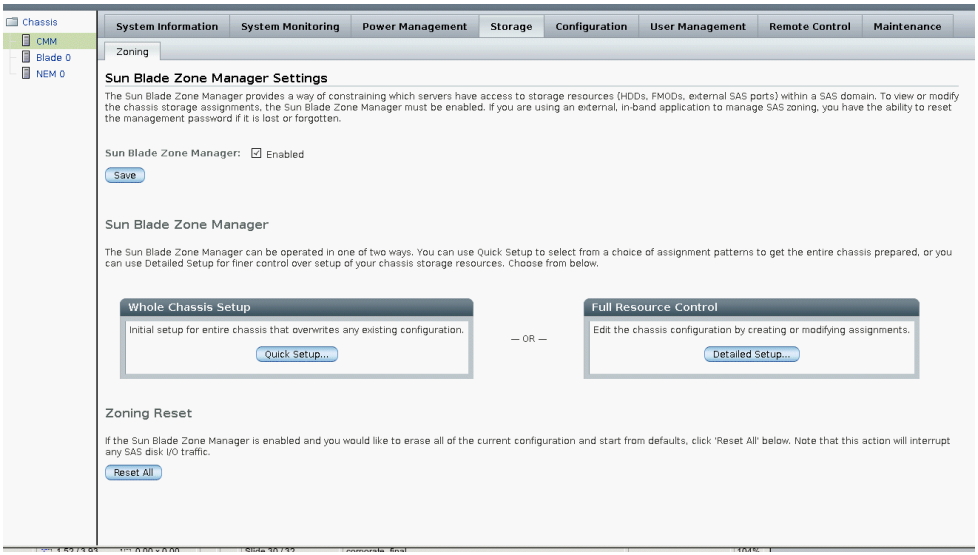
▼ Web インタフェースを使用してゾーン構成をリセットする

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 「Storage」、「Zoning」の順にクリックします。

   ゾーン機能が有効になっている場合は、「Zone Manager Settings」ページの「Reset All」ボタンを使用できます。



3. 「Reset All」ボタンをクリックして、現在のゾーン機能の割り当てをリセットします。

▼ CLI を使用してゾーン構成をリセットする

1. CMM CLI を使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、`-/STORAGE/sas_zoning` に移動します。

   ```
   -> cd /STORAGE/sas_zoning
   ```

3. 次のコマンドを実行して、現在のゾーン機能の割り当てをリセットします。

   ```
   -> set reset_access_action=true
   ```

   Zone Manager が無効になっている場合は、次の警告が表示されます。

   ```
   set: The CMM is not the SAS Zone Manager
   ```

   このメッセージが表示された場合は、Zone Manager を有効にし、リセットのコマンドを再度実行します。

ゾーンのパスワードのリセット

説明	リンク	プラットフォーム機能のサポート
ゾーンのパスワードのリセット	• 113 ページの「Web インタフェースを使用してゾーンのパスワードをリセットする」 • 114 ページの「CLI を使用してゾーンのパスワードをリセットする」	• CMM

注 – ゾーンのパスワードは、ホスト OS で実行されている帯域内のゾーン管理アプリケーションでのみ要求されます。このようなアプリケーションを使用していて、ゾーンのパスワードを紛失したり、忘れたりした場合は、このパスワードをデフォルト値 (すべてゼロ) に戻します。パスワードをリセットするには、Sun Blade Zone Manager を無効にする必要があります。

▼ Web インタフェースを使用してゾーンのパスワードをリセットする

1. Sun Blade Zone Manager へアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 「Storage」、「Zoning」の順にクリックします。

   ゾーン機能が無効になっている場合は、「Zoning」ページの「Reset Password」ボタンを使用できます。

3. 「Reset Password」ボタンをクリックして、パスワードをデフォルト (すべてゼロ) にリセットします。

▼ CLI を使用してゾーンのパスワードをリセットする

1. CMM CLI を使用して Sun Blade Zone Manager にアクセスします。

   72 ページの「Sun Blade Zone Manager へのアクセス」を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、`-/STORAGE/sas_zoning` に移動します。

   ```
   -> cd /STORAGE/sas_zoning
   ```

3. 次のコマンドを実行して、現在のゾーン機能の割り当てをリセットします。

   ```
   -> set reset_password_action=true
   ```

   パスワードがデフォルト (すべてゼロ) に設定されます。

索引

C

CLI
- CLI を使用した Sun Blade Zone Manager のシャーシのストレージ構成の作成, 88
- CLI を使用したストレージ構成の表示および変更, 96
- CMM ILOM ファームウェアを更新するために使用, 33
- CMM のリセット, 46
- Ethernet ポートの有効化, 21
- Ethernet 管理ポートの CLI
  - ファームウェアのバージョンを確認するために使用, 29
- Sun Blade Zone Manager, 67
- Sun Blade Zone Manager へのアクセスおよび有効化, 76
- コンポーネントのファームウェアの更新, 44
- シリアル管理ポートの CLI
  - ファームウェアのバージョンを確認するために使用, 29
- ブレード SP プロンプトの変更, 22
- ログイン, 18, 19
- ストレージのゾーン構成のバックアップ, 107
- ストレージのゾーン構成のリセット, 112
- ストレージのゾーン構成の復元, 110
- ゾーンのパスワードのリセット, 114

CMM ILOM のバージョン, 3

CMM ILOM の概要, 2

CMM ILOM への初回ログイン, 17

CMM ILOM への接続
- DHCP, 11
- シリアル接続, 8
- 静的 IP アドレスの設定, 9, 11

CMM ILOM へのログイン
- CLI の使用, 19
- Web インタフェースの使用, 18

CMM の Ethernet ポート、有効化, 19

CMM のリセット
- CLI の使用, 46
- Web インタフェースの使用, 46

D

DHCP
- CMM の IP アドレスへのアクセス, 11

E

Ethernet ポート
- CLI による有効化, 21
- Web インタフェースによる有効化, 20

I

ILOM CLI インタフェース
- ログイン, 19

ILOM のバージョン番号, xii

IP アドレスの割り当て
- CLI を使用した編集, 11

S

Sun Blade Zone Manager
- CLI, 67
- CLI を使用したアクセス, 76
- CLI を使用した有効化, 76
- Web インタフェースを使用したアクセス, 72
- Web インタフェースを使用した有効化, 72
- サポートされるハードウェアおよびファームウェアの構成, 71
- ストレージアクセス構成の保存, 103
- ストレージデバイスへの複数のサーバーブレードの割り当て, 98
- サポートされる ILOM インタフェース, 64
- シャーシのストレージアクセス構成の作成
  - CLI の使用, 88
  - Detailed Setup の使用, 85
  - Quick Setup の使用, 79, 83
- ストレージアクセス構成表, 101
- ストレージ構成の表示および変更
  - CLI の使用, 96
  - Web インタフェースの使用, 91
- ゾーンのパスワードのリセット
  - CLI の使用, 114
  - Web インタフェースの使用, 113
- ゾーン構成のバックアップ
  - CLI の使用, 107
  - Web インタフェースの使用, 106
- ゾーン構成のリセット
  - CLI の使用, 112
  - Web インタフェースの使用, 111
- ゾーン構成の復元
  - CLI の使用, 110
  - Web インタフェースの使用, 108

Sun Blade Zone Manager の Detailed Setup, 85

Sun Blade Zone Manager の Quick Setup, 79, 83

Sun Blade Zone Manager のストレージアクセス構成表, 101

W

Web インタフェース
- CLI を使用したストレージ構成の表示および変更, 91
- CMM のリセット, 46
- Ethernet ポートの有効化, 20
- Sun Blade Zone Manager へのアクセスおよび有効化, 72
- ストレージのゾーン構成のバックアップ, 106
- ストレージのゾーン構成の復元, 108, 111
- ゾーンのパスワードのリセット, 113
- CMM ILOM ファームウェアを更新するために使用, 32
- コンポーネントのファームウェアの更新, 42
- ファームウェアのバージョンを確認するために使用, 28
- ログイン, 18

す

ストレージアクセス構成の保存, 103

ストレージデバイスに割り当てられる複数のブレード, 98

せ

静的 IP アドレス
- 設定, 9, 11

と

トピックのガイドライン, 1, 5, 25, 47, 63

ふ

ファームウェア
- CMM ILOM の更新, 26
  - CLI の使用, 33
  - Web インタフェースの使用, 32
- Sun Blade Zone Manager の要件, 71
- 現在の CMM バージョンの確認
  - Ethernet 管理ポートの CLI の使用, 29
  - Web インタフェースの使用, 28
  - シリアル管理ポートの CLI の使用, 29
- コンポーネントのファームウェアの更新, 41
  - CLI の使用, 44
  - Web インタフェースの使用, 42
- ダウンロード, 30

ブレード SP CLI プロンプト
- 変更, 22